八雲レポート

和尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
八雲レポート

【Ｎコード】
Ｎ４４２９Ｎ

【作者名】
和尚

【あらすじ】
全ては、あの流れ星の夜に始まった。いや、流れ星違ったけど。
少女・若葉がある日の夜、病院帰りにに出会った謎の少年……その正体は、なんと未来人！？　しかも、この時代に来た目的は……自由研究！？
それからというもの、色々な意味で規格外のこの少年に振り回される日々。買い物、病院、その他諸々に大忙し、平凡な日常はどこへ

やら！？
笑いあり、涙あり、ドラマありのバトルありでお送りしたいんです
けどさてどうなりますか？
「何で私がこんな目に……！？」　ｂｙヒロイン

病院と流れ星（前書き）

どうもはじめまして。『バカとキセキと恋姫†無双』の方で会ったことある方はこんにちは、和尚です。
このたび、この空想科学祭２０１０に参加させていただきました。
いや～……無謀ですね。

別の小説でコメディーは書いてるんですが、ＳＦはこれが初めてです。
スロースタートで登場人物が出てくるのが遅かったり、話の長さがバラバラだったりと、至らぬ点も多々あるかとは思いますが、暇な時にで結構ですんで、なにとぞお付き合いくだされば……と。

それでは、『八雲レポート』、ごゆるりとお楽しみください。

病院と流れ星

床……白い。
壁……白い。
天井……やっぱり白い。
どこもかしこも白。清潔感がある色、って理由で、建設当時に設計されたらしいんだけど、私……あんまり好きじゃないな、この色の、この病院。
何でって……そりゃまあ、理由は色々あるよ？　汚れが目立つとか、けっこうすぐに黄ばんじゃうとか（現在進行形で）
……でも、一番の理由は……

「……すぅ……すぅ……」
「……」

穏やかな寝息を立ててベッドの上で寝てる、青葉の赤い顔色が映えるから……かな。

私の弟、常磐青葉（ときわあおば）。中1。2日前から……病気で寝込んで、入院中。何の病気かって？　こっちが知りたいよ、そんなの。
顔が、額から首のあたりにかけて異常に赤くなってて、けど特に腫れてるわけでも、皮下出血してるわけでもない。熱は……今は平熱だけど、ピーク時は40度オーバーだった。おまけに、視界がかすむとか何とか言ってたっけ……。
医者は、解熱剤で熱が下がって『もう大丈夫』とか言ってたけど……絶対違う自信あるし。
（あれ絶対……風邪とかの苦しみ方じゃないよ……）
発症したその瞬間を間近で見た私は、そりゃもう怖かった。このまま青葉が死んじゃうんじゃないかってくらい、すごい苦しみ方だ

ったもん。顔なんて、みるみるうちに赤くなっていって……。
それから青葉は救急車でここに運ばれて、処置を受けた。咳とか熱とかは薬が効いて収まったけど……この、周囲の白い色に映えてしまう赤い顔色だけは治る気配無し。お医者さんは何かの炎症だろうから直に治るとか言ってたけど、そうは思えない……だって、炎症なら腫れるじゃん？
とは言うものの、嫌な予感だけが根拠の医学系知識ゼロの私の反論なんか通るはずもなく、青葉の病名は『風邪』で決まった。とりあえず入院、炎症が収まり次第退院……ってことになったけど……。何でだろう？　この赤い顔色が肌色に戻る様子が想像できない……。
やっぱりさ、これ……
「常磐さん？　もう面会時間終わりましたよ？」
「えっ？　あ、はい、すみません……」
あれ、もうこんな時間？　やれやれ……タイムアップかあ。
病室で1人ボーッとしてた私に、見回りの看護婦さんが声をかけてくれて、ようやく我に返る。青葉は……とっくに寝てるし。幸せそうな寝顔……。この顔だけ見てると、病気って風には見えないのよね……まあ、みんなそう言ってるし、そうであってほしいんだけど……。
「私の考えすぎ……なのかな……？」
誰に尋ねるでもない独り言を呟きつつ、私は荷物をまとめて帰る支度をした。明日また来よっと……。
……と、
（ん？）
ふと、窓の外に視線を向けた私の目に、あるものが映った。
すぐ近くにある海に、うっすら見える、風情のある（？）砂浜。すっかり暗くなった空。と言っても……そこら中に街灯やらネオンサインやらあるから、あんまり暗い感じはしないんだけど。ま、一応黒いことは黒い。暗黒。
その、墨汁ぶちまけたみたいに黒い空に、一筋の光が……飛行機

？　いや、それにしちゃ速いような……
（もしかして……流れ星！？）
わぁ、びっくり。私のこの１７年の人生で初めて見た。ホントにあるんだな……ちょっと嬉しい。嬉しいついでに……おとぎ話なんかにあるみたいに、願い事の１つも叶えてくれない、流れ星さん？
（……青葉が元気になりますように……）
気付くと、合掌して星に祈っているところだった。やれやれ、小１でサンタの正体を見破ってお父さんを落胆させた私が、まさか、こんなに真剣に迷信に祈る時が来るなんてね……自分でもおどろいた。ま、気休めにはなるかな。
それにしても、なんだかずいぶん長く見えてる流れ星ね……相当大きいのかな？　まだ燃え尽きないと見える。
輝きを保ったままどんどん高度が下がって……あれ？
え、ちょっと、それ以上はホントにその、落……

（……っ！？）

落ち……た……？
え、もしかして、あの位置は……海岸のあたり！？　マジで！？
「あ、今帰りですか、常磐さん。お気をつけ……と、常磐さん！？」
看護師さんが疑問系で返すのも当然なくらいのスピードで私は病院内を疾駆し、外に出た。あ、忘れ物無いか確認し忘れたけど……ま、いっか。明日また来るし。
それよりも……今は流れ星！　っていうか隕石！
確か、隕石ってマニアさんとかその手の研究機関には高く売れるって聞いた。欠片とかでも手に入れば……青葉の治療費の足しになるかも！　いや、風邪だしそんなかからないんだけど……念のため！
と、とにかく急ごう！　他の人が来るかもしれないし、是非その前に私が！

え、私？　自己紹介！？　ああ、確かにしてなかったけど……今？　ああもう急いでるのに！

私は、常磐若葉（ときわ わかば）！　１７歳！　高２！　よろしく！

じゃ、急ぐから！

病院と流れ星（後書き）

とまあ、スロースタートですが、これ以降のお話もぜひ。

それと、１つ連絡を。
全部の話をスムーズに読んでいただくことを考え、基本的にこれ以降、各話に前書き、あとがきはつけません。全体通してのあとがきを最終話に掲載しておく予定です。

それでは、これ以降もごゆっくり。

夜の砂浜の白学ラン

夜の海岸。
街灯も無いとなると、さすがに暗いなぁ……ちょっと不気味。
隕石が落ちたはずの浜辺には、運良く私以外の誰も探しに来ていなかった。これはラッキー、今の内に回収しちゃおう。肉眼で見えるくらいにあんだけはっきり落ちたんだから、クレーターなり何なり、相当はっきりした痕跡が残ってるはず……見つけるのは簡単よ！
……と、思ったんだけど……。

「無いなぁ……」
クレーターなんてどこにも、影も形もない。そんなバカな、けっこう大きかった風に見えたんだけどな……。
いや待った、そもそもちょっとおかしいわね……隕石が落下したってんなら、地響きの１つも起こっててもいいはずだし。けど……そんなの全然感じなかった。それに隕石って確か、こんな小さいやつでもその何十倍もの大きさのクレーターを残す……って話だったし。
極めつけはこの静かさ……ＮＡＳＡでもＪＡＸＡでも、衛星か何かでここに隕石落ちたって感知した人達が来ててもいいのに……。
まあ、そういう人達は組織だから対応が遅いにしても、野次馬の１人もいないって何……？　ここ来てから見た人って言えば、イチャついてるカップル数人と、バーベキューしてる大学生数人だし……。
まるで、私以外にこのことにだれも気付いてないみたいな……？
と、そんなことを考えながらペンライト片手に砂浜を見回していると、

「……ん？」
その視界の隅に……人影が映った。
誰だろ……またバーベキュー？　それとも今度こそ野次馬？　なんか海の方見て突っ立ってるみたいだけど……。
と、向こうも私に、おそらくは私のペンライトの明かりに気付いたらしく、こっちを振り向いた。私がペンライトを、顔に向けるのは不作法だから足元から膝上くらいまで向けると、その人の姿が暗闇に浮かび上がった。
……なんか……変わった服装だな……。
白い……学ラン？　え、白学ラン？　ホントにあるんだ、初めて見た……。
背丈は私と同じくらいだから、１７０弱かな？　顔は……よく見えないけど、メガネかけてる。髪の色……まではわかんない。男の子で、学生……よね、学ラン着てるし。
けどこの人、明かりも持たずにここで１人で何してんだろ？
と、
「あの……」
「え？」
その人が唐突に口を開いた。
「な、何か？」
「あ、すいません、警戒しないで下さい、怪しい者じゃないので……このへんの……地元の方ですか？」
「あ、はい、一応……」
まるで自分はそうじゃないみたいな言い方ね……旅行客？
「そうですか、あの、ここ……どこですかね？」
「ここ？　いや、青林浜ですけど……」
「青林浜……？」
聞くやいなや、その人はポケットから何やらケータイみたいなのを取り出した。ノートパソコンを思わせる、横開きの形状だ。
「えっと……あ、やっぱり到着予定地点と大分ずれてるなあ……。

プログラムは正常に稼働したはずなのに……」
「……？　あの……どうかしたんですか？」
この人……もしかして迷子？　何かブツブツ言ってるし……。いやでも、迷子になって海岸に出るとかある……？
「あの」
「はい？」
「えっと……今って西暦何年でした？」
「へ？　いや……」
普通に２０１０年でしょ？　ていうか……それが何か？
「２０１０年……？　時間座標までずれてる……さすがに抽象距離的に遠すぎたのかな……？　でも、演算上は問題なかったし、特にシステムに異常も誤作動も見られなかったのに……」
何か顎に手あててブツブツ言ってるけど……しかも、言ってる内容何一つわかんないし……。
……もしかしてこの人、関わっちゃいけないタイプのアレな人？
うわ……夜遅くに変なのと会っちゃったかも……。ここは何か変なこと言い出される前に、帰った方がいいって私の第六感が告げてる気　が……。と、とりあえず……

……あれ？

一旦目を離してから再び視線をその白学ランの少年に戻すと……そこには、その謎の少年の影も形もなくなっていた。
「え、うそ……何で！？」
消え……た……？　足音も何もしなかったのに……っていうか、こんだけ開けた砂浜なのに、見渡してみてもどこにもそれらしき人影が見えないし……第一、足跡も無いよ？
「も、もしかして……おばけ……？」
一気に背筋が寒くなるのを感じた。やば、これ……リアルに怖い……。

こ、これはきっと神様が、寄り道しないでさっさと帰りなさい、って言ってくれてるんだわ。品行方正は大事よね、うん。
あ、青葉には悪いけど……隕石は諦めてさっさと帰ろ……。
感覚的に寒いのに、背中は汗びっしょりという気持ち悪い感触に耐えつつ、私はこれ以上変なものが見える前に家に帰ることにした。

☆☆☆

「あの人、誰……っていうか、何でここにいたのかな……？　僕の姿は、誰にも見えないはずなのに……？」
もしもその時、常磐若葉が一瞬でも頭上の星空を見ていたら……見えたかも知れない。
その白学ランの彼が……地上５、６ｍほどの位置に、ふわふわと浮いている光景が……。

その名は八雲琥珀

昨日幽霊見た！　なんて言えるはずもなく。ってか言いたくもないし。

今日も今日とて、私は普通に学生生活を送りましたとさ。文句あるか。

いつも通り、適当に授業受けて、友達とおしゃべりして、お弁当食べて、部活動……は私入ってない。

入ってないんだけど……すぐには帰れないのよね、

なぜなら……私を狙う部活動勧誘員の皆様が、正門にも裏門にも控えてらっしゃるから。あいつらに捕まると厄介なのよね……。1年前……入学当初に『部活動はやりません』てその旨伝えて全部きっぱり断ったのに、地区総体近くなるとこれだもの……。

おかげで、ここんとこはほぼ毎日放課後はここで時間潰さないと帰れない。あーもう、早く青葉のお見舞いに行きたいのに……。

「贅沢な悩みねぇ……」

と、誰もいないはずの屋上にいきなりそんな声が響いた。やばっ、見つかった！？

とっさに素早く上体を起こした私の目に映ったのは……

「なんだ、琴子（ことこ）じゃん」

「何だとは何よ、ミス罰当たり」

黒髪のおかっぱ頭に、ビン底みたいなメガネをかけた私のクラスメート、陸上部所属の竹内（たけうち）琴子（ことこ）が腰に手を当てて仁王立ちしている姿だった。

「あんたのことだからここにいると思った。また部の勧誘から逃げてんの？」

「うん。何度も断ってんのに、諦める気配ゼロなの。もううんざり」
ため息をつく私の隣に、琴子は何の遠慮もなく腰を下ろした。
「はぁ……もったいない。何で才能あるのに意欲がないのかね……」
「何よ、あんたまであの連中と同じこと言う？」
「言いたくもなるわよ。中学の頃からそりゃもうスーパーホープっぷり全開。中１で１００ｍ１１秒台出したり、駅伝で最下位から全抜きしたり、助っ人穴埋めで出た水泳の大会で大会新記録出しちゃったり……あんたの武勇伝どんだけあると思ってんの？　運動部がほっとくわけないじゃない」
あーもう、私の黒歴史をほじくり返すなっての。
その思い出したくもない武勇伝のおかげで、朝の通学路から放課後までひっきりなしに勧誘が来てうっとおしいったらないんだから。私は時間を束縛されるような部活動はもうやらないって決めたの！
文句あるか！
「あんたのポリシーにとやかく言う気は無いけどさあ……あーあ、世の中不公平よね～……」
「？　どういう意味？」
「だってそうじゃん、あたしみたいな毎日一生懸命頑張ってトレーニングしてる奴じゃなく、よりによってアンタみたいなやる気ゼロのやつに才能があるなんてさ……絶対神様ってステータス配分間違ってるわ」
やれやれ、またその話か……。
目指せレギュラー！　ってんで日々練習を重ねてるこの子は、陸上部のレギュラー候補の１人。いつもあと一歩の所で他の人達に及ばず、補欠止まりなんだけど……たまにこうしてグチ言いに来るのよね。あ、グチとも違うか。
「それで、それ言うために私を探してたの？　まさかまた選抜落ちた？」
「残念はずれ。今日はあんたに釘を刺しに来たのよ」
「？　釘？」

珍しく鋭げな目をしたと思ったら……どゆこと？
「実は私……この度、レギュラー選抜に受かりましたっ！」
「おお！」
すごいじゃん、長年の努力が実ったか。これで晴れて、後輩達どころか一部の先輩にも威張れる、夢のポジションが琴子、あんたのものに……って、ん？　今のと私と何の関係があるのかしら？
「そこで1つ言っとく！　あんたがどこの部活の助っ人に出ようが構わないけど、陸上部だけは来ないで。あたしがレギュラーじゃなくなるから」
「あ。そゆこと」
なるほどね……確かに、あたしがそこに入ったら、当然あたしは上に来るからレギュラー陣の順位が1つずつ下がって、レギュラー内最下位の人が押し出し式に外される。……って、何よあんた最下位だったの？
で、レギュラーの座を守るために私に『釘』か……マメですこと。
「返事は？」
「はいはい、心配しなさんな、どこも出ませんよあたしゃ」
「ならよし！」
惰気に満ち満ちた私の返事に逆に安心したのか、うんうんと首が取れそうなほどに縦に首を振って、琴子はダッシュで屋上を後にした。これから部活か、わざわざご苦労様です。
さて……私はまだ帰れそうにないわ。あの連中が自分の部活に参加せざるをえない全体練習の時間帯まで……もう1時間はここで昼寝かしら。あーメンドクサ。それもこれも、こんな才能なんかがあるから……。私はそこそこ動けりゃ十分よ。
「要らないのになー、こんな才能とか。欲しけりゃ誰でも持ってけっての」
「そんなこと言うものじゃありませんよ、罰当たりな。持って生まれた才能は大事にするべきです」
何よ、人の気も知らないで、勝手なこと言わないでよね。わかる

？　日夜あの連中に追っかけられるこの鬱陶しさが。
「人気があるっていうのはいいことじゃないですか。向こうは真面目なんですから、たとえあなた自身のやる気が起きなくとも、邪険にせずに誠意を持って対応するべきでは？」
「あーもぉうっさいわね、さっきからアン……た……？」

……あれ？
さっきから私……誰と喋ってんの？　声からして……絶対琴子じゃないんだけど。ていうか、最近どっかで聞いた声のような……？
なんだかイヤな予感を覚えつつ、声のした方……背後に目を向けると、

「あ、昨夜はどうも」
「……」

そこには……昨日の白学ランの少年が、あぐらをかいていた。
「……誰、あんた？」
「あ、やっぱり見えるんですね、僕のこと」
……？　まるで普通は見えないみたいな言い方ですけど……？
ま、まさか本当に……？　こんな昼間っから？
「……おばけ？」
「は？」
と、白学ラン君がキョトンとした顔になる。目が『何言ってんの？』ってバリバリ自己主張してんだけど。この反応……違うのかしら？
その白学ラン君、少し考え込むような素振りを見せた後、ぽんと手を打ち鳴らして、
「……ああ、なるほど！　や、大丈夫ですよ。僕はおばけでも部活動の勧誘でもないですから」
と、妙にムカつく爽やかスマイルできっぱり否定を……ってちょ

っと待たんかい！
おばけ云々は会話の内容（見えるとか何とか）から予想つくとしても、何で私が部活動の勧誘を避けてることを知ってんのこいつ！？
「あ、すいません。盗み聞きするつもりはなかったんですけど、さっきの方との会話を聞いてまして……」
「琴子との？　……って、どこで？」
「いや、さっきからずっとここで。あなたがここに来たよりは後ですけど」
は？　いや……だったら琴子があんたの存在に気付いて何らかの反応を示すでしょ！？そんな様子は微塵も……って待て待て、そう言えばさっきこいつ『普通は見えない』みたいなこと言ってたっけ。じゃあ琴子が反応しなかったのはこいつが見えなかったからで……ってだからこいつ結局何者よ？
いや、焦るな焦るな、えっと……ひとまず落ち着いて見てみよ。
目の前でぽりぽり頬をかいて、『どうしたもんかな～』的な視線を送ってくるこの少年……顔は悪くないわね。若干童顔だけど、整ってる感じ。髪は明るい茶髪、メガネ着用。歳は多分……私とそう変わらない。特徴的な白の学ランは……どこの学校のか見当もつかない。てか、白学ランなんて漫画以外で初めて見たし。
「あのさ……」
「はい？」
「あんた、結局誰なの？　初対面……よね？」
白学ランなんて珍しい服のやつ、一回見たら忘れそうにないし……。
「そうですね。まあ厳密には昨夜1度お会いしてはいるんですが、あの程度のやりとりで既知の仲と呼べるかと問われればまず否でしょうから……初めまして、でいいと思います」
「ふーん……」
台本でも用意してたのかと思うくらいにさらりと述べる謎の少年。でも、そうならそうでアンタ妙に馴れ馴れしくない？　初対面の相

手に対して、自己紹介も無しにさ。
すると、文句の１つも言ってやろうとした私の先を取り、彼は心でも読めるのかというほど見事なタイミングで言った。
「あ、すいません、申し遅れました。僕、八雲琥珀（やぐも こはく）といいます。どうぞお見知り置きを」
ぺこりと一礼。
ふーん、八雲琥珀……ね。

これが……普通の女子高生である私・常盤若葉と、これからその正体が明らかになる謎の少年・八雲琥珀との出会いだった。

で、

「私に何か用？　八雲琥珀（やぐもこはく）君？」

今しがた自己紹介をした白学ランの彼……八雲琥珀に、私はそうたずねた。

昨夜といい、今日といい……何だって私は名前も知らない少年に話しかけられるのか。

まあ、昨夜のは偶然会っただけだとしても……今日のは部外者なのに校舎内に入ってまで私に会いに来てるんだから、明らかにおかしい。それに昨夜は、足音も足跡も無くいきなり消えやがったし……その辺考えると、こいつわけわかんない箇所多すぎる。

ともかく、何か用があって私に会いに来てるんだろうし、その理由と、できればコイツがどこの何者なのかも把握しときたい。不審者、って可能性もゼロじゃないし……。

「あ、はい。えっとですね……簡単に申し上げますと、あなたに取材をさせていただきたいんです」

「取材？」

取材って……何それ？　あんた何かの記者？　あたし別に地域新聞とかに載るような話題は持ってないんだけど……？

「あ、いえそういうのじゃないんです。僕がお聞きしたいのは、もっと他のことで……」

「他って何よ？」

「えっと、具体的には、現代日本の文化とか、日用品各種の解説とか、特徴的な習慣とか……」

「はあ！？」

ちょ……急に言ってることがわかんなくなったんですけど。えー

と、現代日本の文化？　習慣？　解説？　な、何、その日本に留学してきた外国の人みたいな質問？　あんた日本人じゃないの？
「あ、いえ、日本人ですよ？　一応……」
「一応？」
「はい、まあ……向こうの区分でですけど……。と、とにかくその……取材、させていただけないでしょうか……？」
いやいやいや、アンタ疑問点が何一つ解決してないこの状況下で返事を求めるな。そもそも質問からして意味わかんないし。何だってそんなレポート課題みたいな……あ、もしかしたら案外そうなのかも。
いやでも、それにしたって何で私に？　常識的に言って、日用品うんたらはまず置いといて、こういうのは市役所や図書館で調べるべき事柄のはず。決して偶然出会った現地人を適当に捕まえて取材するようなものではないし、そもそもその発想が……。
「あ、あの……すいません、他に頼める人に心当たりなくて……」
「いや、あんたさぁ……」
だからって昨日ちょろっと会っただけの私をわざわざ頼らんでも……あれ？
そういえばこいつ、何で私がこの学校にいるって知って……
と、

コトッ

「「ん？」」
何かが屋上のコンクリの床に落下するような音がした。その音がした方を振り返ると……っっ！　ヤバいっ！
目の前に転がってるのは……バドミントンのシャトル。これがここに飛んできたってことは……バドをやってた人がコレを回収しにここへ来る！
見た所、学校の備品を表す校印がきちんと押されてるし、なんか

新品っぽいし……この学校、備品管理にうるさいから、指導室行きになりたくなければここまでシャトルを回収しに来るはず！
　こんな所に飛んでくるってことは、多分やってたのは放課後暇してる帰宅部とかの連中で、ベランダでやってたら飛んだ、ってとこかしら。正規のバド部員じゃないでしょうけど……それでもここで私が見つかって『常盤若葉はよく屋上にいる』ってバレるのは嫌！
　ここにまで勧誘の連中の魔の手が伸びかねない！　ああでもここまで一本道だから取りに来る人と途中で鉢合わせするかもだし、屋上隠れる場所無いし……
　と、
「あのー……」
　ああっ、こいつまだいた！
　白学ラン……八雲琥珀が、遠慮がちに、といった感じで手を挙げている。
「えっと、取材……」
「黙っててよ！　今どうやってこっから逃げようか考えてんだから！」
　く～っ、降りてこい、手品の女神、脱出の女神、もしくは2時間ドラマのアリバイ工作かなんかの女神降りてこい……っ！
「そんなこと言……ん？　ここを離れたいんですか？」
「そうよ！　それとも何、あんたがどうにかしてくれるの？」
　キョトンとしてる八雲琥珀に、イラつきを隠さずにやや威圧的に言うと、意外な答えが帰ってきた。
「そのくらいなら……まあ、いいですけど」
「……え？」
　あれ、返事ＹＥＳ？　てっきり困った顔するものと……。
「それは、はい。でもその」
「わかった！　取材でも何でも出来る範囲で受けたげるから早く！」
「えっ、いきなり！？」
　難色を示していた取材オファーがいきなりＯＫされてびっくりし

ている様子の彼。ふっ、私の頭の回転の早さをなめるなよ。この後の展開はおそらく、

『逃がす代わりに取材させてくれますか？』

『え、そ、それはその……』

恐らくはこういうパターンだ。ここで返事にとまどってるとタイムオーバーになる可能性が出てくる。こいつがどうやって私を逃がすつもりが知らないけど（逃げるのは実質的に無理だから、『隠す』かしら？）……もし本当に出来るんなら、さっさとやってもらうに限る！

取材だか何だか知らないけど、まあ、基本私帰宅部でヒマだし……ちょっと話聞かせてやるぐらいなら大丈夫でしょ！

「あ、あの……」

「聞いてたでしょ？　その耳は飾り！？　取材なら協力するから、早く私を逃がして！」

「わ、わかりました！　あの……逃がす先ですけど、どこでもいいですか？」

「最低限常識的な所なら！」

飛び降りるとか、柵からぶら下がるとか抜かすなよ？

「わ、わかりました。ではその……ちょっと失礼します」

「へっ？」

八雲は何の意味でか一礼すると、唐突に私の手をとった。え、何？

と、次の瞬間、

ギュオン

「……え？」

変な音と共に一瞬視界が揺らぎ、奇妙な浮遊間が全身を包んだ。

そして一瞬だけ視界が暗転し、そこに再び光が戻ったと思うと……

私は……

……学校の屋上ではなく、波の打ち寄せる海岸（砂浜）に立っていた。

「……！！？」

な……何これ……！？　私、さっきまで学校の屋上に居たはずじゃ……？

と、訳が分からなくなっている私に、

「えーと、いいでしょうか？」

微塵も同様していない様子の八雲琥珀が語りかけてくる。

「取材の了解もいただいて、ついでに未来技術（オーバーテクノロジー）も実際に体験していただきましたしね。改めて自己紹介させていただきます」

そして、八雲琥珀はまっすぐ私の目を見て、

「僕の名前は八雲琥珀。西暦３２８５年の日本から時間跳躍機構を用いてここに来ました……平たく言えば未来人ですかね。どうぞよろしくお願いします」

何の屈託もない、尻の軽そうな女子なら軽く落ちそうな爽やかスマイルで、そうきっぱりと言ってのけた。

……は？？

未来人の自由研究

待て待て、落ち着け私。そしてもう一度よく思い出すのよ、こいつ何言った？　西暦３２８５年……未来人……確かにそう言った。時間跳躍機構とか何とかを使ってこの『時代』に来た……とも。

普通ならこんなこと言う人は、首かどこかに『この人は精神病患者です。病院外で見つけられた方は以下の連絡先まで』とか何とか書かれたカードがかかってると思うんだけど……見た感じそういった類のものは無いし、会話からもそんな様子は見られない。

すなわち、こいつはちゃんとした正気の状態で、大真面目に言ってることになる。

おまけに、今なんだかテレポートみたいな体験しちゃったし……。私の知る限り、現代科学の技術では学校からさっきまでいた砂浜までの約４ｋｍもの距離を一瞬で移動するなんて真似は不可能のはず。ってことは……あながち嘘じゃないの……かも……？

とまあそんな自問自答（『答』ないけど）を繰り返しつつ、私はこの少年、八雲琥珀と共に浜を離れ、街へ続く砂利道を歩いている。

「……それで？」

「はい？」

私は私の後ろを歩く八雲に向かって乱暴に言った。

「まあ。１度引き受けたことだし、今更文句は言わないけどさ……取材って具体的には私何をすればいいわけ？」

漠然とな説明は受けてたけど、やはり未だにわかっていない事柄を聞いてみた。何なのかしら？　未来人（自称）が過去の人間に聞きたいことって。

「そうですね、まずどこから話せばいいのか……僕が未来人だとい

う話は信じていただけました？」
「まあ、普通じゃないな、ってくらいの認識でならね」
「それで十分です」
そう言うと、八雲は懐から唐突に小さな長方形のプレートを取り出してみせた。
そこに変な紋章と『ＩＧＳＳ東京校高等部』と書かれているのが目に入り、これはこいつの身分証明書か何かなのだと気付いたその瞬間、
フォン、という音と共にその上に、
「立体映像（ホログラム）です。ご存知ですか？」
「ま、まあ。見るのは初めてだけどね」
その始めて見る立体映像には、何やら生徒手帳に書いてありそうな事柄が網羅されていた。っていうか、それ学生証なのね。えーと……『ＩＧＳＳ』……『Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ Ｇｅｎｅｒａｌ Ｓｃｉｅｎｃｅ Ｓｃｈｏｏｌ』……？　直訳で……国際総合化学学校？　なんかスゴそうなとこね？
「ご覧頂けるとおり、僕、学生をやっているんですけど……今、夏休みの課題をやってるんですよ」
「うんうん」
今、春真っ盛りなんだけど。
でも、そこはまあタイムマシンで季節とかもすっ飛ばしたんだろうから、気にするべき所じゃないのか。こいつがいた『元の時代』が夏だったってだけだろうし。
「それで、その……自由研究の課題に迷ってたんですけど、ふと、昔の人の生活を研究するのが面白そうだな、って思って……」
……で？
「それで迷った末、２１世紀初頭の人々の生活をレポートにまとめてみたいな、と思いまして」
今のこいつの隣に描き文字を入れるなら『てへっ』かしら。
つまりアレか、あんたは夏休みの自由研究のために１２７５年も

の時を越えて現代に来たってのか。たかが学校の宿題のために。
何なのかしらこの感じ？　突っ込みどころなんだけど、スケールも思考も手段も何もかも色々アレすぎて何も言う気にならない……。自由研究なんて、私なんか最後にやった自由研究、軒下に巣作ってたよくわかんない鳥の観察だったわよ。文句あるか。
そして、その自由研究のための資料収集ってのが……
「はい、あなたにお願いする『取材』になります」
やっぱりか……。

そのあと、道中で詳しく聞いたところによると、
こいつがこの町に（というか、この時代に）滞在するのは、大体1週間くらいで、その間にできる限りこの時代の情報を集めたいらしい。整理してレポートにまとめるのは未来に帰ってからもできるから、とにかくいろんな種類の情報ができる限りの量ほしいとか。
とはいっても、地理もなく、この時代でどこに行けばどんな情報があるかなんてのもわからないこいつは、どうしたもんかと悩んでいたらしい。すると、そこに優しく声をかけてきてくれた女性が……ってコレ私か。
いやいやちょっと待ちなさい、私は別に昨日の夜、あんたを助けるつもりで声をかけたんじゃないからね？　ていうか、あの流れ星あんただったの？　未来から来たまさにその時のっていう……ぐあ、真剣に祈って損した。
ともかく、あんたは私にそういうこと全般の情報、それに、どこに行けばどんな情報が得られるか、っていうことについても教えてほしいわけね？
「はい。さすがに１０００年以上前ともなると資料が乏しくて、このあたり、一体どこがどういう感じになってたのかわからないんです。なので、このあたりの地理に詳しい現地民の方の協力者が欲し

いと思いまして」
日本が世界有数の技術先進国って言われてるこの『現代』が、歴史の授業で見る日本みたいな言われ方してる。なんか変な感じ……。
ま、いいや。思ったよりは長いことかかりそうで大変そうだけど、そこまででもなさそうだし……部活も朝連もなしで比較的暇な私なら、空き時間にでも話聞いてあげるだけで十分でしょ。
自由時間が少なくなるのはちょっと嫌だけど……こいつの話だと、『取材に関して必要なサポートは全てこちらでさせてもらう』って。
つまり、資料館とか博物館とか見て回る時の入館料なんかはもちろん、食事代、交通費、書籍・資料代なんかの必要経費は全部こいつが出すってことらしい。しかも、必要ならあのテレポートも使ってくれるって。こりゃ好都合、取材と称してあれ使ってもらえば、勧誘の連中に見つかることなく学校を出られるし、その他の移動も一瞬になるじゃん。
それなら、私にとってのメリットも大きいし……引き受けてやってもいいかな？
けどまあ、さすがに今は放課後からさらに時間が経ってるし……これから青葉の病院にも行きたいから、今日はご勘弁願おうかしら。
と、話してみたら、
「あ、はい、そういうことでしたら構いませんよ」
恒例のスマイルで気持ちよく承諾してくれた。
そのあとすぐに懐から、今度は……昨日の夜に見た、折り畳み式の携帯のようなメカを取り出して何やらいじり始めた。よく見ると……これも立体映像（ホログラム）だ。
「でしたら……明日またあらためて、ということでよろしいですか？　時間は放課後で」
「いいわよ？　どこで待ってればいい？」
「今日と同じく屋上では？　まあ、空間転移（テレポート）使えますから、学校から出る分にはどこで待ち合わせてもいいんですけど」
おお、明日もあれ使ってくれるってか。そりゃいいわね。

ていうか、それスケジュールとか入れられるんだ？　やっぱ携帯？
「わかった、じゃあ明日ね。私これから用事あるから」
「はい、では失礼します」
と、そう言って八雲は踵を返して空を……ん！？　ちょ……空飛んだ！？
うわ～……さすが未来人、そんなこともできるんだ……って待て待て！　さすがにそれは目立つって！　大騒ぎになるでしょ……って、ああ、そういえば見えないんだっけ。
何でも光の屈折とか何とか使った特殊迷彩システムで、こいつの姿は見えないようにできるらしい。なるほど……普通の人に姿が見えないのはそういうわけだったのね。
でも、何で私には見えるのよ？　もしかして、私がある種の『選ばれた存在』だから……うわ、何それ、ちっとも嬉しくない。
まあいいや、今度聞いてみよ。
そんなことを考えているうちに、八雲はどういう原理でか噴射も翼も何もなしに空中に浮かび、そのままどこかへ飛び去った。やれやれ……何でもありね。
ともかく、あいつを気にしてても仕方ないわ。今優先すべきは病院にいる青葉のお見舞いに行くこと。約束してた時間には……ちょっと遅くなっちゃったか。穴埋めにフルーツでも買っていこうかな。ちょうどいいや、あの商店街とおると近道だし。
頭の中を未来少年から病気の弟にきっぱり切り替えて、夕方の時間帯に突入して安くなっているかもしれないリンゴとモモを買うために、私は１００ｍを１１秒ちょっとで走る足をフル稼働して八百屋さんへ走った。

目指すは商店街

「おい、そっちどうだ！？　いたか！？」
「だめだ、いない。くっ……一体どこへ？」
「まさかもう帰ったんじゃ……？」
「それはないさ。出入り口はすべて固めてあるからな」

そんな会話を繰り広げるスカウト目的のみなさんの姿が、学校から遠く離れたビルの屋上に立つ私の目に飛び込んできていた。ふふっ……残念でした。こっちには瞬間移動できる未来のアイテム……を使える未来人が居ちゃんのよ。
ま……あいつらから逃れられたからって、今から自由に遊べる、ってわけでもないけどね。『そういう約束』で連れ出してもらったんだし。
……ということで、

「あのー……若葉さーん？　そろそろいいですかー？」

じゃ……行きますか。この勉強熱心な未来人くんの観光案内に。

☆☆☆

「それで？　具体的にはどこ行きたいわけよ？」
とりあえず、まだ人通りの少ない学校裏の通りで、私はあらかじめ八雲に聞いておくことにした。
昨日ざっとは聞いたけど……やっぱりもうちょっと具体的に聞いておきたいし。
生活様式そのものを知りたい……って言ってたけど、さすがに朝起きてから夜寝るまで何するかまでみっちり知りたいわけじゃない

みたいだしね。聞いた感じ、バスとか電車とか、公共交通機関のシステムなんかは今とあんまり変わらないらしいし。形は様変わりしてるらしいけど。

「っていうかまあ、目的……知りたいことを話してもらった方がいいかもね。それに合わせて目的地決めなきゃならないし」

「はい……歴史上の大きな出来事なんかはまあ、ある程度の資料がありますから……そのあたりは大丈夫です」

なるほど。全く資料がゼロ……ってわけじゃないんだ。それを踏まえたうえで……か。

それに、これは昨日考えたんだけど……市役所や図書館、郷土資料館なんかを使えば、わざわざそこに私がいなくてもこいつ1人で情報を調べられるはず。少なくとも、そこで得られる分の情報は。

となると……私がこいつに同行している今は、私（ガイド）がいないと説明も理解も難しい事柄を調べるのが効率的なのかな。

そう聞いたら、

「そうですね。その方向性でいいと思います」

「そっか。じゃあ……具体的にどんなところに行きたい？」

施設とかの入場料その他はコイツ持ちなんだし……私は時間さえ都合すればいいんだから、よっぽど突飛なところじゃない限りは付き合ってあげよっと。脱出の件では私も助かったしね。

八雲はしばらく考えて、

「うーん……この時代に使われている日用品、家電製品なんかを閲覧したり、それらに関する資料の書籍を閲覧・購入できたり、食糧や消耗品、嗜好・娯楽品のサンプルを入手できるところなどがあれば」

なるほど、研究・観察に必要な材料をそろえたいわけね。合理的だわ。

要するにええと……家電を見たり、本とか雑誌を読んだり、食べ物を買ったりできるところ……ね。ううむ、何か心当たりは……

……ていうか、それってつまり……

「……よし、じゃ……行こっか」

「はい！　……で……どこへ？」

「商店街」

単なるショッピングで事足りるな……と、結構考えた後に思いついてしまった。なんか……別にそんなことないのに損した気分……。

☆☆☆

商店街……と聞くと、人は2種類の像を思い浮かべるらしい。

1つは、昔ながらの八百屋、魚屋、電機屋……それも大型のじゃなくて、お爺さんが1人で経営してるちっちゃい感じの……とかが並ぶ、古風で趣のある、昭和系の商店街。

もう1つは、超大っきくて品揃えもいい電機屋とか、食料品何でもござれのスーパーとか、流行りのブティックやらスポーツ用品店やら、果ては大っきな病院まで、近代風のお店が所狭しと立ち並ぶショッピングモール系。

この町の商店街はというと、どちらかと言えば後者だけど、上手い具合にその2つを折衷した感じのやつなのよね。

八百屋もあるし、スーパーもある。ブティックもあるし魚屋もある。ちょっと建ってる位置が違って、品ぞろえなんかも微妙に違うから、うまいことどっちもやっていけてる。

道路も広いし、交通機関も充実してる。何より……今の時代でも地域間でのコミュニティがちゃんとあるから、住みやすいのよね、この町……青林町は。

「さーて……とりあえず端から見て回る？」

「あ、いえその……1店1店時間をかけたいので、出来れば絞り込んでもらえると……」

「何よ、注文多いわね」

ま、熱心な心がけですけど。
「となると……そうね、この一番大きい電気屋行ってみる？　品ぞろえもいいわよ。……若干遠いけど」
「そうですね。じゃあ、そうしましょう」
というわけで、まずは街の中心に行って電気屋に行くことにした。移動はまたワープか、飛んでいくことを提案したんだけど、その２つは使わず、電車で行くらしい。
他にもいろいろと理由があるみたいだけど……この時代の交通機関の観察・体験をしたいってのが本音みたい。まあ……いい体験だろうし、町中にいきなり空から舞い降りるわけにはいかないしね……。
そうこうしているうちに、駅に到着。お、ちょうどいいタイミングね、電車も来たみたいだし……って……？
「何してんの、あんた……？」
「え？　この時代の電車って、手挙げて止めるんじゃないんですか？」
「……」
時間に待ってりゃ止まるっつの。ていうか、そんな公共交通機関があるか。
うーん……１２００年分のジェネレーションギャップを甘く見てたわ……コレ下手したら交通ルールから教えなきゃかもしれないわね……。

ショッピング・クライシス

世のお母さん方が子育てにおいて必ず体験するのが、『言うことを聞かずにショッピングモール内をうろちょろして困らせる』という子供の行動。小さい頃は私もそうだった記憶があるし、休日に商店街とか歩いてるとよくそれらしき光景を見かける。微笑ましい光景だなあ……なんて思いながらいつもは見てるんだけど、

この歳でそれを疑似体験してみて、それがどれほど腹立つのかってことがよくわかった。

しかも、

「若葉さん！コレ何ですか？」

「ん？　ｉＰｏｄ。音楽聞くやつ」

「これは？」

「蛍光灯」

「これは？」

「電池」

……子供どころか身内でもない分、たちが悪い。

さっきからずっとこの調子なんだもの。学ラン姿の高校生くらいの男が、ｉＰｏｄやら何やらを見て５歳児顔負けのはしゃぎよう。保護者のこっちは恥ずかしいわ疲れるわ……。

ちなみに、さっきまでこいつを普通の人の目から見えないようにしていた光学なんちゃらは解除してある。そうでないと、私は端から見て何もない空間に話しかけてるヤバい奴に見られるから。

……結局、何で私だけに見えるのかは謎のままなんだけどね……。

しかし、そんなに珍しいか、この時代の家電製品が。あんたの時代にもそのくらいあるんじゃない？

「ええまあ、似たものはありますけど……何せ１２００年も経って

ますから、形状から何から様変わりしてるんですよ。例えば……一番顕著なのがコレですね。電池」
と、そう言って八雲は売り場に置いてあった電池（４本セット）を手にとって言った。
「あんたんとこの電池は形違うの？」
「はい。向こうでは、蓄電用のユニットは特殊有機合金のプレートタイプがほとんどです。大きさは……この電池を厚さ１ミリで輪切りにしたぐらいかな」
へー、まるでボタン電池ね。聞けば、その小ささ・薄さで単３電池の数百倍の出力＆寿命なんだとか。またスゴいのが発明されてるのね。
そんだけのものがあればこんな時代のものなんかどうでもよさそうなもんだけど、なんだかんだで興味をそそるらしい。恐竜の化石見に来た子供みたいな目になってるし。
まあ、あんたの好奇心を咎めるつもりはないけど……学ラン高校生が電池と蛍光灯を手にはしゃいでる姿ってシュールだから、もうちょっと慎んでほしいかな……。一緒にいる私まで目立つし……。
「ところで八雲、あんたそれ買っていくの？」
と、電池を全種類片っ端からかごにいれている八雲に訪ねる。
「ええ、資料は多い方がいいので」
「なるほど、そりゃ確かにね」
思いっきり既製品の電池で何を研究・観察するのやら。
「あ、それと……他にも探してるものがあるんですが」
「何？　また資料？」
何買うのかしら？　蛍光灯もｉＰｏｄもかごに入ってるし……そろそろかごいっぱいになりそうなんだけど……。何を買うかによっては２つ目を使う必要が……
「えーとですね、プラズマテレビと、ＤＶＤプレーヤーと、冷蔵庫と……」
待て待て待て、本気か？

もうカートどころの問題じゃないし。ていうか……あんたお金あんの？　今、ざっとで言ったみたいだけど、それでもそんだけ買ったら１０～２０万は行くわよ？
「ご心配なく、資金は十分ありますから」
「な、ならいいけど……あんたんち金持ちなのね？　そんなにお小遣いもらえるなんて」
「あ、いえ普通に研究費で出るんで」
驚いた。１２００年後の高等学校では夏休みの自由研究に研究費が出るのか。
遠足のバス代すら自前で出させる現代の高校とのギャップにめまいを感じたけど、まあ違う時代のことだし、気にしても仕方ないでしょ。そう割り切ったものの、
いざ家電売り場に連れてきてみてというもの、

「えーと……これとこれとこれ。あと、あれとそれもください」
「「「は……はい……」」」

カタログ片手に、時折店員に質問しながら、そんな感じで豪快にテレビやら洗濯機やらエアコンやらを指差し１つでまとめ買いしていくこいつの隣にいるのはすごく辛かった。だって……こんな買い方マンガとかでしか見たことないし……。
さすがに店員の人もいたずらや冗談を疑ったらしいんだけど、八雲が指示した番号のクレジット会社に問い合わせてから後は、超お得意様を相手にするかのごとき姿勢で接していた。……さっきちらっと見えたあいつのブラックカード（限度額無制限）、本物だったんだ……。いつの間に用意したんだか。
店員が持ってる伝票の合計額がそろそろ８ケタに到達しようとした頃、八雲がこんなことを言い出した。
「あ、そうだ。若葉さん、何か入り用なものとかありますか？　ついでに買いますよ？」

あら、思いがけず魅力的な提案。でも……いいの？　研究費でしょ？
「大丈夫ですよ。まだまだありますから」
まだまだ？　マジで？
「それにほら、協力者に謝礼をする目的で使う……っていうのも、立派な研究費でしょ？」
ああ、まあ……そう言われればそうか、お礼は大事だしね。
まだ何か違う気がするけど……まあ……いいか。甘えちゃお。実は……部屋のコンポとノートパソコンにガタが来てたのよね……。
その２つと、あとついでにｉＰａｄも買ってもらって、ちょっと欲が出た私は。
「あ、あと、その……ゲームもいい？」
「ゲーム……ですか？　ええ、構いませんけど……」
あ、ラッキー。欲しいのあったのよ。
で、ゲーム売り場に一緒に来たはいいんだけど……いざ何でも買えるとなると、逆に迷うわね……どれにしようかな……。
と、ここでいきなり八雲が、
「……これ、全部ゲームソフトなんですよね？　この時代の遊び道具の」
「ん、まあそうね……対応するハードはそれぞれ違うけど」
「へー……ふーん……」
ん？　何その反応？　もしかして……興味持った？
「……よし、決めたっ！　すいませーん！」
え？　何？　や、私まだ決めてないんだけど……てか、何で店員呼ぶ？
……何かしら、嫌な予感が……。
「えっと……こことここととそこととあそこの棚のゲームソフト全部ください」

……欲張らなきゃよかった……。ま、また目立っ……！

結局その日は、さらにその店でＣＤやＤＶＤをそんな感じで『棚買い』した上、隣接する本屋と服屋でもそんな感じで買い物をしてお開きとなった。

わ……私……もうこのお店来れないよ……。

真実の噂、不条理な裁定

悪事千里を走る……とはよく言ったもので。
悪事に限らず、何かアレな感じの噂っていうのは、それはもうすぐに広まる。ましてやそれが、密接なコミュニティの構築された地元のことであるならなおさらだ。

……そりゃまあ、こうなるわよね……。

「若葉！　あんた昨日『タナカ電気』行った！？」
「一緒にいたっていう男の子誰！？」
「１２００万円分も買い物したってマジ！？　棚単位でＤＶＤ買ったって！」
「あーもー違うっ！　誤解！　人違いっ！」

ここは私が通う、青林西高校の２年１組教室。さっきからクラスのうわさ好きの連中からひっきりなしにこういう質問飛んできて、もううるさいったら！
昨日、街中心部の『タナカ電気』にて、学生服姿の男女２人が、限度額無制限のカードを携え、一日にして１０００万円を超える額の買い物をしたという噂。しかもその女の方が私に似ていた……なんて噂が立ったもんだから大変。
女の方が私……っていう方については『見間違いでしょ』っていう意見が大多数を占めてくれたけど、それでもやっぱりというか、真偽を確かめに来る野次馬は多かった。無論、そこで首を縦になんぞ振れるはずもない。私は全力で否定した。
「でもさ、私の情報筋の話だと……アンタで間違いないらしいんだけど……」
が、クラス屈指の噂好きの１人、長南すみれはしつこく食い下が

る。
「何なのよその情報筋は？　全く……」
……優秀じゃない。と感心していると、
ヴーッ　ヴーッ
ポケットの中で震える私の携帯電話。おおっ、誰だか知らないけどナイスタイミング！
「あっ、ごめーん！　携帯出なきゃだからいったん出……」
『ｆｒｏｍ　八雲琥珀』
「……（ピッ）」
「あれ、いいの若葉？」
「いいの。いたずら電話だから」
「いやいやいや、明らかに出る前に切ってたじゃん」
「それに、そんな全身使って全身全霊で電源ボタン押してる人初めて見たし……」
押したくもなるっつの。あーもう……
ヴーッ　ヴーッ
『ｆｒｏｍ　八雲琥珀』
またかよコイツは。
また切る手もあったけど、これ以上鳴らされても困るので、仕方なく出ることにした。
みんなに再び断って、教室を出てから『通話』を押す。
「……もしもし？」
『あ、どうも、八雲です』

怨敵は腹が立つくらい軽快な声で電話に出た。
「……何か用？」
「あ、はい。えっと、今日も案内をお願いしたいんですが……よろしいでしょうか？」
断りたいけど……ノートパソコンとコンポとｉＰａｄとゲームソフト５本（あの中から好きなの貰った）買って貰っといて次の日にやめる……なんてのは気が引ける……。仕方ない、今日も付き合ってやるか……。ほっとくと何するかわからないしね。
「はいはい。で、今日はどこ？」
「あ、えっとですね、できれば今日はカーショップに行ってこの時代の車用品各種と、車本体を５，６台……」
「却下」
これ以上いらん噂立てられてたまるか。

☆☆☆

結局、今日は普通に食料品とかを買うことにして（それもどうせ研究用の『サンプル』なんだろうけど）、集合場所と時間を設定したのち、教室に戻った。やれやれ……今日は変なこと無いといいけど……。
（スーパーで『ここからここまで』とか言わないように見張ってないとね……）
と、中に入ると、
さっきまでうっとうしかったクラスメートたちはおらず、代わりに何やら重い感じの空気が漂っていた。……？　何、コレ？
と、私はいつの間にか、さっきまではいなかったはずの琴子が登校していることに気付いた。せっかくだから挨拶の一つでも……と思って口を開きかけたけど、そのまま止まって決まった。
窓際に座っている彼女の背中から……何だかこう、すごく重い空気を感じる……。心もちうつむいてるようにも見えるし……。

何かあったの、とすみれに聞いてみると、
「ああ……それがね、琴子……陸上部のレギュラー降ろされちゃったんだって」
「え！？　マジで！？」
「うん……」
「うわ……それで……」
一昨日の放課後、あんなに喜んでたのに……。
聞けば、先輩の一人が意地を見せてタイムを伸ばした上、本人も昨日の選考で不調を見せてしまったらしい。
その際、計測を担当した先輩が故意に遅くストップウォッチを押したとか、色々裏がありそうな目撃証言があるんだけど……そこは先輩の信頼が優先され、暫定的ながらレギュラー降板になってしまったらしい。明後日の放課後の最終考査で上位に出ればまだ間に合うらしいけど……正直絶望的だとか。
見ていていたたまれなくなったクラスメイトの1人が、
「私……慰めてこようかな……」
「いや、やめといた方がいい」
「え？」
と、私の制止が意外だったらしく、彼女は見返してきた。
「で、でもさ……」
「あいつああ見えてプライド高いからさ。こういう時は……自力で立ち上がるの待った方がいいの。いい？」
「う……うん……」
それでも気になるんだろう。しぶしぶ、といった雰囲気で撤収する女子たち。私もそれにならって、自分の席へ戻る。始業近いし。
まあ、私もかわいそうだとは思うけど……こればっかりは私は何もしてあげられないしね。この問題を何とかできるとしたら……それはあんた自身だよ、琴子。

この時……私は予想できるはずもなかった。
琴子に、いや……この青林西高校に起こる……『ある出来事』を……。
そして……そこに、私と、あの八雲が関わることになる、ということを……。

白衣のミステリアス・レディ

「ゴメン、待った？」
「あ、はい。少々」
「いや、そこは嘘でも『僕も今来たところです』でしょ」
「は？」
なんて頭の悪いやりとりは気にしないことにして。
学校終わり、屋上での私と八雲の会話である。買い物1日目で既に派手にやって、もう辞めたいとか思ったわけだけど……今日も今日とて予定があるわけで……そしてその目的地に向かうために、こうして屋上で待ち合わせしてたわけで……。
ま、モノローグでどんだけ愚痴言ったところで何かが変わるわけでもないわね。
「さっさと済ませちゃいましょ。今日は確か……食料品よね？」
「はい。えっと……どこで買うのがいいですかね？」
この時代、この地域の地理がない八雲にとっては当然の質問だ。ここで本来なら、『スーパーマーケット』など、多種類の食材をまとめ買いできる所を選択すべきなのだろうが……下手にそんな所に連れて行って自由に買い物させでもしたら、また……

『ここからここまで！』

あ、あり得る……。い、いや、下手すりゃ店のもの全種類買うとか言い出しかねない……。なので、私は授業時間を削ってこの男にまともな買い物をさせる手段を考えた。おかげで授業ノートが3時限分ほど真っ白になったけど、このくらい後ですみれの奴にでも見せてもらえばどうにでもなる。なので気にするは必要なぁーし！
と、いうわけで……ミッションスタート！

☆☆☆

「ヘイいらっしゃい若葉ちゃ……お？　誰だい隣の坊ちゃんは？」
と、私たちが一件目に訪れた八百屋のおっちゃんが、目ざとく私の隣の八雲に目をつけた。まあ、当然よね。私だいたいここには１人で来るし、白学ランなんて服装、ただでさえ目を引くもの。
おっちゃんは私と八雲を交互に見ると、合点が行ったように指を鳴らして、
「ははぁ、こりゃあたまげた！　まさか若葉ちゃんにこんな『いけめん』の彼氏が……」
「違いますよ！　こいつは……」
やれやれ、予想しないではなかったけど……やっぱり間違えられたか。あーやだやだ。
余計な勘違いが定着する前に、きちっと誤解を解いておく。八雲のことは、旅行でこの辺に来てる知り合いの男の子、ってことにしておいた。決して私の彼氏でも、それに準ずる深い関係でもないこと、そしてこいつはすぐに帰るがゆえに、顔や名前を覚えていても意味はないから私と買い物に来たことも含めてさっさと忘れるように、と釘を刺すことを忘れない。
ちなみに、
「どうも、八神です。以後お見知り置きを」
「お見知り置かなくていいからね、おっちゃん」
八雲は事前に決めておいた偽名『八神ハク』を名乗っている。未来人的にもあまり自分の名前がこの時代に残るのは好ましくないらしく、昨日から使っていた偽名だ。
活字的に『八』と『ハ』が被っているあたりコイツのネーミングセンスが嘆息ものだとわかるんだけど、気にするまい。
「そうかそうか、八神君ね。それで、今日は何にする？」
「えっとね……カレー作ろうと思ってるの、野菜たっぷりで。材料見つくろってくれない？」

「あいよっ！」
元気のいい返事とともに、おっちゃんは定番のジャガイモ、ニンジン、タマネギに加え、ナス、カボチャ、アスパラなどの野菜を選んでいる。よし、予想通り……。
八雲の欲しいものの種類は膨大な数だから、１つの店で買おうとすると富豪買いになってパニックになる。ならば……バラして買う他あるまい。
まずはこのおっちゃんの店で、カレーの材料と称して、定番３品とトッピング野菜を一通りゲット。　さて、次はホラ、あんたよ八雲。
「あ、じゃあ僕は鍋にしたいんですけど」
と、今度は八雲の夕食という名目で、鍋の食材（白菜、春菊など）をゲット。よし、これでこの店はクリアね。おっちゃんに挨拶して店を出る。さて次は……

☆☆☆

「やあ若葉ちゃん。彼氏？」
「違うってば、魚屋のおっちゃん！」
そう、魚屋。ここでもとりあえず誤解を解いた後、同じ手で行く。
「さ、今日は何にしようか？」
「私は今晩、焼き魚と海鮮のごった煮作ろうかなー、と」
「僕のとこはちらし寿司なんです。見つくろいお願いします」
「あいよっ！」
こうして、サンマ、マグロ、ホタテ、エビ、その他魚介類をゲット。
ところで、さっきからすごい量の買い物をしつつ、荷物はどうなっているのか気になっている諸君、鋭い。荷物は買い物の度に、裏路地に行って八雲が『転送』しているのだ。どこにって……どこかは知らないけど、多分、八雲の家（アジト）の冷蔵庫に。

見せてもらったけど、６角形のトレー（折りたたみ式）みたいなヤツを展開した上にプラズマみたいなのがバチバチ走って、その上に荷物を置くと、一瞬でそれがかき消えてワープ、っていう感じだった。

そんな感じで、私たちは買い物を続けた。再び八百屋（別の）、魚屋、肉屋、和・洋菓子店、肉屋……（以下省略）と来て、怪しまれないように店舗の立地にも気を付けつつ、しまいには町の外にまで足を延ばして買い物を続けた。やれやれ、大体の食材は揃ったかしらね……。

「もういいんじゃない？　店出せるわよ、今まで買ったやつで」

「いえ、店は出すつもりないんですけど」

「それはわかってるから。もうこのくらいでいいんじゃないの、っての」

肉に魚、野菜に果物、和菓子洋菓子スナック菓子……全部合計すると、３、４００種類にはなるだろう。さすがにもう……

「あ、でも最後にここで」

「はいはい……」

まだあんのかい。ま、『最後』って言ってたからいいか……。それで、どこよ？八雲が指さす先に目をやると……

「ここで買い物を……」

「却下」

「ええっ、そんな！？」

や、驚くなよ。未成年が酒屋で酒買えるはずないでしょーが。それとも未来では違うの？

「で、でも、資料としてはその、ぜひ欲しいんですけど……」

「そう言われても、これぱっかりはねー……」

協力の約束はしたけど、さすがにそのせいで補導されかねないような危ない橋は渡りたくないなぁ……。自販機で買おうにも、人目が多いし……第一それだと、せいぜいビールとカップ酒くらいしか買えないだろうし……。はあ、やっぱここは諦めてもら……

と、

「おいコラ、何してんだ少年少女」

「「！」」

酒屋の前にたたずむ私たち（どうみても未成年）に、背後から突然かけられた声。真っ先に頭をよぎったのは『警官！？』だったけども、その一瞬後、私はその声が聞き覚えのあるものであることに気付いた。

恐る恐る振り返ると、そこにいたのは……

「げっ！　は……葉桜先生！？」

「まてコラ、２年１組出席番号１９の常盤若葉。テメ教師に向かって『げっ！』とは何だ」

「あっ、や、それはその……」

な、何でこの人がここにいんの～……！？

この人の顔を誰が見間違うものか。青林学園の養護教諭兼生活指導・葉桜翠（はざくらみどり）。今年から入った、ちょっとした『名物先生』だ。

まず、言動と風貌。女教師らしからぬぶっきらぼうな口調に、養護教諭らしからぬ長い金髪をポニーテールにまとめ、伊達眼鏡とスカルの指輪をつけている。性格はフランクというよりズボラで、職場であるはずの保健室からたびたび姿を消す。本人いわく、好きな言葉は『独立独歩』『自然淘汰』『弱肉強食』……だそうだ。

の割に、いつでもどこでも着ている白衣は常にピカピカでシワ１つ無く、頭も良くて全校生徒の顔と名前と所属と番号を覚えているらしいという、よくわからない先生だ。噂では元ヤンとか何とか言われてるけど……なぜか他の先生方を含めて真実を知る者は誰もいない。ミステリー。……って解説してる場合じゃなくて、

「で、何してんだお前ら？　酒屋の前でコソコソと……挙動不審だ

ぞ。指導室行くか？」
「い、いいいいえっ！　何でもないんですっ！　そ、その……私たち、みりん！　みりん買いに来たんです！　お酒じゃなく！」
「え？　みりんならさっきスーパーで買ってモゴモゴ」
黙ってろ！
「ほー……？」
ジト目で見てくる葉桜先生。うう……お願い、信じて……！
そのまましばらく私が動かずにいると、葉桜先生はふぅ、とため息をついて、
「ま、そういうことにしといてやるか。さっさと帰れよ、お前ら」
よ、良かった……しのげた……。
先生はそれ以上何も言わず、あくびをしながらすたすたとその場を去……ると思ったら、
「買い物もいいけどな、あんまり目立ち過ぎんなよ、怪しまれるぞ？」
と唐突に言い、私を、そして八雲をチラ見して歩き去った。いやその……今まさに怪しまれましたけど、あなたに。まあ、忠告だと思って受け取っておこう。
ともかく、酒を買うのは無理ってことで八雲にしぶしぶ納得してもらって、今日はお開き、っていうことになった。続きはまた明日。
……しかし、明日は今日以上に慎重にいかないとな～……葉桜先生にも見られちゃったし……。

……ん？
そういえば葉桜先生……私が知らない男子学生（八雲）と一緒にいるとこに触れもしなかったな……何でだろ？

見えざる参観者

「――であるからして、この場合は遺伝子Ａは連鎖によって双方に形質を発現させる可能性が出てくるわけだ。その可能性を表す式は、前回教えた通り――」

……あー……ねむ……

宿題で夜更かしして、そして1時間目からのこの生物の授業はきっついわ……。興味ないし、わかんないし……私にとってこの科目はほとんどお経同然なのよね……。ていうか、私そもそも文系だし～……。

せめて森本先生（定年間際、堅物）じゃなく、ピンチヒッターでたまに来る白樺先生あたりだったらまだもう少しは集中してられるのに……。

一応形だけノートを取りながら（内容はもちろん入ってこない）、私は全然別のことを考えていた。今日はあいつはどこに買い物に行く気なんだろうな～とか、琴子そろそろ立ち直ったかな～とか、今日の晩御飯何にしようかな～とか……。

なんて感じで視線を空中に泳がせてると、

「この問題を……よし、常盤、お前答えてみろ」

「え〝っ！？」

やばっ、さ……指されたっ！？　うそ……もう練習問題行った！？　あーもう早い！

えっと、練習問題練習問題……あった！　なになに……『血友病

の病因遺伝子Ａ（劣勢）はＸ染色体上にのみ存在する。このとき、陰性の病因遺伝子保有者である母親と同遺伝子を保有しない父親の間に生まれた子供は『ってわかるかぁ！！　何よコレ！？　病気とか子供とか……これ保健体育の問題じゃないの！？　何のパーセンテージを言えってのよ！？

助けを求めて琴子の方に視線を向けるけど……あ、ダメだ。琴子も『わかんない、無理』ってボディランゲージで返してきた。

くぅ……仕方ない、ちょっとはずかしいけど、ここは素直に『わかりません』で……

「あー、少し難しい問題だからな、時間かけてかまわんぞ？　ゆっくり考えろ」

……言いづらくなった……。くぅ……そんなこと言われたって、話聞いてなかったんだからそんな時方からしてわからないわけで……っていうかしかも難しいんかい。

でも、そんなこと正直に言ったら『しばらく立ってろ』確定だろうし……

と、どうしたもんかと悩んでいると、

「男性５０％、女性０％ですよ、若葉さん」

「え！？」

突然そんな声が響いて……え！？　何、今の！？　何か、答えみたいな……

「？　常盤、どうかしたか？」

「あ、いえ！　男性５０％、女性０％です！　……あれ？」

「おー、よく解けたな、正解だ」

え？

思わず口走ってしまった今の謎の声の復唱に、先生が『正解』という返答を返し、クラスから『おぉー』という感嘆の声が上がった。あれ……何かよくわかんないけど、助かった？　いや、それはよか

ったんだけど……
……今の声は……明らかに……
嫌な予感がするのをひしひしと感じつつ、ゆっくりと視線を上に向けた私は……
すぐにその視線を下に戻し、ノートの白紙ページに大きく文字を書きなぐった。

『何してんのよアンタは？』
「あ、はい。ちょっと見学を」

忍者よろしく天井に垂直に張り付いている……というかご丁寧なことに天井に正座して座っている八雲は、八雲自身からすれば『見上げる』姿勢で私を『見下ろし』つつそう言った。……だから、それは何のつもりでか、って聞いてんのよっ！！
何あんた勝手に人の学校の中にまで顔出してんの！？　いくら透明になれるからって、こんな人が多いところじゃ何があるかわかんないでしょーがっ！
ていうかアンタそんなことできたんだ？　わーすごい。もしかしてその膝の下に敷いてる『G』って書いてある座布団に関係あるの？　ひょっとしてそれ『Ｇｒａｖｉｔｙ』のG？
聞けば、
「えっと、やっぱりこの時代の学校の授業風景ってものも拝見しておきたいな～、と思いまして、馳せ参じさせていただきました」
私にしか聞こえない特殊な（？）音声でそう言ってくる八雲。
で、今日１日、私の授業を観察します……ってか？　姿消したままで、そのテンションで。……はぁ……。父兄参観の１００倍疲れそうね、その未来人参観……。
「とりあえず、先ほどからこの授業の録画をさせていただいてます」
『録画？　カメラとか持ってないみたいだけど？』
声を聞かれて怪しまれないように筆談で八雲に問いかける私。す

ると八雲は、なぜか今現在自分が欠けているメガネをちょいちょいと指差して、
「ああ、このメガネなんですけど……録画機能も内蔵されてるので、カメラ代わりになるんですよ」
マジッすか。
そう言われれば……何かさっきから微妙にピコピコ電子音が聞こえるような……（この音も他の人には聞こえないんだろうな……）。
そのメガネ、そんな高性能用品だったんだ。しかも、録画機能『も』って言った？　他にもあるの？
まあ、別に録画でも隠し撮りでもすればいいじゃない、私は別に困らな……

……まてよ？

瞬間……私の頭にある考えが浮かんだ。
今こいつは、『この授業を録画してる』……そう言った。
録画……ねえ……なかなかいい響きじゃない？
『八雲、その録画したＶＴＲ……後で私に見せてもらえる？』
「？　構いませんけど……なぜ？」
『授業の復習がしたいの。ほら、予習・実践・復習って大事でしょ？』
「ああ、そういうことなら、はい。全然ＯＫですよ」
そう言ってばっちりＯＫサインを出してくる八雲。よし……上手く行った。
未来の技術を持つこいつのことだ。映像も音声も、相当な高音質・高画質だろう。わからなくて困ることはあるまい。
『そうと決まれば、あんたは私なんか見てないで、授業のに集中してなさい、録画がするんでしょ？』

「あ、はい、そうですね！」
今、私と話したことでちょっとの間だけ八雲の視点（＝メガネ（カメラ）の視点）がずれちゃったけど、まあちょっとくらいなら大丈夫でしょ。
八雲の視線が黒板と森本先生に戻ったのを確信して……と、ＯＫ。
よし、復習のめどもたったし、これで……

「……ｚｚｚ……」

これで……昨日削った分の睡眠時間取り戻せる……。
森本先生は出席番号順にしか指さないという理論を知っている私は、教科書できっちりバリアを作り、安心して机に突っ伏した。

鉄道、病院、また白衣

場所はとあるホームセンター。
私は今日も、八雲の買い物につき合ってここに来た。今日の目当ては……家具&雑貨。
「どちらにいたしますかお客様？　赤と青がありますが」
「そうですね……塗料の成分に差異がわずかにある程度ですから、僕は別にどちらでも問題はないのですが……」
「だからもっと視覚的な判断要素に目を向けなさいよ」
頭上に『？』を浮かべる店員さん。すいません、どうか物事を成分分析なしには考えられない化学バカとでも勘違いなさって下さい。
これまで、ソファにベッド、デスクに本棚、物干し竿にリクライニングチェアと、1人暮らしするにも多すぎるだろ、ってくらいの量の家具を買い揃えた。これはさすがに『持って帰ります』って言うと不自然というか物理的に無理があるので、偽名を使って郵送してもらうことにした。コイツが郵送用に用意していた仮の住所に。
そして、さすがに家具ともなると何と言い訳しようが無理があるため、今日は私を知ってる人が誰もいないであろう遠くの店まで来た。特急で1時間半近くかけたし……大丈夫よね？
……その車内で、
「これがこの時代の特急列車ですか！　うわー、すごいなー！　初めて乗りましたよー！」
とまあ、コイツは5歳児ばりにはしゃいでいたんだけど。まあ……車の排気ガスにびっくりしてたこいつだから、別に予想通りだったけどさ……（未来では100%電気自動車らしい）。
さて……そろそろいいんじゃない？　さすがにこれ以上は『1人暮らし始めるんです～』って言い訳でもキツいわよ？
「そうですね……まあ、差し当たってはこんなもんですかね」
「そっか。じゃ、帰りましょ？」

下手に長居してこれ以上何か思いつく前にね。
いやしかし、今日は上手くいったわ。相変わらず1つの店で全部買おうとする八雲をどうにかこうにか諭して、今日もまた3件のホームセンターをハシゴ、ようやく満足したか……。でもまあ、上手く言い訳もしたから怪しまれてもないし、さすがにこんなとこまで来れば知り合いにも会うこともなかっ……

「あれ？　もしかして……常盤さんかい？」

……ったらよかったんだけどな……。
店から出たとたんに、ばったりと見覚えのある人物に遭遇してしまった。
見ると目の前に立っていたのは……他でもない、私の担任、白樺光先生だった。
男性教師にしてはやや長めの黒髪と伊達メガネ、いつも来ている白衣がトレードマーク。結構イケメン。今年から入った新任の生物学の先生だけど、いつも笑顔で、気だてもよく、性格もフランクなのでクラス中に人気がある。いわゆる友達先生ってやつだ。
変わってる所があるとすれば……学校内に限らず、いつでもどこでも白衣姿……ってとこぐらいか。何？　昨日の葉桜先生といい……流行ってんの、白衣？
その白樺先生は、学区からだいぶ離れたこの地域に私がいることを、一応不思議には思ったような様子を見せたけど、そんなに気にはしていないようで、
「珍しい所で会うねえ。何でこんな遠くに？」
「あ、そ、その……ちょっと用事で、親戚に会いに」
と、適当に言ってごまかしておく。
幸いにも白樺先生に、特に何も怪しんだ様子はなかった。に、にしてもびっくりした……何で昨日は葉桜先生、今日は白樺先生に会うのよ……！？　何なのこの教師エンカウント率は！？　私買い物

中毒の問題児として監視でもされてんの……あれ、心当たりメッチャある……。ヤバい、ホントにそうだったらどうしよう……。
まあ、人権尊重国家である現代日本でそんなことは無いと信じつつ……
「先生はどうしてここに？」
「ああ、ちょっと知り合いに会いにね。じゃ、待ち合わせしてるから、これで」
そう言って先生は、ひらひらと手を振って歩き出し、その場を去った。よ、よかった……何も聞かれなかった……。
と、先生は一度だけ振り返って、
「あ、そうだ、この前あげたジュースどうだった？　美味しかった？」
ジュースって……ああ、あれか、この前先生の手伝いした時にもらったアレ。
「あ、はい。とっても」
「そっか、それはよかった、うん」
そう言ってにっこり。そして、今度こそ先生は歩き去った。
……ってあれ？　また八雲スルー？　いや、それはそれで助かるけど、葉桜先生を除いて今までことごとく彼氏疑惑をかけられたアイツを何で……ってあれ！？　八雲いないし！　どこ行った！？
あー、そりゃいなけりゃ疑惑もヘッタクレもないか……って、感心してる場合じゃないって！　早く探さないと、常識知らずのアイツ野放しにしたらどうなるか……くっ、どっち行った！？　右か左か……
と、
「あ、すいません若葉さん、やっぱりコレも買っていいですか？」
後ろ！？
見ると、八雲はホームセンターの入り口入った所に置いてある花や野菜の種を見ていて、まだ店から出てきてなかった。な、なんだ……びっくりさせないでよね……。

と、ともかく、運悪く先生に出くわしはしたものの、運良く八雲見つからないで済んだ……よかった……。
「じゃ……帰るわよ……」
「あ、はい。じゃあ早く駅に……」
「いや、あんたのテレポートでよ」
「えぇえ！？」
何驚いてんのよ、今からまた特急列車乗って帰ったら遅くなっちゃうでしょ？　テレポートに距離制限も無いってあんた言ってたし……その方が効率いいじゃない。
「で、でも、その……」
「？　何か……不都合とかあった？」
「いや、無いんですけど、その……もう1回電車乗りたい（こつん）あ痛っ」
「子供かあんたは」
悪いけどそんな理由だったらダメ。今からまた駅行って電車の切符買って電車待って電車乗ってだと、確実に9時過ぎるわ。それに……
「病院の面会時間が終わっちゃうからだめ」
「へ？　病院？　若葉さん……病院に用があるんですか？」
「あれ、言ってなかったっけ？　私の弟、今、病気で入院してんのよ」
ああ、そういえば……わざわざ話す必要も無かったし、言ってなかったかも。

只今入院中の、弟の常盤青葉。まだ中1で微妙に子供。だから、さすがに泊まりこみでっていうのは無理だけど、せめてと思って、私は毎日お見舞いに言ってる。昨日も、一昨日も、こいつの買い物が終わった後でね。病状に影響ない範囲で、アイスとか嗜好品のお土産も持っていってる。今日はここに来る途中、中古のマンガを買っておいた。まああの子、闘病の疲れで9時前には寝ちゃうんだけ

ど……暇つぶしにはなるでしょ。
にしても……ホントに長いな……。いつ退院できるのやら。
「そうですか……わかりました。今日はテレポートで送りましょう」
「理解してもらえたみたいで何よりだわ。ありがと」
事情を聞いて、八雲もきっぱり諦めてくれたらしい。腕時計（型の何か別の機械なんだろうけど）をいじくって、テレポートの準備。……っとと、いけないいけない、裏路地入らなきゃ。
「それにしても……あんたそんなに電車楽しかった？　何回も乗りたがるくらいに」
「そりゃもう！」
八雲は歩きながら答える。
「僕の時代のは全部リニアモーターカーで、旧式のは資料館でしか見たこと無いんです。蒸気機関車……ＳＬなんて、国宝指定されてるんですよ？　あー、乗ってみたい……」
ふーん……わざわざ？　あたしにしてみりゃリニアの方がよっぽど魅力的ですけど。時速５００ｋｍ超えるんでしょ？　超いいじゃん。
まあ、その辺考えても仕方ないか……。
人通りのまず無い裏路地に来たところで、もうだいぶ慣れた浮遊感と共に、私と八雲は住みなれた私の町へワープし、この日の買い物は終わった。

赤い笑顔と希望のジュース

こんこん

『どちらさまですかー？』

「私よ、青葉」

『あ、姉ちゃん？　いいよ、入ってー』

がらっ

仲に入ると、入院してから丁度１週間目の我が弟は、相変わらずの赤い顔でベッドから上体を起こしていた。

短めに切りそろえられた黒髪に、精悍な顔立ち。よく『姉弟そっくりね！』なんて言われる私の弟。アレか、私とこいつの差は身長（１６５ｃｍと１５７ｃｍ）と髪型（ショートヘアとセミロング）だけかい。

それはそうと、顔色を見る限り……今日も今日とて、何か病状がよくなった気配はなし……か。それでも、形式的な意味で聞いておく。

「それで？　どうよ調子は？」

「んー……とりあえず、俺が感じる限りは……良くも悪くも変化は無し、かな」

「あっそ……あ、リンゴ食べる？　買ってきたんだけど」

「むいてくれるなら食べるかも」

「はいはい」

全く……相変わらずなんだから。

中学生にもなって卵も満足に割れないこの弟。まあ、食事とかその他諸々全部病院で見ててくれるからそんなに心配はいらないかもだけど……それでも心配なわけよ、姉としては。

父さんも母さんも仕事で夜遅いから、私以外に来れるような人もいない。それに、そのせいで普段から日の出てるうちは私が家主みたいなもんで、ほとんど私と青葉の2人暮らしみたいな感じだったから……一応、こいつと1番長く一緒にいたの私なのよね。

その愛着（？）もあって、ここに来てこいつの顔を見て、何か話したりしてると、落ち着くのよ。家に帰っても……私1人しかいないから、母さん達が帰るまで超静かだし。

いっそ私ここに泊まろうか？　とか言ったら、『いいって！』って全力で拒否されたっけ。全く……あんたは恥ずかしがりすぎなのよ。病人なんだから、別にお姉ちゃんに甘えても誰も責めないってのに。

と、青葉がこんなことを言い出した。

「あー……でもリンゴより、この前姉ちゃんに貰ったあのジュースの方がいいな……」

「は？」

ジュース？　そんなの持ってきたっけ？

「ほら、おれがまだ入院する前の、コップに入ってた……」

「入院する前……ああ、アレか！　……ってアレは貰ったんじゃなくて、コップについで私が飲もうとしてたジュースをあんたが勝手に飲んだんでしょうが！」

8日前のこと。夕食後に私はジュースを飲もうと、缶ジュースの中身をコップに出した後、少しの間席を外していた。すると、その間にこの弟、あろうことかその中身を半分ほど飲んでたのである。

「だからあれは、姉ちゃんてっきり飲まずに残したんだと思ったんだって！」

「私に好き嫌いがないこと、食事は食べきれる分しか作らないことを知っててそう勘違いできたっての？　ん？」

「うるさいな……悪かったってば。しかし……まさか残りの半分、姉ちゃんが飲むとは思わなかったよ。関節キスだぜ？」

「おあいにくさま、私は弟との関節キスごとき気にするようなか細

い神経しちゃいないのよ。誰があんたのおねしょした布団の始末してたと思ってんの？　母さんに内緒で」
「ばっ……今それ関係ないだろ！？　５歳の頃の話だぞ！」
顔を真っ赤にしてそう反論してくる弟……ああ、元から赤いんだっけ。
でも……
「そんだけ減らず口叩けるんなら問題なさそうね。よかった」
今の舌戦で、弟の調子がいつも通りだということを改めて認識する。うん、やっぱり悪いのは顔色だけだ、これなら大丈夫だろう。自分に言い聞かせる意味でも、今のを頭の中で復唱する。
「当たり前だよ。すぐに治して家に帰るって」
「そうしなさい。帰ったら……そうね、あんたの好きなドライカレー作ったげるわ」
「おおっ！　マジ！？」
「マジよマジ。だから早く直しな。なんなら……あんたが絶賛してるあのジュースも貰っといてあげよっか？」
「おおーっ……ってあれ？　あのジュース貰いもんだったの？」
「うん」
そのジュース、実は何を隠そう、あの日に手伝いのお礼に……って白樺先生にもらったジュースなのでした。
一時は、こいつの病気の原因はあのジュースなんじゃ！？　と思ったりもしたけど……ほぼ同じ分量を飲んだ私がなんともないんだし、それはないでしょうね。アレルギーもなければ、賞味期限も大丈夫だった。仮にそうだったとしても、胃袋の丈夫さなら、私よりこいつのほうが上のはずだし。
まあ、確かにあれ美味しかったし……今度、どこで売ってるのか聞いておこうっと。こいつの快気祝いのためにもね。
「ともかく、さっさと病院食と縁を切ってお姉ちゃん特製フルコースが食べたかったら、一刻も早く我が家に帰ってらっしゃい」
「上等！　明日にでも退院してふあ～ぁ」

ちょ、何よこのタイミングであくびって？　しまらないわね。
「んあ……ゴメン、眠くて」
「眠い？　まだ８時過ぎよ？」
家にいた頃は、深夜アニメハシゴで見るくらい夜更かしが得意だったこいつが？
もしかしたら……病気が治りかけで、体力消費する時期なのかもね。だったらまあ……ここは私はおいとましたほうがいいかな？なんかあくびのみならず、心なしかまぶたまで重そうな感じするし……。
「そうしてくれると助かるかも。たっぷり寝てさっさと治したいからさ」
「了解。じゃ、また明日ね」
なら、後は青葉の自己治癒力を尊重するのがいいわね。今日はもう寝かせたげましょ。
私は青葉に軽く手を振って『じゃね』とだけ言うと、お土産以外の荷物を持って病室を出た。
ふぅ、あの分なら大丈夫ね。さすがは私の弟、体の丈夫さも私と同じってわけか。となると……退院も近そうね。材料そろえとこっかな。
下手したらホントに明日退院するかもね、なんて考えて吹き出しそうになりつつ、私は夜道を歩いて家を目指した。

……この考えが、甘いにも程があるものだったということを私が知るのは、もう少し後のことである……。

青林裏路地捕物帳・前編

「「ありがとうございましたー」」
「ふーん……今日は意外と少なかったわね」
「まあ、薬品の成分自体はあまり代わってませんからね。この時代の『製品』のサンプルさえあれば」
青葉とフルコースの約束をした翌日である。本日は私たち、薬局に来ていた。
また大変な買い物になるのかな……なんて危惧したけど、意外にも今回の買い物は（今までに比べれば）少量で済んだ。
とはいうものの、確かにまあ、薬品の『成分』なんてものは時代が変わったからといって代わるものではない。塩化ナトリウムの成分が、１００年前と今で違うなんてことは無いわけだから。塩は塩だし。
となれば、こいつが買うのは風邪薬などの『製品』に限られる。まあ、それでも1つの店で買うととんでもない量になるから、何件か回ったけど、今までよりは幾分常識的な量に収まった。といっても、中には高級な薬とかもあったから、結構な値段になったけどね。
いつもこんな感じだったらいいのにな……なんて考えながら、夕方で人通りがまだ少ない通りを歩いていたその時、

ひゅっ、ばっ！

「え？」
「あれ？」
突然、後ろから飛び出してきた若い男が、私が左手に持っていた鞄を無理やり奪い取って……そのまま走って逃げていった。
……え！？
ちょ、もしかして……引ったくり！？　嘘！？　さ、財布とか携

帯とか色々入ってるのに！
「あの、若葉さん、あれって引ったくり……」
「見りゃわかるわよ！　ここで待ってて！」
「え？」
八雲の返事を待たず、私はすぐに走り出した。人通りが少ないから『その人引ったくりですーっ！』なんていったところで捕まえてくれる人は多分いない。
なら……私が捕まえるしかないじゃないっ！
「待てコラぁ――――っ！！」
両足に全霊の力をこめて、私は地を蹴り、全力で走った。

☆☆☆

―裏路地―

「おう、どうだった？」
「やったぜ、うまくいった！　へへっ、あのカップル、何でかわからねえけど、すげえ買い物してやがったからな……きっとどこかのお坊ちゃまとお嬢様だろ」
「へぇ～……そりゃまた、たんまり持ってそうだな？　男のほうは？」
「ポーチバッグだったんだ。ありゃとるのは無理だな」
「そうか。ま、いいさ。女のほうだけでも、十分……」
「ちょっとまったぁ――――っ！！」
「「「いっ！？」」」
ざざあっ！

曲がり角を曲がった所で、私の目に数人の不良風のチャラい男と、私がさっきまで持っていた鞄が映った。よしっ……追いついた！
ったく、何がお嬢様よ！　私はアイツの買い物に付き合ってるだけだっつーの！　それをお金持ちのお嬢様って誤解とか……ああもうとばっちり！
それはとにかく、
「お、おい、もう追いついてきたぞこの女！？」
「くそっ、逃げるぞ！」
「あ、まてっ！」
再び走り出した男達を、私は再び全速力で追いかける。
どうやら奴ら、この辺は地元らしい。複雑な裏路地まで知り尽くしてるようで、せまい路地を右に左にすいすいと縦横無尽に走り回り、私を撒こうとする。
……が、
「げっ！　まだ追ってくる！？」
「嘘だろ！？　どんだけ速いんだよあのお嬢様！？」
「待て待て待て待て待て――――っ！！」
誰がお嬢様だ、って突っ込みはともかく、その程度の脚力で私を撒けると思うな！　こっちは1年前に試しに参加したフルマラソン2時間半ちょっとで走ってんのよっ！
「へー、すごいんですね若葉さん」
「今褒めなくてもいいわよ！　ともかく今はあいつらを……ん？」
と、ふと今の会話に違和感を覚えて隣を見ると……余裕の表情で私に併走している白学ランが目に入った。……あれ？
「え！？　何！？　あんた何その速さ！？　あんたそんなに体力あったの？」
「あ、いえ、僕のはこのスーツのおかげでして」
「スーツ……って、その白学ラン？」
「はい。特殊合金繊維で作られてるＣＰＵ内蔵スーツです。防弾防刃衝撃吸収で、ガトリング銃でも傷１つつきません。電気信号で色

も柄も自在に変えられるし、ナノマシンで汚れも即座に分解、シワも一切出来ないんですよ？　おまけに、構造自体が人口筋肉になってて、重機なみの力が出せるし、電気刺激で装着者の駆動を強化したり出来るんです」

何か軍用兵装みたいなスーツね。てか、未来の洋服って全部こんな感じなのかしら？

「はあ……それでそんなムチャクチャ速く走れるんだ？」

「あ、いえ、これは……」

と、八雲が足元を指差す。何？

……ん？　何だか歩幅と進んでる距離が一致してないような気が……？　そう、まるで滑ってるみたいな……ってこれは滑ってるんじゃなくて、

「ちょ、あんたまさか飛んでる！？」

「はい、高度３ｃｍくらいで」

ああ……そうか、こいつ飛べたんだっけ。走ってるみたいに足動かしてるのは、あのチンピラ連中に対してのカモフラージュか。

その連中は、

「おい、何だあの２人！？　何であんな超余所見（よそみ）して普通に話しながらあんなに速く走れんだ！？」

「知るかよ……て、てか……俺達こそもう限界に近けーんだけど……」

「お、俺も……」

ふん、底が知れたわね。私はまだあと１時間は走れるわよ？

そもそもあんたらみたく根性がひん曲がってる奴らが私（達？）を撒けるはずないでしょ。さあ、体力も限界みたいだし、さっさとバックを返……

「くそっ、もう走れねえ！　こうなったら……」

「ああ！　力ずくで黙らせてやる！」
「この際だ！　男のほうの財布もとってやれ！」
そう言いながら、男達は立ち止まって、懐からナイフやらメリケンサックやらを取り出してこっちを睨み……ってウソォ！？　そういう展開！？

青林裏路地捕物帳・後編

前略。皆さん、窃盗事件が強盗事件になりつつあります。

目の前には、バタフライナイフやらメリケンサックやら、なんちゃってヤンキーが調子に乗って所持してそうな凶器もったのが数人。けど、それらは一応本物で殺傷力は確かにあり、そして追いつめられて興奮気味なもんだから余計にタチが悪い。

「な、なあ、これって強盗だろ？　ヤバくね？」

「いやお前、こんなもんカツアゲみたいなもんだって！　ギリギリセーフだセーフ！」

カツアゲが既にアウトだっつの。

「ともかく！　逃げきれねえんだったらしょうがねえ、向こうに逃げてもらうしかないだろ！　財布置いてな！」

「そうだ！これは正当防衛だ！」

今すぐこいつに広辞苑を叩きつけて辞書引かせてやりたい。カツアゲに正当防衛もヘッタクレもあるか。

……ってツッコミしてる場合じゃなくて、この状況さすがにまずくない？

私、体力なら速攻インターハイ行けるくらいの自信はあるけど、喧嘩とかあんましやったことないし……いくらなんでもナイフとメリケン相手に素手とか……。

ところが困ったことに、周りに武器になりそうなものが何も……はっ、そうだ！　こんな時こそこいつの出番！

「や、八雲！　あんた何か武器とかないの！？」

「武器ですか？一応護身用のがありますけど……ところで、あれがかの有名な『ヤンキー』ってヤツですか？」

「そうよ！　それよりあるのね武器！？　早く……」

「あ、その前に、折角なんでよかったらこの時代のヤンキーの皆さ

んにインタビューとかしておきたいんですけど……」
「んなことしとる場合か！　さっさと武器よこせ！」
「わ、わかりましたよ……ちぇっ」
なんでこの状況で舌打ち出来るのか拳で聞きたいところね。何、ヤンキーにインタビューって！？　勉強熱心にも程があるでしょ！？　だけど、今はそんなことしてる場合じゃないから見逃してあげるわ。
しぶしぶながら、八雲はポーチに手を入れて、
「あ、若葉さんって剣道とかできます？」
「え？　まあ、前に助っ人で出たことあるけど……」
ちなみにその時は、助っ人した部の連中全員倒して優勝したわ。
「そうですか、じゃあこれを」
と、八雲はポーチから取り出した『何か』を私の手に握らせた。
何かしらコレ？　警棒にしては短いし……スタンガン？　違うわね、電極がないもの。何だろ、見た感じまるで、刀身が無い剣の柄の部分だけみたいな……ってコレもしかして……！
その時、私の指が何かのスイッチに触れたらしく、

ヴォン

「この時代で言う……ラ〇トセイバーです」
「これは危なすぎるわ！」
棒の先端から出てきた光の剣に度肝を抜かれた。いや、いくらなんでもこれはヤバいって！　某宇宙戦争映画でしか見たことないこれが１２００年後に実際に発明されてんのにも驚いたけど、何で平然とコレを出すの！？　てかコレ１２００年後には一般の護身用武器として使われてんの！？　何そのハリウッドのＣＧ担当も真っ青な世紀末的戦闘街！？
「さて、じゃ僕はこっちを」
そう言って八雲はさらにポーチから、

すちゃ

どう見てもスーパー戦隊仕様の光線銃にしか見えない『何か』を取り出して構えた。

だからあんたは何でそう躊躇いもなく……！

「な、何だアレ？」

「ははっ、何出すかと思ったらおもちゃの剣とレーザー銃か！　かわいいじゃん！」

「ビビって損したぜ、運動神経はあっても、所詮は一般人（パンピー）だな」

違うんです！　こいつのは正真正銘本物……っていうかこいつ自身本物なんです！

そんなことを知る由もないヤンキーの皆さん。その1人が、ナイフ片手につかつかとこっちに歩み寄って来た。ああっ、来ちゃダメ……

「オラオラぁ！　さっさと財布置いて……」

ピュンピュンピュン！

妙に甲高い電子音ちっくな音が3回。と同時に、私の動体視力が超高速でとぶ光弾のようなものを一瞬だけ捕らえ……前進していたヤンキーさんが音もなくその場に倒れ伏した。

「「「「……」」」」

一同、絶句。そして……

ダッ！！

人間の危機管理本能が見事に働いたらしく、残るヤンキーの皆さんは一斉に踵を返して逃げ出した。

「おおおおおい！　何だ今の！？　モノホンか！？　モノホンの

拳銃か！？」
「バカいくらなんでもそんなわけねーだろ！　ありゃきっと改造エアガンだよ！」
「どっちにしろヤバいだろ！　逃げんぞ！」
うんうん、賢明な判断だよね……ってちょっと待った！　鞄は置いてけってば！
間髪入れずに私は走りだし、八雲も走……ると見せかけて離陸した。
「うわあっ！　お、追って来たあっ！」
「く、来るなぁっ！」
と、逃げるヤンキーの1人が、私達の進路を妨害すべく、立て掛けてあった大量の鉄パイプを蹴飛ばして倒した。うわっ、危なっ！
そして私は思わず持っていた光の剣を振るって（ズパパパッ）わああああっ！？　斬れた！　ホントに斬れた！　全部！　真っ二つ！
「ちょっとちょっとちょっと！　ホントに危ないでしょコレ！　あんたのレーザーも！」
「あ、大丈夫ですよ。その剣も、この銃の弾も、帯電性特殊光子で構築されてるんです。硬質の物体は破壊できますけど、人体とか、生体に対しては殺傷力は低く設定されてますから」
「そ、そうなの？」
じゃあ、さっき凶弾に倒れた人も無事？
「はい。せいぜい2、30秒間ショックで心肺停止する程度ですから」
「十分危なっかしいわよ！」
「あ、あと剣の方は、出力と使い手の実力次第では『スパッ』といく場合も……」
「全然大丈夫じゃないじゃん！」
私結構剣道自信あるんですけど！？
「でもほら、いざとなっても……テレポートで帰っちゃえばアリバイは完璧ですから」

「殺る前提で話すな！」
「失礼な、いかに不届き者とはいえ、せいぜい病院送りくらいでとどめますよ」
「十分ヤバいっつの！　思考が！」
「だから何であいつらフツーに話しながらついて来れてんだよ！？」
「知るか！　あーくそ貧乏くじ引いたっ！」

命の危機を感じて残り少ないライフに鞭打って走るヤンキーの皆さん。もう、何でそこで『盗品を捨てる』って選択肢が出てこないかな……いい加減追うのもめんどいんだけど。と、
ん？　なんかそのさらに前方に人影が……
「……ん？　何だ？」
「おい！　どけそこの女（アマ）！」
どうやら前の道に無関係な女の人がいて逃走経路をふさいでいるらしい。あ、どなたか存じませんが、危ないから早く退いて……あれ！？
ヤンキーの隙間から見えたその『女の人』って……あの白衣とあの金髪とあのメガネは……もしかして……

「は、葉桜先生！？」

一昨日に顔を見たばかりの養護教諭だった。
「お？　そこにいるのは、２年１組出席番……」
「先生！　人の学籍情報丁寧に口に出して認識してないでそこどいて下さい！　危ないから！」
この人は説明なしで人のことを呼べないのか？
「危ないって何……ん？」
と、ナイフを構えたヤンキーの集団はいよいよ先生のところにさしかかって……って先生！　だから危ないから逃げ……

「「「オラどけぇ――――っ！」」」

ばきばきどか！！

「「「ぎゃあ――――っ！！」」」

……あれ？

ヤンキーが先生に突っ込んでいった瞬間、先生の手と肘と足がすごい速さで動いたかと思うと……その２秒後には、ヤンキーの皆さんが全員地に倒れ伏していた。

え、ちょ……先生！？　あんた何したの！？

「何だよこいつら？　ったく、危ねーな……」

いや、あなたのほうが危ないって可能性もかなり濃厚ですけど……

今の一瞬でエルボー、ストレート、ハイキック、裏拳、そしてフィニッシュに弾丸のごとき飛び膝蹴りを決めて総勢５人のヤンキーを全員沈めた葉桜先生は、ピカピカの白衣についたほこりを悠然と払っていた。

す、すごすぎ……私でもほとんど見えなかった……。葉桜先生……何者！？

「それはそうと……おい、お前らこんなとこで何してんだ？　こいつら何だ？」

「あ、実はかくかくしかじかでして……」

「ふーん、なるほどな。ほれ、鞄」

と、連中が持っていた私の鞄をぽいと放る。っとと、キャッチ成功。さて……ああよかった、中身何も盗られてないみたい。

そして先生は携帯を取り出して『１１０』を押して警察を呼び、その後、流れるような手つきで連中の財布から現金を抜き取り、ぴくっと動いて気がつきそうになった１人に当て身をかまして再び眠らせた。……あれ？

「んじゃ、こいつらは私が処理しとくから、お前ら帰っていいぞ？」
「あの、今何か問題行動が見えた気がしたんですけど……？」
「気のせいだ、さっさと散れ、失せろ、消えろ」
「……はーい……」
何言っても無駄そうだなと悟ってもう行こうとした私たちを、
「あ、それと、それしまってけよ。いくらおもちゃでも、補導されんぞ？」
「え？　あ！　はい！」
と、私と八雲の持ってる光の剣と光線銃を指差して言った。あわてて私は刀身をしまって八雲にそれを返し、ポーチにしまわせる。
「ん？　今のお前のそれ、剣縮まなかったか？」
「き、気のせいですっ！　じゃあ私たちはこれで！」
これ以上何か聞かれる前に、私は八雲の手を引いて全速力で逃げるようにその場を去った。というか……逃げた。
よ、よかった……何だか知らないけど、それ以上に大きな事件が目の前で展開したおかげで、先生私たちが裏路地で何してたのかとか聞かなかった……運がいいわ。うん。
先生が異常に強かったとか、何でこんなとこにいたのかとか、ていうか現金抜いてたとか、気になることはいくつかあったけど……そういうことはもう考えないようにして、私はひたすら路地を走った。
……そのせいで、後ろのほうで何ごとか八雲がつぶやいていたことに気付かなかった。
「……『葉桜先生』？　それにあの服……今の飛び膝……もしかしてあの人……」
☆☆☆
「ったく……とんでもねーことするな、あのバカガキは……」

誰もいなくなった裏路地で、葉桜翠はポツリとつぶやいた。

レギュラーと異常事態

ある日には、行く先々の店でなんとも苦しい言い訳をしながら、『自由研究』用の大量の食料品をあちこちで買い込み、

その次の日には、はしゃぐ八雲と一緒に特急で遠出し、雑貨屋やホームセンターで、家財道具から小物まで目に映る興味をひくものをとりあえず買い漁り、

その更に次の日は、薬局では普通の薬類を購入した後、引ったくりにあってその犯人を追いかけたところ、光線銃の乱射やら葉桜先生の飛び膝やらによって、なんやかんやで犯人に同情したくなるような結末になった。

……何この非日常……私、普通の高校生だったのに……。

その途中で、私もいろいろと買ってもらったからまあ……ギリギリ我慢してあげてるんだけどね……。

はあ……おかげでこれからしばらくの間、私の生活範囲はぐっと狭まったわ……。

そんな重い闇を背負いながら、その翌日……すなわち、私が琴子のレギュラー降板を知らされてからちょうど三日後のこと。

事件は……起きた。

いや、事件というほど派手ではなかった。でも、間違いなく……異常事態ではあった。

まあ……異常事態そのものは、その前から着々と起こっていたらしいんだけど。

☆☆☆

「レギュラー復帰した？」

朝、学校に来てみると……私の耳に最初に飛び込んできたのはそんな話だった。

復帰って……琴子が？　へー、よかったじゃん。

復帰できたってことは……昨日の放課後にあった最終考査でいい結果出せた、ってことよね？　ほーほー、人間やればできるもんなんだ……正直びっくりだわ。

けどまあ、親友としては嬉しい限りかな。あいつの念願が大逆転で叶ったわけだし……その話題性のおかげで、昨日の買い物のことがほとんど噂の頭に登ってきてないし。

ところが、

「それがさ……おかしいのよ」

いつもは堂々としているすみれがこそこそと、耳打ちでもするかのごとく私に話す。

「おかしいって……何が？」

「うん、その……琴子なんだけどね、なんか一昨日まで相変わらず不調だったのに、昨日の放課後急にタイムが伸びたんだって。それも……自己ベストから１秒以上も」

「え！？」

どうにか声を小さくとどめたけど……驚きのあまり変な声が漏れてしまった。いや……仕方ないじゃん、そんな話聞かされたら……。

確か……一番最近の琴子の１００ｍ走のタイムは、１３秒かそこらだったはず。正直、それでよくレギュラーとれたな。猛練習したのと……あとは運もあったんだろう、とは思ってたのよ。後輩でもそこより早い奴たまに見かけるし。

だから……もしかしたら抜かれるんじゃないかな、とも思ってた。

けど、今の話は明らかにおかしい。最高に調子のいい時の琴子のタイムが１３秒だとして、短縮１秒以上だと……１２秒フラット…

…！？

「あたし、前に聞いたことあるから知ってるんだけどさ、高校女子１００ｍのタイムって、最高がたしか１１秒２だか３で、１１秒７切れば全国歴代ベスト１０に入るのよ。で、昨日琴子が出したタイムが……１１秒５」

な……っ……一晩で１．５秒！？　それに、あと０．１秒であたしと同じじゃない！　そんな……いくらなんでもありえないでしょ！

「あんたの身体能力の規格外さに色々と突っ込みたいところなんだけどやめとくわ。それでさ……色々と妙な噂が立ってるのよね……」

「妙な噂……？」

まあ、いきなりそんなことになったら、噂の１つや２つ立つだろうけど……。

「うん、１つ目は……ドーピング疑惑。琴子が何か、怪しい薬使ったんじゃないかって」

「まさか！」

琴子はそんなことする奴じゃないし……そんな度胸もない。第一、口ではひねくれてるけど、陸上に対してどこまでもまっすぐなのがあいつの長所なのよ！？

「うん、私もそれは思う。まあ、こんなのどうせ陸上部のヒガミ連中が流したデマでしょ、すぐ消えるわ」

「そう……かな」

「そうそう。人の噂も７５日……って言うでしょ？」

いい響きだな～……。できれば私と八雲の買い物に関する噂も早々に消えてほしいんだけど……こっちはあと２，３年は無理かも……。

で、気を取り直して……もう１つの方って？

「あ、うん。こっちは特に名前とかないんだけど……ここんとこ、この学校で不思議なことが多いみたいなのよ。その一種じゃないかって」

不思議……ってどういうこと？　別に何も聞かないけど……。
「ごく最近だけど、いろいろあるわよ？　たとえば……成績優秀だった生徒が急に不調になって赤点取ったとか、逆にいつも赤点だったのがトップ１０に来たとか、引っこみ思案な１年の男子生徒がいきなり大胆になって衆人環視の中で女の子に告ったとか……それにさ、このクラス……最近欠席多いじゃない？　それもこれらの１つじゃないかって」
ふーん……知らなかった。そんなことあったんだ。
でも……まあ、不思議っちゃ不思議だけど……どれも偶然でありそうなことじゃない？　体調崩したとか、ヤマが当たったとか、悪いもの食べたとか……いくらでも理由浮かぶし。まあ、全部いっぺんに起こってるのはちょっとミステリアスかもだけど……。
「まあ、あくまで噂だしね……私も深く考えるつもりはないよ。気になっただけ」
「そっか、うん、ありがと」
そろそろ始業ということで、そんな感じで会話を切り上げて、すみれも私も席に戻った。
何の気なしに教室を見回してみると、持ち主を伴っていない机が、1……2……3……全部で8つ。その内、あそことあそこは遅刻常習犯の吉備野（きびの）と佐津間（さつま）だから省いて……6人欠席か、確かに多いかも。
ふと、視線が窓際の席に座る琴子を捕らえる。
3日前は失意に沈んでいたその表情は……今は嬉しさを隠そうともしない満面の笑みに変わっていて……と、目が合った。それに気付いた琴子は、穏やかに私に笑いかけ、私も反射的に笑みでそれに返した。
……考えすぎよね……。あの陸上バカの琴子がドラッグなんて。あーあーやめたやめた、下らない。考えるだけ無駄！　どうせ考えるなら……あいつのレギュラー復帰をどうお祝いしてやるか考えよ。
「さて……と、それじゃあ、今日の放課後にお祝いにアイスでもお

ごってあげますか」
「おや？　景気がいい話だね、何かいいことでもあったのかな？」
「えっ！？　あ、白樺先生！？　い、いつから……」
見ると目の前には、いつの間にか、我らが２－１担任・白樺先生が出席簿片手に立っていた。
と、とっくに教室入ってたんだ……てか、今のモノローグのつもりだったのに、声に出てたっぽい……うわ、はずかし……。
しかしやはりそこは白樺先生、特に怒ったり、不機嫌になった様子はなく、白衣と同じようなピッカピカの笑顔で、
「ふふっ、友達思いなのは大いに結構だけど、できればちゃんとホームルームでは先生の話を聞いてほしいんだけどな」
「は、はい……」
反省します……。
教壇に移った先生に一礼しつつ、私は気を取り直してその話に耳を傾けることにした。

嵐の前の静けさ

「あ……ありがとうございました……」

外に出る直前、店員の乾いた挨拶が背中に降りかかる。……もう慣れたけど。

今日は化粧品屋と楽器屋と、スポーツ用品店で買い物して今出てきたとこ。

荷物は昨日までと同様に郵送で設定した。何か知らないけど、こいつはカモフラ用に小さな一軒家まで用意してるらしい。便利な……。

「ところで……若葉さん？　その……何かあったんですか？」

「え？」

どゆこと？

「はい、その、何というか若葉さん、今日ちょくちょくうわの空だったような気がして……学校で何かあったんですか？」

心もち眉をハの字にして心配するように言ってくる八雲。あら……私そんな感じになってた？　まあ、確かに……さっきからちょくちょく脳内にすみれが言ってた噂がリピートするのよね……そのせいかも。

けどまあ、わざわざ話すほどのことでもないでしょ、噂だし。

「ん、大丈夫、何でもない」

「そうですか？　それならいいんですけど……」

これ以上追及するのも野暮だと思ったのだろう、それ以上何もいわなかった。

「で、次どこ行く？」

「そうですね……あ、その前にトイレ行ってきていいですか？」

「ん、いいわよ、行ってきな」

八雲は一礼すると、手近にあったコンビニに入って行った。まあ

……トイレ借りるくらいなら大丈夫でしょ。さて、私はゆっくり待ってると……ん？
通りの向こうに、見覚えのある人影が見えた。あれは……葉桜先生？
相変わらずの白衣姿で、早足で歩きながら周りをきょろきょろと見回している、若干挙動不審の葉桜先生が見えた。何してんのかな……？
と、
「おや？　そこにいるのは……常盤さんかい？」
背後から、いきなり聞き覚えのある声が聞こえてきた。え……この声、まさか……？
ゆっくりと声のした方を振り向くと、今度はそこに別の白衣がいた。
「あれ、白樺先生？」
「やあ、奇遇だね。買い物かい？」
学校の外でも相変わらず白衣の白樺先生が立っていた。手にスーパーの袋を持ってるってことは……仕事終わりの買い物帰り？
で、でもよかった……ちょうど都合よく八雲のやつがいない時に会えて……あいつが一緒だったら１００％ややこしいことになってたし。
と、
「ああそうだ、ちょうど聞きたいことがあったんだよ常盤さん。君、体は大丈夫？」
「は？」
いきなり変なことを聞かれた。え？　どういう意味ですか？
「いやほら、最近風邪が流行ってるみたいで、学校全体で欠席者が結構な数になってるでしょ？」
「ああ……そういえばそうみたいですね」

「うん。特にうちのクラスなんか、欠席の連中に加えて柏木と松田が早退したからさ。窓側から3列目のあの列、常盤さん以外全員休みで君が休むとビンゴなんだよ」
んな、人をビンゴブックか何かみたいに言わんで下さいよ。
「ついでに今なら君が休むと学級閉鎖も付いてくるんだけど、どう？　休んでみない？」
「こらこら、教師がズル休みを教唆しちゃだめでしょ先生」
そんなテレビショッピングか何かみたいに言ってもお得感ないです。学級閉鎖って……それたしか後で補習入るでしょ。
「ははは、まじめでよろしい。そうだ、そんなまじめな常盤さんにはご褒美をあげようかな」
「はぃ？」
言うやいなや、先生は袋の中に手を入れ、缶コーヒーを取り出して差し出してきた。
「え、いやあの……いいんですか？」
「ああ。実は僕ブラック飲めないんだけど……間違えて買っちゃってさ。捨てるのももったいないし、常盤さんさえよければ」
あ、そういうこと？　それなら……いっか。うん。
素直にそのコーヒーを貰うことにした。ブラックだから……夜食にしよっかな。
いやー、しかしこの人やっぱいい人だわ。この前も手伝いのお礼にってジュースもらったし。
「じゃあ、僕はこれで。気をつけてね」
「はーい、先生」
私の返事に微笑みで返すと、先生は横断歩道を渡って去って行った。ふふっ、得した♪
小さくなっていく白樺先生の後ろ姿を見ていて、ふと私は、向こうの方に葉桜先生もいたことを思い出した……ってあれ、いなくなっちゃった。
この間といい、今日といい、よく見るなあ……何でこんな所にい

るんだろ？
　そういえば……葉桜先生って、妙な噂あるのよね……。ときどき保健室から消えるだけじゃなく、学校からも消えたり、かと思えば、学校とは全然関係ないところにいたって目撃情報があったり……。普段何してるのかわからない先生っていうのが、あの人の印象だから。
　う～ん……微妙に気になる……でもまあ、気にしても仕方ないか。他人のプライベートのことだし、特別変なことしてるわけじゃないだろうしね。
　それにしても……遅いわね、あいつ。
「いつまでかかってんのかしら……八雲のやつ」
「呼びました？」
「おわ！」
　と思ったらなんてタイミングで帰ってくんのあんたは！？　何！？　タイミングでも測ってたわけ！？
「……？」
　くっ……素で『？』な顔……。怒るに怒れない……。
　無駄にまぶしい白学ランのそいつは、トイレ借りた礼儀か、それとも単に欲しかったのか、大量の食玩とカードゲームを買い込んできていた。あと、別の袋に１００円しない安いお菓子が大量に。また目立つ真似を……。
　ま、いいか。この程度のこと、気にしても仕方ないし。
　……割とたくましくなったわね、私。
「さて、じゃ、次はどこに……」
　と、
　ヴーッ　ヴーッ
「？」
　と、私のポケットで携帯が震えた。電話？　誰からだろ？

八雲に『ちょっと待ってろ』と合図してから携帯を開くと……ん？　母さん？

「あーもしもし、何？　いきなり……」

……と

私の言葉はそれ以上続かなかった。

電話の向こうで母さんが早口に言った『内容』を聞いた途端、全身に摂氏－３０度の吹雪が吹き付けたかのごとき衝撃とともに、私の思考は完全に停止した。

「……若葉さん、どうしました？」

「……あ……あ……」

「……『あ』？」

「……青葉……が……」

赤い絶望、白い希望

買い物、当然中止。
電話越しにお母さんから凶報中の凶報を聞いた私は、ダッシュで病院に行こうとして、それより早い方法を思い出した。八雲に頼みこんでテレポートを使ってもらい、病院の裏路地にワープ。
後で聞いた話なんだけど、その『テレポート』はどこにでもできるわけじゃなく、事前に設定した場所にしか行けないんだとか。けど、八雲が緊急用に……って設定してくれてたおかげでワープ出来た。
が、そこに礼を言う余裕もなかった私は、着くやいなやマナーも何も関係なしに、全力疾走で病院の廊下を駆け抜けた。
そして、視界の隅を『この先集中治療室』というプレートがかすめた次の瞬間、

……目の前を、息も絶え絶えな青葉を乗せた病人輸送用の台車（名前忘れた）が通り過ぎた。

ドラマなんかだと、『青葉！　青葉！』なんて叫びながら駆け寄ったりするんだろうけど……私にはそんな余裕もなかった。パニックだったのもあるけど……それ以上に、青葉の姿がショッキングだったから。
元々赤かった顔色が、冗談も誇張も抜きにトマトみたいな赤色になってて、しかも首までだったはずのその色は、手首あたりまで広がってきていた。昼間にはなかった人工呼吸器が装着され、１本だった点滴が３本に増えている。
と、
完全に私は言葉を失い、呆然とする私の目の前で……青葉の目が開いて、私の方を見た。

そこで私はさらに驚いた。青葉の……黒目の部分が、黒ではなく毒々しい黄色に代わっていたのだ。これじゃあまるで……猫か何かじゃない！？

目を見開いた私の驚愕に構わず、青葉は看護婦さんに手で合図して、呼吸器をはずしてもらって、

「姉……ちゃん……？　あぁ……来たんだ……？」

聞こえた青葉の声に……私の体の硬直が解けた。

すぐさま私は青葉の台車に駆け寄り、赤くなった手をとった。あ、熱い……！？

「く、来るに決まってんでしょ！？　あんた何よこれ！？　どうしたの！？」

「さー……？　知ってたら、先生たちも……こんなパニックに……なんねんじゃね？」

息も絶え絶え、目の焦点はあってない。そういう場所に立ち会ったことなんかない私でも、いまの青葉は瀕死だとわかった。

それでも軽口を叩いて私を安心させようとする青葉に、私は泣きそうになってしまった。こいつ……いつもいつもこんな感じなんだから……！　見てて逆につらいわよ！

「何……泣きそう……に、なってんだよ……ばーか……。まるで……俺が死ぬ……みたいじゃんか……」

「青葉！　お願い……！　嫌……私……！」

「大丈夫だっ……て……。言ったろ？　姉ちゃ……の……フルコース……食べに……」

「そうよ！　ドライカレー、生姜焼き、オムライス、ビーフシチュー！　何でも作ってあげる！　だから青葉！　あんた……」

「顔……怖いって……」

黄色く変色した目で、懸命に笑う青葉の声が、次第に小さくなってきているのがわかった。ああ……いつもと同じだ……笑い顔だけは……。

「大丈夫……ちゃんと……戻……ら……。あ、でもさ……」

「……！？」
「念のため……聞い……あのさ、死んだじいちゃんとばあちゃんに……何か……伝えることとか……ある……？」
「縁起でもないこと言うんじゃないアホ！　さっさと直してフルコース食べに来い！」
「はは……了か……い……」
と、ここで限界と判断した看護師さんが、再び人工呼吸器を装着し、青葉を運び始める。
私はそのまま、青葉を乗せた台車が集中治療室の分厚い扉をくぐるのを見ていた。

☆☆☆

落ち着いてから母に話を聞いたところ、容体が急変したのは1時間ほど前からしい。
風邪にしては治りが遅く、謎の症状も見られることに不安を抱いていた母の目の前で、青葉は突然震えだし、呼吸困難を訴え、顔の赤色が急激に拡大した。その後さらに、呼吸不全や血圧変動、不整脈や関節痛などの症状が滅茶苦茶に現れ始め、今に至るとのこと。
現在は人工呼吸器と強心剤、さらに鎮痛剤と緊急用麻酔を投与することである程度症状を緩和させているらしいが……状況は聞くまでもなく最悪らしい。
今まで見たこともない奇病ということで、病院中の先生の知識を動員して、さらにはプライドを捨てて医学事典なんかを開いてくれたりもしたんだけど、病名は結局わからず、間に合わせの処置で命をつないでいる状態。事実上のお手上げ……だそうだ。
「……多分……今日明日が峠だって……先生が……」
そういって顔を伏せる母の声は……震えていた。信じたくないんだろう。でも、お者がそう言ってるから、他の説がどうにも考えられなくて……そんな感じかな。

私だって、『そんなことない、必ず治る！』って、胸を張って言いたい。でも……心のどこかで、専門知識も何も持ってない無力な自分が、それに歯止めをかける。
青葉の死という最悪の結末が、あまりにもリアリティを持って目の前に立ちふさがっている。それを目の前に何もできない自分が悔しくて仕方ない。

けど……どうしようも……ない……。

椅子に座る気にもなれず、どのくらいかもわからない間を待合室で立ち尽くしていた私は、もうこれ以上この純白に包まれた空間にいるのが嫌になり、重い足取りで病院の外へ出た。
母さんも、遅れてきた父さんも、誰もそれを止めたり、気にかけたりしなかった。……する余裕はなかった。

☆☆☆

外に出ると、律儀にも八雲は入り口で待ってくれていた。
気づけば外は暗くなっている。7時は確実に回っただろう。となると……2時間近くもここで？　……悪いわね、なんか。
私に気付いた八雲は、すっと私の前に出た。
「……目、赤いですよ」
「知ってる」
さんざん泣いたもの。トイレで。
そのせいか、吹き付ける風が目の淵にひりひり痛い。ま、いいけどさ。その方がむしろ、痛みで気がまぎれるし。
と、八雲はここで、私の心を呼んだかのようなタイミングで聞いてきてくれた。
「……どこか行きます？」
「……」

私は少し考えて、

「……屋上」

了解、とだけ言って、八雲は私の手をとる。

もう慣れてしまったあの浮遊感。その一瞬後、私は眼下に青林の街並みを見下ろす、高校の屋上に立っていた。

……やっぱりここ、いいなあ……。夜風が気持ちいいし、いつもいる場所だから、心境に関係なくなじむ。頭冷やすのにちょうどいいわ。

……ここでどれだけ過ごして、どれだけ寝て、どれだけ泣いたとしても、私の心は青葉の死という現実を受け止めることはできないだろうけど……。それならそれで、今だけは逃避してよっと。

どうせ……後でさんざん、狂うほど泣くんだろうし。

病名からしてわからない。医者さえもさじを投げた。今日明日が峠……積み重なった事実が、私のわずかな希望すらも奪っていく。いや……最早そんなものあるのかも疑わしい。

色々考えて、でも結局同じところに行きついて、どこにも行けない。そんな脳内フローチャートを繰り返し、やがて私は……考えるのをやめた。それだけでつらいから。

ああ……何かこれ楽だな……しばらくこのまま、何も考えないで現実逃避してボーっとしてよっと。

帰り？　心配ないわよ、八雲なら待っててくれる。私を置いて帰るような真似しないわ。ほら、今も私の目の端っこにコイツの白学ランが、病院の内装の色と同じ色の白学ランが映って……

……と、

ここで私は……ふと、あることを思いついた。

いつの間にか座り込んでいる私の傍らに、黙って立って付き添っ

ていてくれてるこの男、八雲琥珀……。
その正体は、超常現象顔負けの科学技術を操る未来人……だ。ワープといい、透明になる迷彩装置といい、飛行能力といい……それらの科学技術はどれもケタ違いだ。

……だったら……『医学』技術はどうだろう……？

ひょっとしてこいつなら……反則級の常識破りを普通にこなせるこいつなら、ひょっとして……青葉を助けてくれるんじゃ……？
横を向くと、気まずさゆえか私からは目をそらしている八雲の、全身の姿が目に入る。そして、そのまとっている白学ランが……さっきまで、青葉の顔色を余計に目立たせていたがために嫌いだった純白が、今は何より頼もしく見えた。

「……ねえ、八雲……？」
「はい？」
「その……頼みがあるんだけど……？」

救済の障害と病魔の正体

「……結論から言うと……すいません、無理です」
「……どうして……？」

予想……しないではなかったけど、できれば帰ってこないでほしかったその答えに、私の口は自然とそう動いた。
どうやら、私は表情もまた相当に悲痛なものになっているらしく、八雲は先のセリフで意思を明確にしつつも、非常に言いにくそうにして続きを口にした。
「えっと……助けてあげたいのは山々なんですが……未来の痕跡を、なるべく過去に残してはいけないんです。未来技術（オーバーテクノロジー）の薬品とか精密機械とかはもう論外で……それに、仮にそこに目をつぶっても……そんな多種類の薬とか常備してないですし……」
「そっか……」
まあ、なんだかんだ言っても、あんたも学生だしね……。
ドラマなんかではここで、何を犠牲にしてでも食い下がるか、助けてくれない薄情さを罵倒したりするんだろう。でも……
申し訳なさそうにしつつも、私の目をまっすぐ見て言ってくれるコイツの目に、曇りとかそういうのは一切感じられない。これは多分本当のことで、コイツ自身、本当に悔しがってくれてるんだ。知り合ってまだ一週間もたっていないけど……そのくらいはわかる。
こいつは使うアイテムはすごいのに、所々でバカで間抜けだ。……でも、純粋で、正直だ。思いやりもある。だから……こういう場面での対応も、できる範囲内で精いっぱいやってくれるやつだ。
その八雲が、ここまではっきり『無理』……って言ってるからには……無理なんだろう……。……残念だな……最後の希望だったんだけど……やっぱだめか……。
悔しさをこらえ切れなかったんだと思う。私はふと目に入った、

誰かが屋上にポイ捨てしたらしい空き缶を、思いっきり蹴った。空き缶は蹴りの威力に一瞬でひしゃげて、

カァン！！

快音を立てて夜空の彼方へ消えた。……やっぱり、全然気分晴れないなあ。

と、再び座り込んだ私に対して、

八雲はせめてもの協力とでもいいたいのか、携帯（？）を開いて、

「その……若葉さん」

「何……？」

「えっと……かなり規則ギリギリですけど、病名を調べるくらいなら……。症状を教えていただければ、それを手がかりにコレを使って探しますよ？」

と、申し出てくれた。

やっぱりというか、直接直してくれるわけじゃないみたいだけど……これはこれですごく魅力的な申し出だ……。ここで病名を突き止めてもらえれば、まだ治る可能性も出てくるし……たとえ無理でも、寿命を延ばせるかもしれない。

でも……なんて『もしも』の弱音は封印して、八雲に向き直る。

「……うん、お願い」

「わかりました。では、どうぞ。順を追ってお願いします」

「えっと……症状は、風邪と同じ感じに、咳とか、鼻水とか……あと、発熱。ピーク４０度」

「ふむふむ」

相槌を打つたびに、結構な速さで八雲の指が動き、ホログラムのタッチパネルを叩いて携帯（？）に情報を入力していく。なんか……期待持てるかも。

っと、他には……ああ、一番特徴的なのが残ってた。

「その他に、目のかすみと、手の震え。それから、一番きついのが

……」
「のが？」
「体中が真っ赤なの。腫れてるわけじゃないのに、トマトみたいに」
と、その時、
「……え……？」
なぜか……八雲がキーボードを打つ手が止まった。え……どうしたの？　続きは？
「顔が……赤色？　真っ赤……？」
「うん。それとね、それが悪化して、こ……」
「待ってください」
と、唐突に止められた。
何だろうと思って八雲の方を見ると……八雲はなぜか、冷や汗を流して、顎に手を当てて何やら考えていた。お気楽と言っていい性格のこいつが、今まで見せたことのない、すごく必至というか……鬼気迫るような顔で。
「その先……もしかして、目の変色、呼吸困難、不整脈、関節痛……って感じの症状では……？」
え！？　な……何で知って……？　まさか、病名わかったの！？
と、私がリアクションを顔に出した次の瞬間、
ギュオン
「っ！？」
擬音とともにいきなり八雲の姿が掻き消えた。何の前触れもなく、本当にいきなり。
呆然とする私がそれを認識し、ちょうど『何で？　どうしたの！？』と混乱し始めたころ、再びの祇園とともに八雲が戻ってきた。
ただし……その手に、手のひら大の小さなカプセル型のケースを

持って。中には何やら薬品と思しき液体が入ってるけど……何それ？
ちょ……何なの？　いきなり消えたり、戻ってきたり……どこ行ってきたの？　と、聞こうとしたが、
「や……八雲……？」
戻ってきた八雲の、質問することも躊躇われるような真剣な顔を前に……聞けなかった。
いつものんきなこいつが今まとっている、ただならぬ雰囲気。それらに私が気を取られていると、八雲は唐突に私の手をとり、何も言わずに見たこともない腕輪をそこにはめた。
そしてこれまた唐突に、その腕を握って、

ギュオン

再度の空間転移（ワープ）。ただし……今度は私も一緒だ。
そして、私と八雲が舞い降りたのは……

（えっ……ここ……集中治療室じゃ……！？）

真っ白な内装に、何だかよくわからない機材の数々。せわしなく動き回る看護師さん達。
そして何より……目の前のベッドに横たわる、全身真っ赤の青葉。すでに赤色は指先にまで広がっていた。
ど、どうしてここに？　ていうか……何で来れたの？　ワープって登録した場所以外にはできないんじゃ……
いや、それ以前に！　こんな場所に、しかも医者とか看護師が大勢いる中にいきなりワープなんかして現れたらパニックに……あれ、ならない？
「その腕輪をつけていると、簡易型のステルス迷彩が起動して、あなたの姿が見えなくなります。長くはもちませんが、十分でしょう。そこ、動かないでくださいね」

と、言いながら八雲は、看護師さん達を上手くよけて（やっぱり見えてないんだ）青葉が寝ているベッドに近寄っていく。そして、青葉のベッドの傍らに立つと、八雲は眉をひそめて、一言、

「……やっぱり……」

「え？」

私が『何が？』と聞くより前に、八雲は持っているカプセルの片方の先端を押す。すると、カプセルのもう片方の先端から、細くて短い針が出た。

八雲はおもむろに針を下にしてカプセルを逆手に持ち、針を青葉の腕に向けて……ってちょっと？　な、何する気？　ま、まさか……

その『まさか』だということは……すぐに分かった。

八雲は何の迷いもなく、カプセルから突き出た針を青葉の腕に刺し……中の液体を注入した。

すると、私が何か言うより先に……異変が起きた。

青葉の体から……目を覆いたくなるほどの惨状だった赤い色が、すっ……と消えたのだ。それも……ほんの数秒のうちに。

（……え……！？）

まさか……今の……薬？　八雲あんた、ひょっとして青葉を助けて……

『せ、先生！　き、急に脈搏が安定しました！　体の赤みも引いてます！』

『何ぃ！？　どういうことだ、何か注射したのか！？』

『わ、わかりません、本当に突然……呼吸も正常に……』

「……」

確かめるまでもなかった。今の……やっぱり薬だったんだ……青葉の病気の。

素人目にもわかる。さっきまでの滝のような汗がスッと引き、呼吸もスムーズになった。痙攣もぴたっと止まってるし、心地よさそうな寝息も聞こえる。何より……あれだけ見苦しかった赤い色が、もうどこにも見られない。

八雲……。あんた本当に……本当に青葉を……！

よかった……青葉、助かったんだ……！

しかし、安堵の涙よりも先に、私の心にふと疑問が浮かんだ。

でも……何で？　あんたさっき、規則でダメだって言ってたじゃない……？　『この時代に未来の痕跡は残せない』って。青葉を助けてくれたことにはそりゃもう感謝するけど……大丈夫なの？　規則破って。

すると、八雲は少し間をおいて応えてくれた。

「そりゃ、普通はやばいですよ、こんなことしたら。でも……」

……？　でも？

「今回は特例です。未来の薬を使ってもいい……いや、使わなければいけない事例でした」

「？　どういうこと？」

話が見えない……っていうか、言いたいことが分からないんだけど……？

さっきから変わらずシリアスモードの八雲は、カプセル注射器をもとの形に戻すと、ひとまず青葉のそばを離れて私のところに戻ってきた。姿が見えないとはいえ……一応触れるんだから、そこにいたら邪魔になるしね。

そして……私の疑問に対して答えるべく、口を開いた。

「今の投薬は……痕跡を残すためではなく痕跡を『消す』ための処置です。だから……この場合は規則に引っかかりません。まあ……」

そこで一度切って、

「超非常事態ゆえの緊急措置……ってのも理由ですけど」

非常事態って……？　青葉が生死の境をさまよったこと、じゃなさそうだけど……？　言い方悪いけど、そんなくらいで特例出しそ

うにないし。
てか、その前に言ってたあれ、どういう意味？　『痕跡を消すための処置』って……何で薬使って青葉を治すことが痕跡を消すことになる……

……え？

青葉を……青葉の病気を、『治す』……？
それが『未来の痕跡を消す』ことになるってことは……ま、まさか……
私の脳裏によぎったあまりにも突飛な、笑いたくなるほどに吹っ飛んだ最悪の予想は……
次の瞬間、八雲によって肯定され、現実となった。

「ええ……。今、僕が治療した青葉君の病気は……この時代にはまだ存在するはずのない、はるか未来の病気なんです」

『赤鬼病』、その疑惑と謎

「『クリムゾン・オーグル・シンドローム』……？」
「ええ、あの病気の正式名称です。日本での通称は……『赤鬼病』」

集中治療室から再びワープした屋上で、八雲は聞きなれない病名を告げた。いやまあ、当然だけど。さっき言ってた前置きを考えればさ。

「『赤鬼病』……西暦２７９５年、この『現代』から７８５年後に、とある研究所での生物災害（バイオハザード）によって誕生した病です。全身の皮膚が赤く変色すると共に、一時的な衰弱を経て、性格が全面的に短気になり、凶暴化。個人差があるものの、人が変わったように破壊衝動を前面に出すようになる。同時に、身体機能が一時的に回復、むしろ強化される。そして凶暴化から約４０時間後、再び衰弱。その時は回復することはなく、そのまま死に至る……少々不謹慎な気がしますが、赤く染まった体で暴れまわる患者の姿から、名付けられたそうです」

と、八雲は携帯に似た情報端末で検索した『赤鬼病』の説明を読み上げてくれた。まさか……そんなに物騒な病気だったなんて……。

「この病気は僕の時代では、ワクチンが完成していて滅多に見られません。この時代で言う狂犬病みたいなものですね。ですが、発症すると致死率１００％の危険指定疾患でして、警戒を怠ってはいけない病です。僕も警戒のために貯蔵庫にワクチンを持ってきてあったんですが……それが幸運でした」

詳しく聞いたところ、八雲が注射したその『ワクチン』は、病原菌の殺菌と全症状の緩和、そして治癒に必要なだけの体力の回復を同時に行ってくれる優れモノらしい。

それはありがたい話だったんだけど……他に気になることがあったので、感謝の気持ちも早々にどいてしまった。

……『未来の病気』ってことは……つまり、故意にしろ知らず知らずにしろ、未来から来た誰かが持ち込んだ……ってことよね……？　研究所で生まれちゃったんなら、自然に、しかもこの時代に生まれるなんてことないだろうし……。

となると……あまり考えたくないんだけど、もしかして……

「あの……八雲？　もしかしてあんたが……？」

「ご心配なく。それはありえません」

と、八雲は聴いた瞬間きっぱり否定した。

「僕はここに来るに当たって、持ち物は機材から小物まで、自分の体も髪の毛1本に至るまで完全に滅菌消毒を済ませてから来ていますからね。第一、赤鬼病は血液感染ですし……それに僕が来たのは、青葉君が発症した後なのでしょう？」

「あ、そっか」

そーいやそうだ……そもそも私がこいつを見たのは、青葉の病室からなんだっけ（ちょうど未来から来たとこだったらしい。プラズマの粒子だか何だかが体にまとわりついてて、流れ星みたいに見えたんだとか）。滅菌消毒だの血液感染だのはわかんないけど、そりゃ無理だわ。

と、思ったら、

「まあ……責任がない、とも言えないんですけど」

「？　どういうこと？　持ち込んだの……あんたじゃないんでしょ？」

「まあ、僕じゃないんですけど……その『誰か』は、僕の時間跳躍に『便乗』してこの時代に来た可能性が高いんです」

「？」

えっとですね……と、八雲、説明モード。

そもそも『時間跳躍（タイムワープ）』というのは、八雲がいた時代でもかなり新興の技術で、しかも誰でも出来るものではないらしい。ごく一部の限られた人間だけが、研究などの特別な目的でのみ、定められた超

ややこしい手続きを踏んだ上で使用が許されているという。普段は時空間の接続そのものにロックがかけられているんだとか。
「時間跳躍を使えるのは、ＡＡＡ（トリプルエー）ランク以上の実力とそれに見合った実績を持つごく一部の研究者だけなので、世界に１００人もいません。それも、使用に当たっては徹底的な持ち物検査が行われ、使用した履歴も残る……そうなると、この病原菌を持ち込んだ者は、正規のルートでないルートで飛んだ可能性が高いですね」
「そんなことできるの？　厳重に警戒してるんでしょ？」
「正規のルートは。ですが……事前に他人が時間跳躍するのを知っていて、準備を完璧にしておけば……他人の時間跳躍で出来た時空の『歪み』をこじ開けて飛ぶことも、理論上出来るんです。もっとも……ＡＡＡランクよりさらに上の実力を持つ科学者でなければ無理ですし、実際にやったとしても、精度から何から最悪でしょうけどね」
情報端末が映し出していたホログラムをしまいながら八雲は説明を終えた。
なるほど……大体わかったかも。
つまり、あんたのタイムワープに便乗して誰かがこの時代に来た。その際に強引な方法を取ったせいで、こいつより早くこの時代に到着してしまい……そして、青葉はそいつが故意にか偶然にか持ち込んだ『赤鬼病』に感染した……と。
それが誰なのか、何が目的なのかはわかんないけど……その辺考えても仕方なさそうね。未来人が、しかもＡＡＡランクだかの研究者が考えることなんて、化学『３』の私にはぜーんぜんわからな……ん？
ちょっと待てよ……？
今の話だと……あんたもその、時間跳躍（タイムワープ）を使える『世界に１００人もいないＡＡＡランクの研究者』……ってことになるんだけど…

……八雲？　ん？

それを聞こうとして八雲のほうをむくと、八雲が何かに気付いたかのように屋上の下を見下ろしていることに気付いた。ん？　どうしたのかしら？

その視線の先を私も見てみる。

そこには……何の変哲もない普通の景色が広がっているだけ。民家自体も少なく、川の近くの河川敷と、その土手の上の砂利道くらいしか見るもの無いんだけど……あれ？

今、誰かその砂利道を走ってたような……？

暗くて超見えづらい中……目を凝らしてその顔を見てみると……あれって……

「琴子……？」

こんな夜遅くに……何してんだろ？

「あれ、若葉？　何してんの？」
土手の所で座っている琴子の所に、ワープ……するわけにはいかないので、ステルスを書けて八雲と一緒に飛んでいった。で、死角から、あたかも今通りがかったかのように話しかけた、と。
「あれ？　そこにいるの……誰？　彼氏？」
「違うって……」
と、私の後ろにいる八雲に気がついた琴子が、恒例の勘違いをした。はあ……。
ところで、
「あんたこそ何してんの？」
「あたし？　あたしは自主トレ。大会近いしね、やれることは全部やっときたいの」
「そっか、レギュラーだもんね。気合入るわけか」
「そゆこと！」
苦難苦闘の末に手に入れたレギュラーだしね、ベストを尽くしたいんだろう。しかし……陸上してる時のこいつって、やっぱりいい顔するなあ……。
と、八雲がここで口を挟んできた。
「あの……竹内さん？」
「ん？　君は……なんで私の名前知ってるの？　初対面だよね？」
「いえ、ジャージに書いてありますから」
「あ、そっか」
と、着ているジャージの胸元を見て琴子が納得する。
しかし……さすがは琴子。初対面の八雲にも物怖じ一つしないで話してるわね……。
と、八雲がおかしなことを聞いた。
「あの……それで竹内さん、僕の気のせいならいいんですけど、あ

なた……夕方にも同じ格好でこのあたりを通りませんでしたか？
もしかして……ずっと走ってます？」
え！？
ちょ、夕方って……もしかして部活終わり！？　いや、いくらなんでもそれはないでしょ。もしそうだったら、もう3時間以上になるよ？　そんな長い時間……
「あー、見てたんだ。そういえばそのくらいになるかもね」
「は！？」
と、思ったら琴子が肯定しやがったので、私は度肝を抜かれた。
それを聞いて、なぜか八雲が目を細めたように見えのがちょっと気になったけど……後回し！　ちょ、琴子！？　それマジ！？
「琴子、何それ！？　あんたどんだけ走ってんの！？　一体何してんのよ！」
「ちょ、何！？　どうしたのよ若葉！？　怖いわよ！？」
「どうしたのはこっちのセリフよ！　あんた部活終わりからずっとって……3時間越えるわよ！？　何十キロ走って……っていうかあんた短距離（スプリント）走でしょ！？」
素人の私でもわかる。自主トレはまあ立派だけど、それをこんな長さつづけるなんてのは、オーバーワーク以外の何物でもない。だって、部活と合わせると5時間越えるもん！　あんた、この程度のこともわからないようなやつじゃないでしょ！？
「大丈夫大丈夫！　なんかその……ランナーズハイってやつ？　あんまり疲れないの」
……つ……『疲れない』……？
嘘とは思えない、真顔でのその一言に、私はいよいよ不安になった。な、何言ってんのよ……琴子……！？　それだけの時間ぶっ続けで飛ばして、疲れないなんてことあるはずないじゃない！
と、その時、
「それにほら、汗の始末も、水分補給だってちゃんとやっ……て……」

ドサッ

そこまで言って……琴子は無言でその場に倒れた。

「こっ……琴子！」

私がそう叫ぶより一瞬前に、八雲が飛び出して倒れこむその体を支えた。汗でびっしょりのその感触を気にする様子も無い八雲は、琴子の顔を覗き込んで、

「これは……やっぱり、この子……」

なにやらぶつぶつ言ってるけど……何だろう？　何か嫌な予感がする……！

「ねえ八雲！　琴子は……」

と、

「あれ？　そこにいるのは……常盤さんと竹内さんじゃないかい？」

……つい数時間前にも聞いた声が背後から聞こえた。この声……このトーン……

振り返るとそこには……

「やあ、また会ったね……って何、この状況？」

相も変らぬ白衣姿に、何故かまたポリ袋を提げている……白樺先生に出会った。

「せ……先生！？　何でここに……」

「や、学校に忘れ物しちゃって……取りに来るついでにほら、夜食も買おうと……ってそんなことよりさ、竹内さんはどうかしたの？」

と、先生は八雲が抱き支えている琴子の異変に気付いたらしい。

さすが教師。

頬をぺちぺちと叩いたり、ゆすってみたりしても反応がないことを確かめ、額に手を当てて熱を見たりした後で、少し考えて……

「この症状は……脱水症状……かな？」

「え？　でも、水分補給はちゃんとした、って言ってましたよ？」
「それでも足りなかったんだろうね、かいてる汗の量が尋常じゃない。ひとまず……これ飲ませようか」
と、先生はポリ袋の中からペットボトル入りのスポーツドリンクを取り出した。
……この人、色々持ってるな……。
そして、そのキャップに手をかけようとしたその瞬間、

ガッ！

「「え？」」
「……何をするつもりですか？」
そのスポーツドリンクを掴んだほうの手を……八雲が止めるかのように鷲づかみにした。え、ちょ……八雲！？　何してんの！？
いや、その人不審者とかじゃなくて、私たちの担任の先生……
と、声に出して言おうとして……言えなかった。
先生の腕を掴んでる八雲の目。その目は……今まで見たこともないぐらい冷徹で、真剣な目だったから。こ、これ……小動物が怪獣に変身したくらいの衝撃かも……。
で、でも何でそんな……？
私と同じく困惑気味の白樺先生は、そこで八雲の存在に初めて気付いたかのように、
「えーと……君誰？　彼女達の友達か……あ、もしかして彼氏……」
「僕のことなんかどうでもいいんですよ。それより質問に答えてください」
「……？」
ちょ、ちょっと八雲……先生が何を……
「何をしようとしたんですか？　いやそもそも……」
と、そこで八雲は一旦切って、

「何でここにいるんですか？　白樺先生……いや、『白川光晶（しらかわこうしょう）』博士……？」

「……っ！？」

……え……？

八雲、あんた今白樺先生のこと、何て……？　『白川光晶』……？

そう呼ばれた瞬間、白樺先生は……ぴたりと動きを止めた。

いや……動きだけではない。いつも自然な笑みが浮かんでいるその顔の、その表情すらも、何らかの衝撃や驚愕に硬直したように見えた。

そして次の瞬間、

「……フッ」

「……っ！？」

いつも菩薩のごとく温和だった白樺先生の笑み。その笑みが……同じ笑みでも全く違う、ひどく冷たい、まるで見下すような微笑に変わった。いや……これは最早、『嘲笑』とでもよぶべきものかもしれない。そんな感じが伝わってきた。

（な、何なの……一体……！？）

初めて見た……先生が、あの白樺先生がこんな顔するなんて……！

先生はその不気味な笑みのまま、ひどく落ち着いた声で口を開いた。

「これは驚いたなぁ……君、ホントに何者？　僕の本名を知ってるなんて……」

「『知ってる』時点で、わざわざ聞く必要もないでしょう？」

八雲も八雲で、いつものケラケラ笑っている軽い感じとは１８０度違う印象になっていた。目から何から真剣そのもので、目の前にいて微笑を浮かべている白衣の男性教諭に、一分の隙も見せまいとしているように見える。

その白樺先生は、

「なるほど、それもそうだ……ならこうしよう」

と、表情をいっさい崩さずにさらりと言った。そして、
次の瞬間、事態が急に動いた。
凄まじい速さで白樺先生の手――――八雲につかまれていない方の――が動いて、どこからか昨日八雲が私に貸したものと同型の、短めのラ〇トセイバーを取り出し、そのままの勢いで逆手に振るう。
咄嗟の判断で、八雲はそれを腕で防いだ。そして白樺先生が剣を引く間を与えず飛び上がり、カンフーのように派手なアクションで右脚→左脚と連続空中回し蹴りを放つ。
その際につかんでいた腕が自由になり、白樺先生は俊敏なバックステップで蹴りをよけつつ後ろに間合いをとった。
な、何、今の……？
唖然とする私のすぐ目の前に、今さっき白樺先生が琴子に飲ませようとしていたペットボトル入り飲料がごとりと落ちた。
（一体どういうこと……？　何で八雲と白樺先生がバトってるの……！？　ていうか、『白川』が本名って何……！？）
もしももう少し私に冷静に物事を考えるだけの余裕が残っていたら、今までのやりとりから一体これが何なのか簡単に理解出来たかもしれない。けど……パニックに陥っていた私がそれを理解できたのは……
「……聞こえなかったんなら、もう一度聞きますよ……」
これに続く八雲のセリフを聞いた後だった……。
「竹内琴子さんに何をしようとしたんですか？　白川博士……西暦３２８５年に不当に時間跳躍を行い、この時代に『赤鬼病』を持ち込んだ張本人さん……！」

狂科学者・白川光晶

はっきり聞いた今でも信じられない。だって……そんな……短い期間とはいえ、私達の担任をしてくれてた白樺先生が……八雲と同じ未来人……！？　それも、違法な手段でこの時代に来て、青葉に奇病『赤鬼病』を感染させた……！？

おそらく私は今、ひどく困惑した視線を彼に送っていることだろう。しかし、

「竹内さんに何を、ねぇ……」

彼は全く気にする様子を見せず、淡泊な口調で話す。

「それこそ考える必要がないんじゃないかな？　１つだろう？　科学者が験体に対してやることなんて」

「科学者……？」

「そういうことです、若葉さん」

えっと……いまいち話が見えないんですけど……？

あ、そういえば、時間跳躍できるのは『科学者』のみ、みたいなこと言ってたっけ。つまり、白樺先生……もとい、白川先生は教師じゃなく科学者ってこと……？

でも、それが一体何……？

「本名・白川光晶。西暦３２６３年生まれの未来人で、向こうでもかなり有名な科学者の１人です。化学・工学の他にも医学・生物学等を得意分野とし、ランクはＡＡＡ＋。様々な新薬を世に送り出した技術的功労者です。もっとも……」

誰に言われるでもなく説明を始めていた八雲はそこで一旦切って、

「１年前……西暦３２８４年に、実験中の事故で死んだはずですが……」

「ま、表向きはね」

八雲の疑念に満ちた視線に、白川先生は悪びれる様子も見せない。ついでに……隠す気も特に無いようだ。

「まだ記憶に新しい事件です。特定危険病原体の観察・実験を行っていた『国立大６９号研究棟』で、突如として原因不明の爆発が起こり、ケージの一部が破損。隔離されていた危険度６の病原菌が所内に拡散。警備局が異変に気付いた時には既に遅く、所員は全員死亡していた……あなたもその時死んだ、と聞いています」
そ、そんな大変な事件があったんだ……。
……って、あれ？　でも、白川先生は今こうして生きてるけど……まさか……？
「警察による捜査も虚しく、結局真相は不明のままだったのですが……」
「ああ、うん、それ僕の仕業だよ」
言っていることがわかっているのかと聞きたくなるほど、先生はけろっと言ってのけた。
「証拠１つ、証人１人も残しておきたくなかったからね」
「……あなたほどの科学者が、なぜそうまでして？」
「理由は簡単。研究所の方針やら、道徳的・技術的規則やらに従ってちまちま研究を続けるのが面倒で仕方ないから」
と、そこまで言って一旦切ると、白川先生は武器の光の刀身を引っ込めた。そしてそれを腰のホルダーにしまうと、今まで自然な感じに下ろしていた黒髪を後ろに撫でつけ始めた。
「おかしいと思うんだよね。規則だか人道だか何だか知らないけど、とにかく今の研究所のやり方は非効率的なんだよ。僕の提唱するやり方や方針に則ってやった方が、絶対に成果は多く上がる。だから、僕は僕という存在を一旦消すことにしたんだ。僕の優秀さを理由に、僕に自由を与えず、研究所に縛り付けていた彼らの命と共に」
「『一旦』？　いつか再び表舞台に戻ってくるつもりだったんですか？　一旦『死んだ』人間に、そんなことが……」
「可能さ、方法や言い訳はいくらでもあるからね。それにしても……」
と、髪を撫でつけ終えた白川先生が、再び視線を私達に戻した。

意外だった。髪型をオールバックにしただけなのに、随分とその印象が変わった。
今目の前にいる『白川先生』には、先程までの『白樺先生』の柔和な雰囲気はほとんど消え失せ、代わりに、まるで蛇か何かのような冷たく狡猾な雰囲気に包まれている。
「同郷とはいえ、一見で見抜かれるとは思わなかったよ。年には念を入れて、『認識阻害ユニット』で誰も僕の正体に『気付けない』ようにしてたはずなんだけど……」
「西暦３２８３年版の旧型ですね？　超音波と光の微屈折で他者の聴覚と視覚を狂わせて認識をまどわし、相手に自分が誰であるか『気付かせない』隠密用機械……しかし残念ながら、その程度の性能では僕の目は欺けません」
専門用語が多いせいで、２人の会話の内容がよくわからない……。
と、今まで私達２人を見ていた白川先生が、ここで八雲に視線を集中させた。
「ところで、そろそろ君の正体を教えてくれないか？　どうやら君も認識阻害を使ってるみたいで、誰なのか『気付けない』んだけど……見たところまだ学生みたいだし、科学者としてここに来たとは考えづらいな」
八雲の白い学ランに注目したのか、先生はそんな見解を抱いたようだ。
「どこかの大金持ちの御曹司が、親の権力に頼んで、ってところかい？　全く……時空保安庁の管理も随分とザルに……」
「あいにく」
と、唐突に八雲が無理やりそこに割り込んだ。
「あなたのような人非人に名乗る名前はありませんね」
「やれやれ……どこの令息か知らないが、傲慢な物言いだ」
呆れたように首を振って言う白川先生。八雲に結構な暴言を言われてたけど、特に気にした様子はない。このあたりは……『白樺先生』と同じだな。飄々として、つかみどころがない感じ。

ふぅ、とため息をつくと、白川先生は再び私達2人に視線を戻し、
「さて、そろそろどいてくれないか？　そこにいる竹内さんに、早くソレを飲ませたい」
と、私の眼前に転がっているペットボトルを指差して言う。
「ちょ……琴子に何するつもりですか！？」
「ああ、誤解しないでくれ、それは本当にただのスポーツドリンクさ。ま、栄養価が高くなるように少しいじくってあるけどね。そうでもしないと……衰弱してる彼女には応急処置にもならない」
と、その言い方に八雲な耳聡く反応した。
「やはり彼女のこれはあなたの仕業でしたか。この症状は……『仮想強壮症（イジョンバイタル）』ですね？」
また聞いたことない単語が出てきたわね……もしかしてそれも、未来の病気の一種？　っていうか、まさか琴子のそれも白川先生が……
「ご明察。ただのボンボンかと思いきや、知識もあるみたいだね。すごいじゃないか」
と、からかうような拍手を交えて先生が言う。が、八雲の反応は淡泊だった。
「何も嬉しくありませんね。倫理や道徳の大切さもわからない狂科学者に褒められても」
「口は相変わらず悪いな。しかし……君もそういう甘い考えを？」
「甘いともぬるいとも、何とでも言っていただいて結構。しかし僕は、科学者にこそ『倫理』や『道徳』は求められるべきだと思っています」
そう言いきる八雲は、まっすぐな目をしていた。
「科学者・研究者は、生体実験や生体解剖など、実験1つで大小の命を左右する場面によく出くわす職業です。しかし、それゆえに『命』というものの本来の唯一性について認識がおろそかになることが多々ある……。だからこそ、科学者は、自分自身も1つの『命』であり、自分は決してその『上に立っている存在』などでは決して

ないということを、いつも心にとどめておかなければならない……そう思います」
「なるほどね……高説ではあるかもしれないけど、残念ながら理解できないな。まあでも……その心構えは陳腐ながら見事だね。ますます君の正体に興味が湧いてきたよ」
と、薄笑いを浮かべる白川先生。今の八雲のセリフ、結構いいこと言ってた気がしたんだけど……微塵も心を動かされた様子はない。
「さて……その調査も兼ねて、君達には僕の研究所（ラボ）に来てもらおうかな？　大丈夫、殺すわけじゃない、ただ……記憶を消させてもらうだけだ。まあ望むなら、験体に使ってあげてもいいけどね」
「ご冗談を。生きた人間を、病原菌の感染実験体に使うような、狂った実験に付き合う気はありませんよ」
今、八雲が言ったことで、ようやく私の中で全てがつながった。
つまり……自分が開発もしくは改良した病原菌の人体実験ってていうのが、先生の目的なんだ。元の時代でやるとバレかねないから、わざわざこんな遠くの時代まで来た。
そして……青葉や琴子は、先生の人体実験用のモルモットにされた……。
心の中にあった戸惑いが、徐々に苛立ちに、怒りに変わっていくのを私は感じた。何で……何でこんなことを……！？　何で青葉を……！？
「やれやれ……まるで僕が悪者みたいな言い方だね？」
「悪者以外の何だってのよ！」
と、知らないうちに堪忍袋の緒とか、いろんなものが切れていたらしい。目の前にいる狂科学者に対し、私は自分でも意外なほどの大声を出していた。驚きでキョトンとする八雲と白川先生。しかし、私は構わず続けた。
「何の罪もない人を……何も知らないうちに、そんな物騒なバイ菌の実験台にして！　琴子に、青葉……私の弟まで、よくも……」
と、その時、

「？　『青葉』……？　たしか、君の弟がそんな名前だったね……彼がどうかしたの？」

初めて、白川先生が明らかに戸惑った様子の表情を見せた。

「とぼけないで！　あんたが青葉に赤鬼病を感染させたんでしょ！」

「……？　僕が弟くんに？　何を言ってるんだ？　そもそも僕は君に……！　ああなるほど、そういうことか！」

と、今まで戸惑いを見せていた白川先生は、唐突に何か納得したようなことを言って手をたたいた。

「そうか、どうりで……ようやく謎が解けたよ、常盤さん」

「謎……？　どういう意味よ？」

「簡単なことさ。君……この間僕があげたジュース、飲まなかったね？」

「は？」

ジュースって……手伝いのお礼に、ってもらったやつ？　いや、半分だけど飲んだことは飲んだわよ……てか、何でそんなことを今？

「全く、嘘つきはよくないな。あれ、君じゃなく弟くんが飲んだのか、どうりで……」

と、八雲が何かに感づいた。

「……まさか、それに？」

「うん、混入させてたんだよ、赤鬼病の病原菌をね」

「！？」

ちょ、ちょっと待って！　それじゃあまさか……先生は本当は……

「そういうこと。僕は本当は、常盤さん、君を赤鬼病の験体にするつもりだったんだ。が、君じゃなく弟くんが病原菌入りのジュースを飲んだせいで、弟くんが発症した……」

つ、つまり……青葉は、本当は無関係でいられるはずだったのに、私が持ち帰ったジュースのせいで、あんな風になっちゃったってこと……？

「おかしいとは思ったんだ。病毒を弱めていたとはいえ、僕の計算では、摂取から1、2時間程で顕著な症状が現れるはずなのに、いつまでたっても君が発症する様子がないからね。しかし……なるほど、つまり弟くんの方に……」
と、白川先生はそこで虚空をにらみ、再び何やら不気味な笑みを浮かべた。
「よし、予定変更だ。今からその弟くんの所に行ってくるとしよう。どんな風に病原菌の効果が現れたのか、この目で見てデータを取りたい」
「なっ！？」
ちょっ……今何て言った！？青葉に何する気！？
「常盤さんの住所から考えると……弟さんは青林総合病院かな、さて……」
「ちょ……ちょっと待……」
「待たないよ」
とだけ言うと、

ギュオン

最早聞き慣れたテレポート時の擬音を残し、白川先生は一瞬にして姿をくらました。
誰もいなくなった眼前の空間を見て、私はへたりと座り込んだ。
そ、そんな……どうしよう……。このままじゃ……ここままじゃ青葉がどうなるか……！
消える前に言ってたセリフからして、白川先生は青葉のところ……青林総合病院に行ったはず。ここから走って、私の足で……いや待った！　ここは八雲にテレポートで送ってもらえば……あっでも、力尽きて動けない、意識もない琴子をここに放っておくわけには……ああもうどうしたら……。
と、

ふと、さっきから同じ姿勢のままピクリとも動かない八雲が、何かブツブツ言ってるのが聞こえた。

「……これ以上……好き勝手できると思うなよ……！」

感染・ワープ・飛び膝蹴り

ギュオン

擬音とともに、今しがた行院へワープしたはずの白川先生が、再び河川敷に姿を現す。そしてその目に、濡れタオルで琴子を介抱している私が映った。

「……今のは……？」

と、何やらつぶやいた後、その冷たい目で私を見据え……気付いたように言った。

「……常盤さん、白学ランの彼はどこに行ったのかな？　彼に聞きたいことが……」

「呼びました？」

「っ！？」

と、

私に気を取られていた白川先生が、背後からかかってきた八雲の声に気づいて振り返る前に、ワープしてくる時点で既に背後に回っていた八雲が先生を羽交い絞めにする。そして、

どぽっ！

「ごぽ……っ……！？」

「それ（ばしぃん！）」

「がっ……（ごくん）……っ！？」

その手に持っていた缶コーヒーを、驚きで思わず開いてしまっていた白川先生の口に流し込み、吐き出す前に強烈な張り手を背中に入れて、そのショックで口に含んでいたコーヒーを強引に飲み込ませた。

「げほげほっ……君は……一体何を……っ！？」

「さあ。それよりも……お早いお帰りで、白川博士」
からかうように言って、八雲は余裕たっぷりに歩いて私と琴子のところへ戻ってくる。
「お早い……ねえ、しらじらしい。青葉君のいる集中治療室にシールドを張って、テレポートで侵入できないようにしたのは君だろう？」
「ええ。こういうケースを想定して」
「聡い子だ……。現代の技術とはいえ、集中治療室は厳重にロックされているから、あれ以外に気づかれずに入る方法はない。それを利用したというわけか……」
感心したような、しかし微妙にいらだちをのぞかせて言う白川先生。自分の研究の邪魔をされたことが気に入らないようだ。そういえば……そういう理由で死を偽装したって言ってたっけ。
それとも、今の無理やりコーヒーを飲ませるなんていういたずらに軽くいらだってるのか……両方だろうな。
と、
「とにかく、研究の邪魔だから、君にはあの面倒なシールドを早々に撤去して……っ！」
ここで、白川先生はようやく気付いたらしい。
八雲がさっきから、わざと先生に見えるように持っている缶コーヒーの缶。それが……夕方、先生が私に手渡したものであるということに。
そのことに気付いた途端、初めて先生の顔から笑みが消えた。
「それは……まさか……！」
「ええ、あなたが若葉さんに贈呈した缶コーヒーです。病原菌入りの……ね」
基本いい奴の八雲には珍しい、そしてあまり似合っていないバカにするような口調に、白川先生は普段絶対見せない『歯ぎしり』で答えた。よほどキてるらしい。その反応に八雲は満足げに微笑み、缶の中に残ったコーヒーをそのまま地面に流して捨てた。

先生の怒りと驚愕も当然だろう。この缶コーヒーには、先生自身が混入させた『赤鬼病』の病原菌がたっぷりと入っていたからだ。私に飲ませ、今度こそ感染させる目的で。

しかし、それを看破した八雲により、そのコーヒーは逆に白川先生の腹に収まった。病原菌とともに。

「あなたたち……！」

「すいませんね先生、ブラック苦手なんでしたっけ？」

いっぱいの皮肉をこめて、私もひとこと言わせてもらった。

最早その顔に笑みが見られない白川先生は、吐き気でもするかのように口に手を当てた。まあ……そんな感じがしても当然だろう。たった今、その胃袋の中に自作の病原菌が数億匹流れ込んだんだから。

「本来血液感染で、外気に触れるとたちまち弱体化する『赤鬼病』の病原菌……それを経口感染できるほどに改良・強化したそれだ。一口でも飲めば感染するように、菌密度も相当なものになっていたでしょうし……白川博士、あなたの感染は確定ですね？」

「何のつもりだい……？　こんなことをしても、無駄だというのに……」

「ええ、無駄でしょう。あなたのことだ、万一の事態に備えて、解毒剤を持っているでしょうからね……？」

瞬間、先生の目が見開かれる。

「……それが目的か！？」

「ご明察」

淡白な八雲の返答。

「青葉君は僕が持っていたワクチンで治療しましたが、青葉君を蝕んでいた赤鬼病は本来のそれとは違う……あなたが改良した新型病原菌によるものです。ゆえに、正規のワクチンでは症状の緩和はできても、完治および病原菌の殲滅はできない……そのためには白川博士、あなたが用意していると思われるオリジナルの『解毒剤』が必要です」

言うと同時に、八雲は空き缶を投げ捨てた。……軽く迷惑行為なんだけど……今の事態が事態だからひとまずスルーで。後で覚えてたら拾ってちゃんと捨てます。
「さ、案内していただきましょうか？　解毒剤のありか……あなたの研究所（ラボ）に」
「ふん……お断りだね」
と、白川先生は口の周りについたままのコーヒーを袖で拭うと、次の瞬間、テレポートでその場から掻き消えた。
「あっ、ちょ……逃げた！」
「心配いりません、追えます」
と、八雲は腕につけているユニットをいじくり始めた。ホログラムのウィンドウが次々に出ては消え、出ては消えを繰り返す。
「空間転移による空間歪曲反応、認識……解析……目的地座標判明、ルート確定、到着地点の安全確認、転送路構築完了、よし。僕らも行きますよ、若葉さん」
「え！？　いや、ちょ……」
行く？　白川先生をテレポートで追うってこと！？　追えんの！？
いやでも、そうしたいけど、この状態の琴子このままにしとけないし……
「心配いりません、手当ならしてもらえますから」
と、それだけ言うと、八雲は私の手をとった。
「は！？　ちょ、『してくれる』って誰が……」
「行きます！」
「おーい！？」

ギュオン

私の声は届かず、いつもの浮遊感が体を包み……一瞬の視界の暗

転の後、目の前に……再び白川先生が現れた。うお、ホントに追いついた！
あれ、でもここ……研究所っぽくない。ただの……裏路地？
「……やはり、すぐに研究所に飛んではくれませんか」
「ああ。君が追跡してくる可能性があったからね……」「
……いきなり研究所に飛んで、追跡で場所を特定されるのを防いだわけか……さすがはＡＡＡ＋だかの科学者、頭が回るわね。知らんけど。
「でも、僕もそう簡単にはつかまらないよ。学生程度の追跡を振り切るくらい……わけはないからね」
言うが早いか、白川先生は再び消えた。と、
「……そう簡単に振り切られませんよ……！」
と、八雲も言……あれ？　もしかしてまた飛……

ギュオン

と、またテレポートの浮遊感。う……連続はちょっときついかも。
場所は廃ビル。目の前には、白川先生……がまた消えた。
と、いうことは……

ギュオン

ま、また……3連続……ちょっ、きつい……
そして、再び私（と八雲）はどこかに着地……

ギュオン

いや、今度は着地する間もなく飛……

ギュオン

だから！　ちょっとは話を

ギュオン

ちょっと待って！　いつまで何回続くのこれ！？　いい加減に浮遊感で酔……

ギュオン

や……

ギュオン

ギュオン

ギュオン、ギュオン

ギュオン、ギュオン、ギュオン

ギュオン、ギュオン、ギュオン、ギュオン、ギュオン、ギュオン、ギュオン

ギュオンギュオンギュオンギュオンギュオンギュオンギュオンギ
ュオンギュオンギュオンギュオンギュオンギュオンギュオンギュオ
ンギュオンギュオンギュオンギュオギュオギュオギュオギュ
オギュオギュオギュオギュオギュオギュオギュオギュオギュオギュ
オギュオギュオギュギュギュギュギュギュギュギュギュギュギ
ュギュギュギュギュギュギュギュギュギュギュギュギュ―――――
――――！！

し……死ぬ……もしくは吐く……

完全に断続的なものと化している浮遊感の中で、私は車酔いに似た感覚を覚えていた。これが、０．１秒にも満たないスパンでの超連続テレポートによるものであるということは考えるまでもない。というか考えたくない、今は何も。

目を開けているとすさまじい速さで景色が入れ替わってチカチカするので、さっきから目は閉じたままだ。

ど、どんな規模の追いかけっこよこれ……白川先生も、八雲も……
……これで平気なのかしら？　私はもう、意識飛ぶギリギリだってのに……

と、

――――――ギュギュギュギュギュギュオン！

「え……わぁっ！？」

と、いきなり連続テレポートが止まり、久しぶりに私は地面に着地……しきれずに崩れ落ち、尻もちをついた。あ、足に力が入らない……。

いたた……ここどこ……あれ？　元の河川敷？

見ると、着地点は今までいた河川敷……そして、私と八雲の目の前には、やや不機嫌そうな顔の白川先生が立っていた。あ、ホントに追いついたんだ。

「……本当に、予想外にしつこいね……。まさか、４０００回以上のテレポートを、それも随所に短距離の時間跳躍を織り込んだそれを完全に追跡されるとは……」

そ、そんなに飛んでたんだ……ていうか、『短距離の時間跳躍』て……微妙に時間まで超えてたの？　私たち。今ので。

痛む頭とかすむ目に鞭打って腕時計（電波時計）を見てみると……あ、ホントだ。さっきより……２０分ちょっと過去に来てる。わー、なんか不思議。

「一体……君は何者？　学生だてらに時間跳躍をしていて、病原菌に関する豊富な知識を持ち、さらにはこんなに正確な追跡転移（ストーキングテレポート）を行えるなんて……」

「このくらい普通にできますよ」

と、八雲はやや無愛想な口調で答えた。

「時間跳躍の概念、空間歪曲のための模擬空間壁とその鍵の掌握、仮想エネルギーのコントロール……それらを完璧に行えれば、このくらいの追跡は余裕です」

「……ますますおかしいな。そんな『時間と空間を完全に理解・掌握する』なんて芸当、雲をつかむような話じゃないか。仮に君がＡＡランクの科学者でもそんな真似は……」

「できますよ、その程度。第一……」
と、やや余裕を失っている白川先生の言葉を遮った八雲は、そこで一拍置いて、

「その『時間跳躍システム』を作ったの……誰だと思ってるんですか？」

「……！！？」
そのセリフに……白川先生は完全に言葉を失った。
その、私も気になったわよ、今のセリフ……それじゃまるで八雲、あんたが……
と、
「君は……まさか……」
後ずさりしながら、かすれた声で白川先生が絞り出すように言う。
「まさか君……八雲琥珀か！？　若干１７歳にして、あらゆる分野に類稀な才能と専門書以上の膨大な知識を持ち、１３歳で『時間跳躍』『空間転移』の２大超発明を成し遂げた……史上ただ１人のＳ（ダブルエス）ランクの称号を持つ天才少年総合科学者！　何でこんな所に！？」
やけに説明的な口調で話し、驚愕に表情をゆがませている白川先生は、まるで動物園にパンダを見に来た子供のような、好奇心と畏怖に満ちた目で八雲を見ていた。いや……実際そういうものを見てる気分なのかも。
ていうか……なんか色々とすごい単語出てこなかった？
なんか八雲、あんたって滅茶苦茶すごいみたいなこと言われてたんだけど！？　天才とか……総合なんちゃらとか……ていうか、タイムワープとテレポート、あんたが作ったの！？　てか何、『ＳＳランク』って！？　現代区分で……ＡＡＡの２個上じゃない！？
ど、どうしよう……サインとか貰っといた方がいいのかな……っ

て待て待て、この時代のじゃない有名人のサインもらってどうする。落ちつけ私。
だいぶ混乱気味の頭をやっとで鎮め、と同時にようやくテレポート酔いが晴れてきたので立ち上がって前を見ると、白川先生も困惑から立ち直ったところだった。
「道理で規格外の、しかも僕が見たこともない装備をいくつも持っているわけだ……。フォトンソードを防ぐ学ランといい、これほどまでに追尾性能の高い時空転移ユニットといい、あれだけ有名な君に全く気付けなくなる認識阻害装置といい、それらは全て……」
「ええ……既製品でも特注品（オーダーメイド）でもない……僕の自作品（オリジナル）です。何から何まで」
「なるほど……相手がSSランクの天才科学者とあっては……僕の勝ち目も薄いな……」
たらり、と、先生の額に冷や汗が浮かぶ。どうやら……科学者として別格の八雲を前に、完全にビビってるらしい。
「ちなみにそちら風下ですから、何か細菌を散布して僕を殺そうとしても無駄ですよ？　装備的にも、状況的にも、あなたに勝ち目はない……大人しく降さ……」
「降参……という選択肢は取りたくないんだ、科学者として」
白川先生は意外にもまだ抵抗姿勢を見せた。
「それはつまり、今までの研究成果をすべて放棄することになりかねないからね……だから僕は君に、『手を組む』という選択肢を提案したい」
「「は？」」
私と八雲の声がそろった。ちょ……何、いまさら？　何そのB級悪役的な要求？
白川先生はこの反応も予測できていたようで、別段何も驚かずに続ける。
「別にカッコ悪いことだとは思ってないよ？　いや、仮にそうでも……研究成果を守るためなら、その恥も甘んじて受けよう。八雲く

ん、常盤さん、君達と和解したい。今ならまだ……３２８５年の警察当局はこのことを知らないからね」
「……おっしゃっている意味がわかりません」
「なら説明しよう。常盤さん、青葉君に『赤鬼病』を感染させてしまったこと……この場で正式に謝罪しよう。同時に、医療費・入院費および全ての損害を補償し、完治させるための解毒剤も提供する。その代わり……現段階での彼の血液サンプルを、研究用にアンプル１本分だけでいい、提供してほしい」
ちょ……何を言って……！？
「さらに、今現在僕の病原菌によって病を患っている、竹内琴子をはじめとした９人の君のクラスメート達も、他のクラス・学年の生徒たちも、サンプルを採取したのちに全員、後遺症も一切なく完治させる。補償も何らかの形で行おう」
なっ……今なんて言った！？　琴子だけじゃなく……欠席してるクラスの他のみんなの病気も、全員あんたの仕業だったの！？　しかも、他の学年まで……
もしかして……すみれが言ってた青林西の『怪奇現象』……全部コイツの病原菌が絡んでるんじゃ……！？
「ふざけないで！　そんな、人を……自分の生徒を実験道具みたいに扱っておいて、今更許してほしいって何よ！？　第一、この期に及んでサンプルとか……」
「誤解しないでくれ、僕は『和解』したいと言ったんだ。何をしてでも命乞いをしたいわけじゃない、僕はあくまで……研究は続けたいんだから。サンプルの要請もそのためだ」
感情のこもっていないその返答を聞いて、私はかえって寒気がした。
だ……だめだ……この人、何言っても多分だめだ……。
きっとこの人にとって、研究こそが自分の一番の、崇高な目的と言えるものなんだろう。だから……そのためなら何だってするし、追い込まれて逃れようとするときも、必ず『研究』を前提条件の一

つに置かずにはいられない。それが、この人の『当然』……。
「君たちの不都合を全て解消した後で、僕は研究を続行したい。こちらの補償を受けて、サンプルを提供し、その後全てを忘れてくれれば……僕はもう君達にも、君たちの周囲にも一切迷惑はかけないと約束する。まあ、できることなら……」
と、今度は先生は八雲を見て、
「八雲君、君との共同研究でさらなる高みを目指したいところなんだけど」
「寝言は寝て言うものですよ、白川博士」
八雲はそうバッサリと切り捨てる。
それを聞いて少し安心した。同じ科学者でも……八雲はちゃんと、人の心を持ってるんだ……。
しかし……当の白川先生はそのことにまだ気づかないらしい。この研究パラノイア、ちょっとだけ困ったような顔になると、性懲りもなくこんなことを言い出す始末。
「そうか……確かに、今の条件だと、君にメリットが無いからね」
だからあんた、いい加減に……ん？
何かしら？　今、かすかに先生の後ろに何か白い影が見えたような気が……。
「じゃあこうしよう。八雲君、君にはこれを進呈する」
とだけ言うと、白川先生は懐から、小さなカプセル？を取り出した。あれ……病院で八雲が見せた、青葉のワクチンに形が似てる……もしかしてあれ、アンプル？　しかも、なんかパッケージに『赤鬼』のイラストが……まさか！
「これは、僕が品種改良で新開発した『新型赤鬼病』の病原菌だ。これを君に」
「……それが、僕に何のメリットを？」
「強がらなくていいよ。君も科学者である以上……他の科学者の作品とはいえ、新しいものに興味を持つはずだ。研究対象としては、こいつはかなり有意義だろう？」

「……」
八雲は何も言わない。でも……私はいい加減に我慢の限界だった。この男に何か言ってやろうと身を乗り出した、その時……
……再び、その背後に何か白い影が見え、私は思わず動きかけていた口を止めた。
すると、今度はその影は消えず、前に出てきて、
「無論、これだけじゃないよ。研究所（ラボ）にある他のものもサンプルとして提供する。まあ今はこれしかないから、ひとまずはこれで保証に……」
「そうか、じゃ、それは私が没収する（ひょい）」
「うん、没収……は？」
と、

バキャァッ！！

「ぐあ！？」
「い〝っ！？」
「おー……」
その白い影は、ひょい、と先生が手に持っていたアンプルを奪うと、次の瞬間ものすごい勢いで閃いて……その顔面に見覚えのある飛び膝蹴りをたたき込んだ。
そのあまりの威力に、吹き飛んだ白川先生の体はバック宙の要領で1回転し、背中から豪快に地面にたたきつけられた。ちょ……な……何今の！？　何が起こったの！？
蛙のようにノビた白川先生から、その白い影の方に視線を移すと……その白さ以外のものが認識できた。
正確には……白さの正体は白衣だった。そして、今の蹴りで発生した風に、その鮮やかな金髪を優雅になびかせながら、その『何者か』はきれいに着地した。
これが『何か』、いや『誰か』……もう、考えなくてもわかる。

考えない方がわかる。
わかるけど……何でここにいるのか、今の行動の意味は何なのか、全くわからない。
いや、だって……

「ったく……何だってこんな面倒なことになってんだよ？　さっさと帰って借りたサマーウ〇ーズのＤＶＤ見ようと思ってたのに……説明しろバカ共！」

は……

「葉桜……先生……！？」

河川敷に姿を現した３人目の白装束……常時白衣の養護教諭・葉桜翠は、面倒くさそうに私たち２人と白川先生を一瞥すると、はあ、とため息をついた。

決着

感染(うつ)して、飛んで、バラして、ビックリして、蹴った。
あらすじを作るとしたらこんな感じだろうか。いや、『はぁ？わけわかんないし』って思ってるそこのあなた、私もわかってないのよ。

とにかく……何でここにこの人がいるのか……て聞きたいんだけど、いいのかしら？

「だぁーもう！　せっかく明日から連休だっつーのに……何だってこのタイミングでこんな超ド級の面倒事が起きるんだよ！　琥珀！
３０字以内で簡潔に説明しろ！」
「３０ページ以内でレポート提出じゃだめですかね、翡翠(ひすい)姉さん？」
「テメそれまで私にＤＶＤ我慢させる気かコラ。それから、今は先生と呼べ！」
「あなただって僕のこと呼び捨てじゃないですか」
「私はいいんだよ。先生だから」

たった今、白川先生に見事というほかない飛び膝蹴りを決めた葉桜先生。その先生と、何の違和感もなく未来人の八雲がくっちゃべっていた。あの……何これ……？
ていうか……またなんか八雲、葉桜先生のこと、名字でも名前でもない呼び方してなかった……？
「「……？」」
とまあ、その場にいる残りの２人……私と白川先生（よく意識あったな……）がぽかんとしてることにようやく気付いた葉桜先生。
「あー、悪い悪い、放っぽって勝手に話っ進めちまった」
「は……葉桜……先生……？」

「こ……これはこれは葉桜先生！　奇遇ですね、こんな時間にこんな所で……」
と、あくまでこの時代の学校教師である葉桜先生に遭遇したために、白川先生は『白樺先生』に戻って話していた。自分の正体を、ここで起こっていたことを気取られないためなんだろうけど……。
あの……白川先生？　その……それ、もう何か違う……っていうか、その……葉桜先生、なんかそういう感じじゃない……ように見えますけど……。
ていうか、問答無用で飛び膝食らった時点でもう……
「葉桜先生、ほら、よく見てくださいよ、白樺ですって。決して常盤さんを襲ってる不審者とかじゃ……」
「黙ってろボケ。よくもまあこんなとこまで来て『赤鬼病』の病原菌の実験なんぞやりやがったなコラ。私の仕事が増えるじゃねーか」
「は……？」
と、白川先生を唖然とさせた葉桜先生の言葉の中には……気のせいではない、この時代の人間である限り、まず口にすることのないであろう単語が混ざっていた。
ちょ……葉桜先生って……まさか……？
すると葉桜先生は、私と白川先生の顔を交互に見て、
「あー……何が何だかわかってねえって顔だな。えーと……どこしまったっけ……」
と、何やら白衣の中をまさぐり始め……たが、一向に『探し物』が見つかる気配がない。
「あっれー……？　……おい琥珀、私アレどこやったっけ？」
「右胸の3番目の内ポケットは？　先生よくあそこにしまってませんでした？」
「おう、右、右……お、あったあった」
これはアレか？　その家に住んでるズボラな本人よりも、よくその家に来る、しっかりした他人の方がその家のどこに何があるのか知ってる……ってやつか？　印鑑とか耳かきとか。いやでも、机の

引き出しとかならともかく、何で着てる服の収納スペースまで他人の八雲が知ってるの？　しかも『アレ』でわかるんだ……。
「コレだコレ。ほれ見ろ」
と、葉桜先生は何かのカードのようなものを取り出して、私と白川先生に見せた。えーと、なんて書いてんのこれ？　暗くてよく見えない……時……時空……保安庁？
……ん！？
「なっ……じ……時空保安庁！？」
と、白川先生の顔が驚愕に歪んだ。どうやら白川先生には、相当ヤバい事態らしい。
その驚いた顔を見て満足げにニヤリと笑う葉桜先生は、それを再び白衣にしまって、
「そういうことだ。何を隠そう私は……あー、自己紹介めんどいな、琥珀、よろしく」
おい。
「えっとですね……」
と、律儀にも代わりに紹介を始める八雲。まるで姉貴分と弟分ね……。
「この人は、『葉桜翠（はざくらみどり）』もとい、本名『桜井翡翠（さくらいひすい）』といいましてですね、まあ、当然のごとく未来人です。僕の幼馴染のお姉さんであり、僕が在籍するＩＧＳＳ東京校高等部の非常勤講師でもあり、時空保安庁の職員もされている方です」
や、やっぱり未来人……。しかも、なんか色々と設定あるのね……えっと、幼馴染で、学校教諭で、警察の方？　んでもって、本名が『桜井翡翠』だから……桜井先生か。
……公務員２つ兼業してるみたいなんだけど……大丈夫なの？
「ちなみにあだ名は『白衣の核弾頭』『金剛石の膝』『ジェノサイドミサイル』等々……」
色々わかりやすい……。
でも……なんでそんな人がこの時代に？

「公開されていないが、時間跳躍を使って過去に誰かを送りこむ時は、その監視及びその人間を原因としたトラブルの処理のために、本人に内密に時空保安庁の職員が先行しておくんだ。あとはまあ、不正行為を取り締まったりとかもする」

つまり……八雲が何かしでかしたりしないように影から見張ったり、八雲がスムーズに動けるように事前に諸問題を片付けたり、その段階で発生したトラブルを処理したり、そういう縁の下の力持ち的な役割のために来た……ってことか。

「もっとも……その役目ゆえに、時間跳躍する本人には監視してることを気付かれちゃいけないんだが……琥珀、お前気づいてただろ？」

「はい」

八雲、しれっと即答。ダメじゃん。

「ったく……何で気づくんだよバカ。せっかく最新型の認識阻害装置使ってたってのに……やっぱ開発者（おまえ）には効かなかったってか？」

「そんなことありませんよ、『ちゃんと』見た目では気付けませんでした。けど……あの飛び膝蹴り見たら、そりゃ嫌でも気付きますって。小さい頃何百発も食らいましたもん」

「あー、ヤンキー連中ぶちのめしたあの時か……。迂闊だったな……」

何か2人の世界に入ってて、私たちが置いてけぼり……。

けど、今の説明で、今までわからなかった葉桜先生……じゃなかった、桜井先生の謎が解けた気がする。

なぜたびたび学校から姿を消すのか……それは、八雲・未来関係の仕事のためだった。

誰もその過去を知らない……当然だ、先生の地元は未来なんだから。

なぜ八雲を見ても私の『彼氏』扱いしなかったのか……違うってことを知ってるからだ。

ズボラなのに、白衣はいつもピカピカ……多分その白衣、八雲が

来てる白学ランと同じ、自動的に汚れ落として、シワもできない素材のやつだからだ。
ここんとこよく出くわす……そりゃそうだ、八雲を監視してたんだから。
しかしまさか……八雲の幼馴染のお姉さんだったとは……。
「でも過保護だなあ、翡翠姉さんも。別に僕、監視なんてなくても平気なのに」
「どの口がそんなことほざきやがる。電気屋で家電製品何千万単位で買ったり、ヤンキー相手に暴徒鎮圧用の帯電光子銃（ポジトロンガン）ぶっ放したり、問題行動だらけだバカ！　あの辺の後処理全部あたしがしてたんだぞ！？　おまけに、あたしが監視してるの知ってて、竹内の介抱押しつけやがって……」
あ、琴子の介抱……先生がしてくれたんだ。さすが養護教諭……なのかな？　そっか……あの時の『してくれますから』って、こういう意味か……いや、八雲、セコい。
てか、桜井先生……一人称が『私』から『あたし』になってますけど……こっち地？
「それにまあ、こうして時空保安庁の職員たるあたしがここにいるおかげで、このバカもきっちりとっ捕まえられるってもんなんだしな」
そう言って、懐に手を入れ……じろりと白川先生の方を見る。睨まれた先生は、びくっと体を震わせ、一歩後ずさりした。
そうか……白川先生は犯罪者。さっきまでは、警察の人が気付かないうちに私たちの間で自分が起こした事件を揉み消そうとしてたんだけど……たった今登場した桜井先生は、それを取り締まる警察側の人間。これでもう、事件を隠すことは不可能になったんだ。
しかも……八雲を監視していた桜井先生は、さっき白川先生が自分でバラした未来の研究所での一件も聞いているはず。泣きっ面に蜂……ってとこかな。
……ところで、いまだに先生が白衣から手を出さないんだけど…

…？
「……琥珀」
「左下、２番目には？」
と、言われたところをまさぐって、桜井先生は……手錠を取り出した。おお、本格的。
「あー、これこれ。うん、よかった」
冷たく光る銀色の手錠だ。……アレ多分、見た感じ、鉄じゃないな。何かの超硬合金か……もしくはマンガとかでよくある、相手の能力とかを封じ込める特殊手錠かな？　この場合は、テレポートやタイムワープを封じるとか？
ちゃらちゃらと手錠の鎖を鳴らしつつ、桜井先生は白川先生に向き直る。
「さて、白樺光もとい、白川光晶。いろんな罪でお前を逮捕する。大人しく腹を切れ」
「翡翠姉さん、言ってること滅茶苦茶です」
逮捕すんのに切腹させてどうする。てか、罪状がアバウト。
そんなツッコミを全く意に介さず、先生はじわりじわりと白川先生に近寄って行く。
「……っ！」
「テレポートで逃げるなら逃げろ？　私の時空転移ユニットは、琥珀からパク……もとい、貰った特級品だ。どこに逃げよーが追跡するぜ？」
……そういうのが基本の人なんだろうか？
ふと見ると、八雲はその横で『まあ、別にいですけど、慣れてますし』とか言ってた。
まあ、入手経路に若干問題を感じるけど……その性能はさっき身をもって体感済みだ。八雲のユニットのテレポートからは、白川先生では逃げきれない。
白川先生もそれを悟ったのだろう。目立った抵抗はせず、大人しく捕まる……

……と思いきや、
「……それ以上こっちに来るな」
「？　何だそれ？」
白川先生、突如白衣の中に手を入れたかと思うと……先ほどとは別のカプセルを取り出し、水戸黄門の印籠のように目の前に掲げてみせた。……何、あれ？
「……まさか、また別のバイ菌か？」
「ええ、まあ。でも……さっきの『赤鬼病』なんかとはケタが違いますよ？」
と、白川先生は、指2本でつまんでいたカプセルを、手でしっかり握りしめた。
「まだ名前もない僕のオリジナルの病原菌ですが、こいつは凶悪ですよ？　１００％の致死率に加え、非常に質量が軽く、非常に長命ゆえ、ひとたび散布されれば風に乗って広範囲に拡散……これ1本で周囲半径８ｋｍ圏内のあらゆる生命体を死滅させられる代物です」
「「「！！」」」
なっ……こんにゃろ、土壇場で飛んでもない隠し玉を……！
私は体がこわばるのを感じた。せっかく桜井先生が来てくれて、勝負は決まったと思ったのに……そんなことをされたら、私も、八雲も、桜井先生も、白川先生自身も死ぬ。そして……ここから８ｋｍ圏内にいる人たちも……。
その人たち全員を人質にして、交渉する……ってわけか、こいつ……！
「お礼はします。葉桜先生……いや桜井先生、この時代における僕の『実験』についての情報、証拠その他を残した記録媒体（メモリー）をお持ちですね？　この場で破壊してください。そしてこのことも、僕のことも全て忘れ、上層部への報告は控えていただきたい」
「断ればそいつをばらまく……か？」
「ええ……あまりこういうやり方は好きではないのですが……研究のためなら」

手段は選ばない……か……。
手に持ったカプセルを見せびらかしながら、余裕たっぷりにとはいかないまでも、十分な勝算を持った様子でいる白川先生は、そのまま桜井先生の返事を待った。
ど、どうすれば……！？　白川先生の性格を考えれば、おそらくこっちが言う通りにすればちゃんとカプセルをしまってくれるかもしれない。けど……ここでそんなことを容認しちゃったら……こいつの悪事の片棒を担ぐようなもんじゃない！　そんなこと……
答えを求めて八雲の方を見ると……八雲は身じろぎひとつせずに場の様子をうかがっていた。パニックに放ってないし、追い詰められてる感じも見られないけど……すぐに何とかできる……ってわけでもなさそう。八雲でもダメか……！
と、
「……か？」
「……はい？」
「……試してみるか？　私の蹴りより早く、お前がそいつを握りつぶせるかどうか……」
「「は！？」」
桜井先生の思いもしないセリフに、私と白川先生の声がそろう。
言うやいなや、桜井先生は姿勢を低くして攻撃体制を……ってちょっと本気！？　……何言ったこの人！？　カプセル潰すより早く蹴っ飛ばすってこと！？　んな無茶な！！
八雲の方を見ると……ちょっとあんた、その顔は『やっぱりこうなったか』って言ってるわね！？　止めなさいよ！　下手したらマジで大変なことに……ん？
何かしら……今空の方に何か光るものが見えたような……流れ星？
そんなことには気づかない白川先生（残り2人も気づいてないっぽい……）は、わりと本気で飛ぶ気らしい桜井先生に戦慄しているところだ。

と、次の瞬間、

ヒュルルルル……ゴン！

「いだっ！？」

「へ？」

「あ？」

「おろ？」

その謎の飛行物体が……白川先生の後頭部にクリーンヒットで着弾した。その衝撃で、ぐらりと先生の体が傾く。……と、それより一足早く、私の目はその飛行物体の正体を捕らえていた。

あれは……！　わ、私があの時、屋上で蹴っ飛ばした空き缶！？

そ、そういえばここはあの時より過去の地点……ちょうど『今』、私が蹴っ飛ばした空き缶がここまで飛んできたってこと？　学校の屋上から？

……と、それを理解した瞬間、

気付かないうちに……私は足を動かしていた。

予想外の一撃に、私以外の全員があっけにとられて動けないこの状態の中、私はありったけの力で地面を蹴って接敵し、

「……ん？」

「らあああああああっ！！」

バキィ！

「うごぁ！？」

白川先生の顎に渾身のアッパーカットをたたき込んだ。

その拳は、自分でもびっくりするくらいに鋭く決まり、白衣の白川先生の体をふわっと浮かせて地面にたたきつけた。

へぇ……私ってこんなマジの殺気でパンチ出せるんだ……ボクシ

ングの助っ人はしたことないんだけど。青葉や琴子、それにクラスのみんなの分の『ふざけんな！！』がこもった会心の一撃かしら。人間ってすごいわね。

と、私は気付いた。殴られた衝撃で、例のカプセルが白川先生の手を離れ、宙を舞っていることに。

慌てて私はスライディングの要領で跳び……よし、キャッチ成功！

「とったぁあ――――っ！！」

と、いまだに唖然としている八雲と桜井先生に見えるように、病原菌入りのカプセルを見えるように掲げて持……あれ？　なんか……いきなり暗くなったような……？

と、影が差した方向を見ると……げっ！

そこには、今の一撃で口の中を切ったのか、口から血を一筋流している白川先生が、直立ではないけれども、私を見下ろして猫背で立っていた。き……気絶してなかった！？

そして、もはや微笑みとはかけ離れた冷たい表情になっている白川先生は、ふいにその懐に手を入れると、

「本当に君は……僕の邪魔をっ！」

さっきも見せた光の短剣……フォトンソードを出し、私めがけて振りおろした。

カプセルをキャッチする時、無理な姿勢で着地したせいだろうか。私の体はさっきの超反射とは対照的に、今度は私は全くその場を動けなかった。

と、その瞬間、

私と白川先生の間に、すさまじい速さで桜井先生が飛び込んできた。

そしてすぐに白川先生に対峙する姿勢をとる。と、その右手の指につけている特徴的なスカルの指輪が光を放ったかと思うと、次の時間、その右手の手刀が一閃し、白川先生のフォトンソードを、鉄をも切り裂くエネルギー体の刀身を真っ二つに叩き割った。

え……？　あの……その指輪も武器なの？　手、オーラみたいな

のまとってますけど。
今ので完全に度肝を抜かれたらしい白川先生は、桜井先生の返す刀の手刀で威嚇され、大きく後ろに飛びすさって距離をとった。
……が、それがまずかった。
その行為により……彼女が『必殺技』を使うだけの助走距離を与えてしまったのである。
気付いた時にはもう遅く、桜井先生は距離をとりつつもいまだ必殺の間合いを出ていない白川先生を照準に定め、飛びかかる寸前の肉食獣のごとく姿勢を低くした。
「ちょ、ちょっと待……」
「「却下」」
と、2つの声がバッサリ。……ん？　2つ？
同時に、私の視界の隅に、今まで静かだった八雲が疾走を始めたのが映った。しかも……白学ランから火花が散っているような……？
もしかして、電気刺激で着用者のパワーを強化するっていうアレか……！？　……ってあれ、桜井先生の白衣も同じ感じで光ってない……？
「こりゃあ……公務執行妨害も追加だなコラ！」
「思いっっっきり……歯、食いしばっていただけます？　しなくても結構ですけど」
次の瞬間、2人は同時に地面を蹴った。
そして……

ドバキャァッ！！

「――――ぁ――！？」

八雲と桜井先生、2人の飛び膝蹴りが白川先生の顎と鳩尾にクリーンヒットし、その体を盛大に吹き飛ばした。
白川先生、どうやら悲鳴を上げる余裕すらなかったと見える。そ

の体は無駄に綺麗に宙を舞い、子供が遊びで川に投げた石の要領で川面を何度も跳ね、ついには向こう岸に到達し、攻撃後の2人が優雅に着地すると同時に土手に激突してようやく止まった。

「……」

特撮顔負けの今の飛距離に唖然とする私の目の前で、

勝った方の白装束2人は、今しがた放った非情の一撃（二撃？）が嘘のように清々しい顔で、夢を語る同級生2人のように川岸にたたずんでおり、

負けた方の白装束1人は、しばらくピクピクとわずかに痙攣した後、やがて『ガクッ』という効果音が似合いそうなリアクションとともに動かなくなった。

えっと……一応……決着……かな？

最終日・無形の『資料』

連休初日。私は今日もまた、純白に囲まれた部屋にいた。
集中治療室でなく、一般病棟なのがうれしい。目の前には……
「姉ちゃーん、リンゴまだー？」
「待ちなさいってば。今ウサギに切ってるから」
「んな細かいことしなくていいって！　腹に入れば一緒なんだから！　早く食いたい！」
全く……あんたは治ったら治ったでこれか。ま、いいけど。
全ての症状が治まり、肌の色もすっかり元通りになった青葉は、発病前と何も変わらない自堕落な顔で私がリンゴをむき終わるのを待っている。
担当医の先生の話だと、検査で異常が無ければ明後日にでも退院できるとのことだ。昨日の突然の体調悪化と、さらにその後の超回復が相当不思議みたいだけど、結局何もわからなかったようで先生は不思議そうにしていた。まあ……裏で私が暗躍してたんだけど。
でも大丈夫、もうすっかり治ったから！

あの後、桜井先生はすぐさま自体の収拾にとりかかった。
白川先生の携帯情報端末とワープユニットを没収し、そこから得たデータをもとに白川先生の研究所の居場所を特定した。
……その前に、なんか心肺蘇生法に似た動きが見えた気がしたんだけど……気のせいよね？　仮死状態になんかなってなかったわよね？
で、研究所にあったあらゆる細菌と薬品を押収し、さらに『新赤鬼病』の解毒剤を見つけて私に渡してくれた。で、私は八雲に手伝ってもらって、その時はまだ集中治療室にいた青葉に解毒剤を注射、完全に解毒した……ってわけ。
さらにその後桜井先生、ラボで押収したデータをもとに、白川先

生が病原菌を感染させた生徒全員リストアップして、1晩で全員解毒したらしい。すごいな……。
もちろん琴子もその1人で、解毒後は桜井先生によって家まで送り届けられた。
そして白川先生は、桜井先生が未来から呼び寄せた仲間によって逮捕され、日付が変わるころにこの時代を去った。あ、一応解毒はしといたらしいよ。

「ほら、できた」
「おー、ありがと！」
「こらこらゆっくり食べな、喉つまらすよ？」
全く……たかがとは言わないけど、リンゴ一個でよくもまあこんな幸せそうな顔できるわね……。ま、むいたこっちも嬉しくなるから、別にいいけど。
「ははっ、まーねー。けどまあ……退院してからの姉ちゃんのメシの方が楽しみかな」
と、コイツは唐突にそんなことを言い出した。
突然のことだったので、私はちょっとびっくりして固まった。あら……何？　嬉しいこと言ってくれるじゃん、そんなこと初めて言われたわよ？
すると、またしても青葉は心を読んだような驚きのタイミングで、
「あーまあ、今までこんなこと言ったことなかったんだけどさ……、入院して姉ちゃんの飯食えなくなって……そんで一時は、飯食えないぐらいに死にかけて……初めてわかったもん、姉ちゃんの飯のありがたみ」
「あ……あら、そぉ？」
「ん……まあ、それでさ……」
そして青葉は、
「今更こんなこと言うのも恥ずいんだけど……俺さ、姉ちゃんの飯

が世界で一番好きだよ、マジで」

褒められるのなんて、この身体能力のおかげでもう慣れっこになってるつもりだったのに……ふいに弟からかけられたその言葉に、思わず私は固まってしまっていた。

い、いちばん身近な奴に、こうやって褒められたりするのって……嬉しい……？

お世辞でも何でもなく、そのままの気持ちを言ったんだとわかるこいつの『～♪』な顔に、思わず顔がにやけてしまう。っとと、いかんいかん、姉の威厳が。

「ふふふ……ありがと！　なら、退院したらあんたの好きなものベスト5（ドライカレー、ビーフシチュー、オムライス、生姜焼き、ちらし寿司）全部作ったげるか！」

「マジで！？　やった……絶対明後日の朝一番で退院してやる！」

「ふふっ……そうしなさい。じゃ、あたし用事あるからもう行くわよ」

「おう、じゃーな！」

と、言う具合に弟に見送られて、私は病室を後にした。

さて……よし、十分間に合うわね、今日の『予定』に……

☆☆☆

「あ、待ってませんよ？」

「いや、何も言わないうちからそう言うのもね……」

「そうなんですか？　うーん……難しいですね……」

いつかに私が言ったダメ出しを忠実に守り、コイツなりに考えた改訂版の返答は、なんともコント的なものだった。

さて……昨日の夜に河原で戦ってた時の八雲とは、雰囲気から何からまるで別人なんだけど……まあ、これがこいつの地だし……気

にしても仕方ないわね。
それよりも……聞きたいことがあったのよ。
「あのさ……八雲？」
「はい？」
「その……あんた、今日もう帰るの？」
「はい？　……ああ……まあ、そうですね、９時には」
別に何の感情もこめるわけでもなく、八雲はさらりと言った。
やっぱりか……あの八雲が『降ってきた』夜から数えて……今日で7日目。八雲は自分で、この時代に居られるのは、大体1週間くらい……って言ってた。つまり……今日がこいつがこの時代に居られるタイムリミットだ。
……こいつには今まで散々な目にあわされてきた。数千万単位の買い物で妙な噂流されたり、商店街に彼氏持ちの噂が流れちゃったり、ポンとラ〇トセイバー渡されて危うく人斬りそうになったり。
でも……それ全部引いても足りないぐらい、世話になった。青葉に琴子、クラスのみんな……みんな、命を救ってもらった。
人間って言うのは現金なもので、いざいなくなる……っていうと寂しく感じるのね。
ちなみに、琴子の病気『仮想強壮症（ヴィジョンバイタル）』は、身体能力・身体駆動が一時的に強化されると同時に、疲労・筋肉痛などをほとんど感じなくなるという、いうなれば体のオーバードライブを誘発するような病だったという。
どうやら琴子の１００m走のタイムの非常識なまでのスコアアップもその病によるものだったらしく、今朝の朝連ではもとのタイムに戻っていたとか。
けど……もともとレギュラーとる実力持ってたんだし……大丈夫よ琴子なら。
それに……どうやって調べたのか桜井先生の話だと、どうやら器の小さそうな先輩がストップウォッチを遅く押してたらしい……。
その先輩も、この前の琴子の『火事場の馬鹿力』（と認識されてる）

に自信喪失し、小細工する気力も失せたとか。
ともかく……そんだけお世話になった八雲に、こんなあっさり帰られても……私の気が済まないのよ。
完全に自己満足だけど、もう少し何か……コイツの役に立つようなことをしてやりたいと思う。
けど、コイツはここまでの買い物に加え、自力で役所や図書館で情報を集め、さらに難関だったアルコール類や車、そしてタバコまでも、桜井先生経由で手に入れた（見返りに桜井先生が高級外車を手に入れたという噂があるが……あえてスルー）。
そうなると、どうしたらこいつの役に立てるか……とまあ考えたのは、
「八雲」
「はい？」
「今日はね……」

☆☆☆

「うわっ！？　何ですかここ！？」
「んー、お花見」
私は八雲を、学校の近くにあるとある公園に連れて行った。
この公園の桜は遅咲きだから、この時期がちょうど見ごろなのよね。
そのせいで、公園のいたるところに花見客目当ての露店が乱立してて、中高生のたまり場と化している。絶好の遊び場ってわけ。ここで何をするかって言うと……
「えっと……ここで何を買うんでしょうか？」
「ん～……何買おっか？」
「は？」
要するに……今日は資料うんぬんじゃなく、直にこの時代の高校生の遊び方を教えてやろうってのよ。『生活』を調べたい、ってん

なら、そうする方がいいレポートかけるでしょ？
という建前のもと、
「ほら！　今日は思いっきり遊ぶわよ！」
「は、はい！？」
今まで散々振り回してくれた分……今日はたっぷり引っぱり回してやるわよ！

星に願いを

「も……もう……お腹いっぱいですって……」
「もう？　まだフランクフルトとお好み焼きとたこ焼きとチョコバナナとクレープしか食べてないじゃない。未来人の胃袋って貧弱ねえ……」
「い、いやその……それはちょっと違う気が……」
とまあ、八雲の無尽蔵の財力を武器に露店を片っ端から攻めたり、

「ちょっ……これ生きてますけど！？」
「当たり前でしょ？　剥製の金魚すくって何が楽しいのよ」
「いや、そういう意味じゃ……」
と、金魚すくいの金魚の活きの良さにビビる八雲を笑いながらキャッチ&リリースで金魚すくいをやったり（花見で……ってのも珍しいわね）、

「若葉さん若葉さん！　こ、これ、食べにくいんですけど！？　てかこれただの砂糖ですよね！？」
「いいのよ砂糖で……って、あーあー顔何よそれ！？　ベッタベタじゃないの！」
と、小学校低学年よろしく口の周り……というより顔中ベッタベタにしながら綿あめと格闘する八雲の顔におしぼりを叩きつけてやったり、

「……何してんですか？　桜井先生……」
「あ？　見りゃわかんだろ？　勤務中だ勤務中、琥珀、お前の監視

の」
「あの、翡翠姉さん……勤務中に堂々と飲酒ってそれ……」
八雲の監視ついでに堂々とカップ酒を飲んでいる桜井先生（隠れて監視する気ゼロ）を発見したりしながら、私たちは花見を満喫した。
そして一通り花見を見終わった私たちは、今度は街に出た。
ついでにそれ以降、桜井先生がおおっぴらにパーティに加わった。
……で、

「うわっ……ま、また負けた……って、若葉さん強すぎません？」
「そーぉ？　私だってそんなにやったことないわよ？」
「ったく、わが弟分ながら不甲斐ねェなぁ……ほら、代われ琥珀」
「ん？　先生格ゲーでき……うおっ！？　え、ちょ……あれ！？
空中にいる間にやられた！？」
「ひ、翡翠姉さん！？　何でこんなに強いの！？」
「ふふん……ざっとこんなもんよ」
（（……まさか……ちょくちょく来てるんじゃ……？））
とまあ、またしても無尽蔵の軍資金を武器にゲーセン中のゲームで遊んでみたりとか。
クレーンゲームでは私がお気に入りのぬいぐるみを根こそぎ取り（得意）、
格闘ゲーム・レースゲーム・シューティングゲーム・リズムゲームでは、桜井先生が９回ほど全国ハイスコアを叩き出し、
クイズゲーム・パズルゲームでは八雲がいずれも難易度ＭＡＸで全問正解＆最高得点（９９９９９９９９ｐｔ）という偉業を成してゲーマー達から神格視されてしまった。

その後は駄菓子屋に行って、

「これ……工業用接着剤じゃないんですか……？」
「水あめよ水あめ。罰当たりなこと言わないの。ふがし食べる？」
「あー……大人になってからこういうとこ来ると、大人の財力で一気に１００個とか２００個とか買いたくなるよなー……」
「そんな子供以下の大人げない真似はやめてくださいね桜井先生」
未来にはまずないであろう原始的お菓子類を食べさせてやったりとか。
「あの……これも砂糖ですよね？」
「カルメ焼きだっつの。おいしいわよ、意外と。安いし」

その後行ったカラオケ屋では、
「わー！　上手いですね若葉さん！　本職みたいです！」
「へへへ……そぉ？　ありがと」
「ほー……ずいぶん褒めるじゃねーか琥珀。あたしの時にはそんなこと言わなかったのに」
「え？　あ、まあその……翡翠姉さんも上手かったですよ、大人の情緒があって」
「褒めてんのかそれ？」
私がＪ－ｐｏｐを熱唱して、八雲は恥ずかしがりながらアニソンをいくつか歌って、桜井先生はデスメタルをノリノリで激唱した（……情緒？）。
ていうか……
「八雲、あんたよく『残酷な天使の〇ーゼ』なんて知ってたわね？
未来でも『エヴァンゲリ〇ン』とか流行ってるの？」
「あ、いえ、中学校の時の古典で習ったんです。ＯＰテーマソング付きで」
「マジでか」
知らなかった……あのアニメ、１２００年後には古典の教材になってるんだ……。

とまあこんな感じで、とにかく何も考えずに遊びまくった。
八雲は最初こそ戸惑ってたけど、すぐにその『理由とかそういうのがどうでもいい面白さ』を理解したらしく、年相応のテンションで遊びにふけっていた。
そして、その締めくくりには……

「うわぁ――――！！　すごぉ――――い！！」
「こらこら、窓開けんじゃないわよ？」

と、念願のＳＬに乗って、その窓から見える景色を見ながらおおはしゃぎの八雲。
「夢みたいです……こんな……動いているＳＬに乗れるなんて……」
ヒーローショーで、５人１組で１人の怪人をフルボッコにするカラフルな戦隊と握手できた時の子供のような目でご満悦の八雲を見て、桜井先生はため息。
「ったく……ただの移動手段でど～してそんなにはしゃげるのかね……？」
「男の子ってそういうもんですよ。今も、昔も」
未来も……かな？
こいつのこの時代での最後の思い出作りにはふさわしいだろう。
そう思って、昨日の夜にダメもとでこの観光用ＳＬに申し込んだら、偶然キャンセルが入っててチケットがとれた。ゆえに、こうして八雲と桜井先生と一緒に１時間ばかり乗ってみることにしたのである。
さぞ幸せだろう、未来の国宝に乗れて。記念の半券もあげるか。
「さて……そろそろ食うか、駅弁？」
「はい！」
「あ、これも憧れのシチュエーションなんだっけ？」

えっと……『汽車の中で駅弁』だっけか？　まあ、醍醐味っちゃそうかもだけどね……八雲の奴、誕生日ケーキの板チョコの乗ってる部分貰った子供みたく目が輝いてる……。１つ６３０円で買った普通の駅弁がそんなに楽しみか。

そういや……ずいぶん前に家族で乗った時もこんな感じで青葉がはしゃいでたっけ。やれやれ……男の子ってわかんないなあ。

至福の表情で弁当に箸をつける八雲を見ながら、私と桜井先生は肩をすくめた。

……そして……

時刻は……午後８時２８分。

あと３０分ちょいで……かえっちゃうんだ、八雲。

場所は、屋上。テレポートで帰ってきた。

いつも八雲と待ち合わせした場所で……私と八雲が、実質上初めての顔合わせをした場所でもある。ここで最後の３０分、テキトーに過ごすことにした。

「荷物とか、もう送ってあるんだっけ？　超買い物したけど」

「まあ……現時点で送ってあるわけじゃないですけど、僕が帰ると同時に未来に一緒に来る仕組みです。今はまだ、未来の当局が手配してくれた倉庫に」

「そっか……」

最後の夜にはふさわしく、空は暗いけど、雲ひとつない満天の星空。このあたりは空気が綺麗だから、星がよく見えるなあ……。

そういえば……あの時もこんな感じで、八雲が降りてきたのを流れ星だと思ったんだっけ。あの時はまだ、こんなＳＦ体験するなんて思ってなくて……青葉のことも、そんな未来の病気だとか、白川先生（あの頃は『白樺』か）が時間犯罪者だなんて思ってなくて……。

なんか……運命的ね。私が偶然八雲に会えて……八雲に振り回されて……そして助けてもらって……
「あれ？　そういえば……」
「？　どうしました？」
「その……ほら、あんたが前に言ってた、何で私はステルス張ってるあんたを見れたのか……ってアレ、結局何でかわかったの？」
知り合ってすぐのころ『他人には僕の姿は見えないはずなのに……』って言ってた。なのに、私は見ることができた。それって……もしかしてホントに私が『選ばれし者』だったとかいう落ちじゃないわよね……？
「ああ、それなら多分……」
と、

ＰＰＰＰＰＰ！！　ＰＰＰＰＰＰ！！

「「ん？」」
突然、八雲の腕時計が鳴り響いた。そしてそこに目を落とした八雲が、驚いて、
「え！？　ご、５分前！？」
「は！？」
ちょ……それどういうこと！？　８時までまだ３０分近くあるのに……。
と、今まで黙って遠い空を見ていた葉桜先生が気付いたように、
「あー、そりゃきっとアレだな、お前ら……白川を追いかけるときに時間超えて過去に来たろ？　ちょうどこの時間差分くらい。多分それだよ」
「あっ、そっか……タイムトラベルの時間制限は絶対時間だから……」
「ああ……一旦過去に飛んだ分、相対的な期限が早まったな」
つ、つまり……あの時の白川先生との超時空追いかけっこの果て

に、私たちは過去に来て止まった……。『９：００』っていうのは『そのまま、時間とか超えずに7日間過ごした』場合だから……いったん過去に戻っても、この時代に来てから経過した分の時間にそのまま加算されて計算される。『来てから1週間』っていうより、『来てから２４×７＝１６８時間』がタイムリミットだったんだ……。

つまり……あの時２０分くらい過去にきて、そのまま私たちは元の時間軸には戻らなかったから……実質のタイムリミットは９：００より２０分早まったと。

ってことは……あと5分弱でお別れ！？

「みたい……ですね、ははは」

「ははは、ってあんたね……」

相変わらず腹の立つ笑い方を……あんた、もう5分で私とお別れって時に、他に何か考えることはないわけ！？

「ほらほら、にらみ合うな少年少女。最後の最後にお互いにメッセージとかねーのか？」

と、若干無理やりだが桜井先生が仲介に入ってくれた。グッジョブ……なんだけど……いざそう言われると、なんか見つからないわね……。

「えっと……その……」

「あ、あの……ちゃ、ちゃんと向こうでもご飯食べなさいよ？」

「田舎の母親かお前は」

やば、パニクって言うこと決まらない……うう、カッコ悪……

と、

「あの、若葉さん」

「？」

「えっと、その……すごく楽しかったです、この7日間。若葉さんなしじゃ……こうはいきませんでした。おかげで資料も集まったし……忘れられない思い出ができたし……すごく感謝してます！」

と、まっすぐ目を見て八雲は言い切った。

その顔は笑ってたけど、すごく真剣で、それゆえに私は嬉しかった。役に立てたから……とか、そういうのじゃないわね。そう……これは……友達がうれしそうにしてると、自然とこっちも嬉しくなるって言うか……そういうやつだ。この感覚は。

やれやれ……たった7日間でねえ……。

「こっちこそ、一生忘れられないような体験、一生分させてもらったわよ。楽しかった。それに……ありがと、青葉達を助けてくれて」

「あ、はい。それでその……よろしければこれを」

「？　これは？」

と、八雲は何やら薄いカードみたいなものを取り出して、私に差し出してきた。何かしらこれ……ぱっと見テレホンカードみたいだけど……

私がそれを手にとると、八雲はその中心部のマークを指で円を描くようになでた。と、

ヒュン

「おわ！？」

ほ、立体映像（ホログラム）！？　しかも、画像になってるこれは……今日の私たち？

花見で食べ歩き、ゲーセンで熱闘、ＳＬで大はしゃぎ……今日の私たちの様子を写した立体画像が、次々とそのカードの表面から浮かんだ。

もしかしてこれ……未来の世界のアルバム？

「よければ……記念ということで、持っていて下さい。差し上げますから」

「え？　いいの？　これ、未来技術（オーバーテクノロジー）この時代に置いてくことになっちゃうじゃん。」

「そこはまあ……それ開発したのも僕なんで、職権乱用で何とか」

問題発言が聞こえた気がしたけど、目をつぶろう。これ、欲しい

し。
後ろの方で『うんうん、わかってきたな』なんて声が聞こえたのも含めて。
と、
『30秒前です』
……そっか、もう、か……。
ホントはまだまだ話せるもんなら話したいけど、今、もう時間ないし。それに……軽い感じで言いたいこと全部言いあったし、なんかすっきりしたな……。
今のままのこの感じなら……笑って別れられるな。決めた、このままいこ。
「それじゃあ、この辺で。翡翠姉さん、後よろしくです」
「了解」
「あれ？　桜井先生、帰らないんだ？」
「色々とやることがあるんでな。まずはコイツだけだ」
先生がそう言いきったところで、ふわっ、と、八雲の体が宙に浮いた。同時に、その体をオレンジ色の陽炎のような光が包む。……それが、はじめの日に見た『流れ星』と同じ色だということに気付くのに、そう長くかからなかった。
「じゃあ……僕はこれで。若葉さん、さようなら」
「……うん、じゃあね、琥珀」
「「え？」」
と、桜井先生と八雲……琥珀が、今の私のセリフに驚いて目を点にする。……何よ？
「嫌？　私にこう呼ばれんのは」
「……いえ、とんでもない！」
八雲を包む光が強くなっていく。目を開けているのがだんだんきつくなってきた。それでも……私には、その向こうで笑っている琥

珀がはっきり見えた。
お互いに、もう数秒もない、と悟る。そして、
「それじゃあ、また！」
「ええ、またね、琥珀！」
瞬間、
ヒュンッ！
コンコルドも真っ青のすさまじいスピードで、琥珀は天に上って行った。
ああ、超長距離の時間跳躍には、成層圏まで飛んで加速する必要が……とか言ってたっけ。それか……。まるで怪獣倒したウル〇ラマンみたいに帰ってったわね……。
にしても……『また！』に『またね！』かぁ……。
未来人と現代人……もう会うことなんてないだろうに……そう思いたくなくてあの返事、お互いまだガキね。
「……帰るか、常盤。送るぜ？」
「……はい、そうですね」
あんまりそうしたくないけど……桜井先生の問いに、肯定で答える。
桜井先生は、何も言わずに私の肩にポンと手を置き、次の瞬間テレポートを作動させ……と、その時、
「あ……」
流れ星が見えた。テレポート直前の……一瞬だけ。
それが本物か、もしくはまた琥珀かはわからない。けど……私は願い事をした。

『迷惑じゃなければ……またあのバカに会えますように……』

こうして、未来人・八雲琥珀と、私・常盤若葉の非日常的な7日間は終わりを告げた。

そして、夏

２０１０年　ある夏の日　屋上

「……暑……」

陽炎がそこらに見られるようになり、気温、湿度共に上昇し始めた今は、梅雨も初夏も過ぎた夏本番まっ盛り。……あいつが帰ってから、既に２ヶ月くらい経っていた。

あの後、色々と変わったことや、元通りになったことがあった。

白川先生の失踪については、『時空警察が来て未来に連行されました』なんて言えるはずもないので、桜井先生が手をまわして『実家の都合で帰りました』てな感じでまとめた。クラス担任教師の突然の退職とあってさすがに一時は話題となったが、代行の教師がすぐに来たので、みんな割とすぐ話題にしなくなった。

クラスのみんなはあの後２、３日で全員が完全復活。無論、琴子も、青葉もだ。

琴子は復活後、無事レギュラーとして大会に出場。地区大会、県大会を通過するものの、ブロック大会で惜しくも敗け、『秋の大会でリベンジする！』と意気込んでいた。

青葉の方も復活し、約束通り作ってあげた『若葉特製フルコース』をぺろりと平らげ、満足そうに笑っていた。あの笑顔を思い出すと、ふっと口元がゆるむ。

みんな元通りになって、前までと同じようにワイワイ騒いで楽しくやれている。無論、私もそういう風にやれてるけど……

……やっぱ、何か『足りない』っていう点は否めない。

「はー……未来人のくせに記憶消去とかしないで帰るんだもんな、

あいつ……してほしくないけど」
「何ブツブツ言ってんの、若葉？」
「ん？　……ああ、琴子」
と、私の視界に、逆さの……つまり、寝転んでる私の顔を頭側から覗き込んでいる、竹内琴子の顔が入ってきた。
「最近あんた、ここ来るの好きね？　もう部の勧誘も収まったのに……」
「……ん、まあ、気まぐれよ」
「噂になったわよね？　宇宙人と交信してる……って」
「ああ……そーいえば、オカルト研の奴からインタビューされたっけ」
全く……あたしゃ別にキャトられてもないし、頭にチップ埋め込まれてもいないっての。
……まあ、でも……
「未来人となら交信してみたいけどね」
「は？」
「なんでもない。それより……何か用？」
と、琴子は私に聞かれてようやく思い出したように、
「あ、うん。葉桜先生が呼んでた。なるべく早くって」
「さく……葉桜先生が？」

☆☆☆

変わったところ、まだあった。
葉桜先生もとい、桜井先生と過ごす時間が増えた。既に事情を知ってるということで、色々と仕事を手伝ってもらう上で都合がいいらしく、たびたび呼び出される。まあ、別にいいんだけどね、どうせ暇だし、合間合間に未来の面白い話とか聞かせてもらえるし。たまにアイスとかおごってもらえるし。
そういえば、最後まで謎だった『何で私にはステルスかけてる琥

珀が見えたのか』っていう疑問の答えも、桜井先生に教えてもらった。
どうやら、私が弟と同じく『赤鬼病』の病原菌入りジュースを飲んだ際、なんと私の体はその驚異的な免疫機能でもって抗体を作成し、症状が出る暇もなく自然治癒させてしまったのだという。
ただ、その際に目にまで入り込んでいたウイルスの影響で、私の両目の構造が若干突然変異したらしい。……何だっけ？　その……常人の約数千倍の偏角・偏波長光線を受容することができるように……まあ早い話が、普通の目とは違うすごい目になって、あらゆる光学ステルスを無力化する力を持つとのことだ。視力なんか両目４．０になってたし。
『後遺症』と呼べる形でそのまま残ったそれは、ワクチンでも治らないらしい。まあ……別に日常生活に何ら差しさわりはないからいいけど。
でもまあ……変な偶然ね。病気のおかげで手に入れた目のおかげで、八雲とであえた……そして、みんな助けることができた……。運命的じゃない？
……とまあ、だいぶ脱線したけど、今日の仕事は『資料整理』だった。それがまた結構な量だったせいで、すっかり暗くなってしまった。時刻は……午後６時５５分。
「さて……すっかり遅くなっちまったな、悪いな常盤」
「いいですよ、今日は青葉も夜練で遅いんで」
夜は冷蔵庫の中にドリアがあるよ……って言ってあるしね。
「ああ……剣道部だっけか？　全国で準々決勝行ったらしいじゃん、すげーな」
「えへへ……私も練習の相手してあげた甲斐がありました。」
「相手？　大丈夫なのかお前、怪我とか。剣道初心者なんだろ？」
「大丈夫ですよ？　今のところ生涯戦績１９６対４で勝ち越してますし」
「全中ベスト８相手に何だその数字……？」

と、先生はため息をついたところで、
「ま、いいか……ところで常盤。今日の礼ってわけじゃないが……」
「はい？　何……え？」
と、先生はポンと肩に手をやって、次の瞬間、

ギュオン

「！？」
耳慣れた音と、体に染みついた浮遊感が私を包み……暗転した視界が回復すると、私は見慣れた学校の屋上にいた。
えっと……何でテレポート？　しかも屋上？
「あの……先生……何を……」
「上、見てみ？」
「上？」
言われた通り上を見る。そこには……特に何の変哲もない、満天の星空。
「夏の大三角形、見えるか？」
「？　ええ……見えますけど、よく」
デネブ、ベガ、アルタイル……3つの特に輝く星からなる3角形が、きらりと夜空を彩っている。私……昔っからこういうの好きだっけな……やっぱきれいだし。
でも……それが何か？　お礼とか、意味がよく……
「見ててみ？　アレ今から、夏の大平行四辺形になっから」
「は！？」
「いいから……お、10……9……8……」
！？　あの……全く意味わからないんですけど。
怪しげなカウントダウンを始めた桜井先生は、何を聞いても応えてくれない。仕方がないので、黙って空を見ていると……
「2……1……ピカッ！　……ってか」

……ん？

何か今光った……っていうか、アレ！？　ホントに明るい星が一つ増えて、三角形が平行四辺形に！？　ちょ……何これ、超常現象！？

ていうか……だんだんあの星大きく明るくなって……え！？　もしかしてアレ、落ちてきてる！？　まっすぐこの辺に！？　アレ流れ星！？　隕石！？

ちょ、ホント待て！　学校とかこの辺に隕石なんて落ちたら大変なことに……ん！？

『流れ星』……そのフレーズに私が妙な違和感を抱き、思考がその一瞬だけ停止した間に、

その『流れ星』は、目も眩むほどの強さの光とともに……この屋上に一直線に落下した。ただし、異様なことに……何も破壊することなく。

飛来の際に巻き起こった爆風にひるんでいる私が、全く動揺していない桜井先生の分も動揺しながら、未だ強烈な光を放ち続けているその流れ星をどうにか見ると……

その光はすぐにおさまり……その中から……

「あ、ども、若葉さん」

「……は？」

いや、ちょ……こ……こ……

「琥珀――――！！？」

２か月前に未来に帰っていった……八雲琥珀がそこに立っていた。
特徴的な白学ランといい、その明るい茶髪といい……間違いない。
私とともに数々のクラスメイトを死の危機から救った、見た目はただの天然少年、その実態はＳＳランクの超天才科学者、っていうか未来人、八雲琥珀本人だ。
あの、ちょっと、話がまだ見えない……え！？　何で琥珀がここに！？　帰ってきたの！？
「ちょ……何で！？　何でまたこの時代に来てんの！？」
「え？　いやほら……夏ですから」
「理由になってないよ！？　日本語話そう！？」
私の脳内辞書にある限りでは、『夏』という単語にそれほど深い意味はないはず。
と、パニック状態になってる私を何とか落ち着かせようと、ぽんぽんと両肩を叩きながら琥珀は、
「いや、だからほら、僕……前回春に来た時に、色々買い物したじゃないですか？」
「え？　あ……まあ、そうだったわね？」
「それでほら……夏は夏で、夏しか手に入らないものがあるじゃないですか？　ほら……かき氷とか、水風船とか」
なん？
え、ちょ……まさか……
「あとはまあ、旬ものの夏野菜とか……そういうもの買いたくて、また来ました」
「お前は！」
また『ちょっとデパートまで』感覚で時間超えて買い物に来たんかい！　いや、どうせ研究のためなんだろうけど！
ていうか、もう自由研究終わったんじゃないの！？　まさか、あんた趣味で……

「あ、いえ、まだ自由研究終わってませんし……っていうか、僕的にはまだ、若葉さんや翡翠姉さんと別れて1日経ってないので」
「はぁ！？　何言ってんの、もう2カ月……」
と、そこまで言って、気付いた。たしかコイツ……季節とか、時間軸とか関係なく飛んでこられる……。ということはまさか……
その疑問にため息交じりに答えてくれたのは、桜井先生だった。
「要するにコイツ、未来に戻った『次の日』の琥珀なんだよ。こいつは向こうに戻って、1日かけて集めた資料全部整理して、かんたんにレポートの草案書いて、で、すぐこっちに戻ってきたわけ。こっちの季節が『夏』にシフトしてる時期を選んで」
……つーことは何か、私や桜井先生はあんたと会わずに2カ月過ごしたってのに、あんた的には昨日私たちと別れたばっかりなわけか？
な、なんでそんなトンボ返りな……ていうか、今の話だと……つまり……
「今……つまり、『夏』また来た、ってことは……この後帰ったとして、『秋』と『冬』もまた来ると？」
「もちろん！　旬ものをその他、有力な資料をコンプリートしに。あと、夏の風物詩なども経験しに。自由研究は完璧にしたいですから！」
「……」
なんか……何も言えない……。
この男……どうやら向こうでのひと夏（しかもその数日）のうちに、この過去の世界の春夏秋冬全部を訪れるつもりらしい。で……その案内を私にやれと……？
「ご安心ください。今回は、若葉さんの夏休みが1カ月ということを考慮しまして、その期間にあうように1カ月超の期間をとってありますから」
夏休み全部使ってお前の案内しろってか！？　どのへんで安心すんのよ！？

ああもう……全然ゆっくりできなさそう……夏休み、来週からなのに……。
ため息をこらえられなかったけど……本心の中では、私は既に『どこに連れて行ったらいいかな』なんてことを考えていた。……なんだかんだ言って、コイツといると退屈しないし……賑やかでいいのよね、なんか。
しゃーないな、やってやるか……もう、乗りかかった船だ！
と、いつの間にか顔が笑っていたらしい私を見て、
「よし！　んじゃ、せっかく久しぶりに3人そろったんだし、飯でも食いに行くか！」
「「賛成――――っ！」」
金はお前持ちな、と付け足すのを忘れない桜井先生の提案で、私たちは手始めに『夏のカラオケ屋（メニュー片っ端から注文）』から、八雲のレポートの『夏編』をスタートさせることにした。……って、絵日記になりそうね。

色々と予想外すぎて正直パニクってるけど、こうなったらもう、本気でやってあげる！　海にプール、夏祭りに花火大会、肝試しにキャンプ、そして夏休みの宿題の分担作業まで、余すことなくとことん２０１０年の夏を堪能させてやるわ！　軍資金はコイツ持ちで！
またいつか未来に帰っちゃうその時まで、絶対忘れられない夏をあんたに経験させてあげようじゃないの！　秋も冬もねっ！

「そんじゃまあ！　コイツの2カ月ぶりもしくは1日ぶりの帰還を祝って！」
生ビール（ジョッキ）を手に、桜井先生が、
「3人でこの夏も、秋も冬も楽しく過ごせることを祈って！」
琥珀はアイスミルクで声を張って、
「琥珀の未来の世界での素晴らしいレポートの完成を願って！」

で、これ私ね。Ｗｉｔｈコーラ。

「「「乾パァ――――――イ！！！」」」

借り切ったパーティルームで、私たちは何も考えずに、ただその場のノリで前払いの祝杯をあげた。

高校生らしく、楽しむことだけ考えて……。

……これもいつか、コイツの……八雲琥珀のレポートの１ページになるんだろうな……。

その時、私はどんな風にそこに書かれてるのかな……？

私がそれを読むことなんてないんだろうけど……なんだか楽しみになるから不思議よね。

せいぜい……いいレポート書きなさいよ、天才科学者さん♪

☆☆☆

八雲レポート……完

そして、夏（後書き）

八雲レポート、読んでいただきありがとうございます。

いや～……自分のＳＦ処女作ですが、自己満足ではうまくいった方だと思ってたり……あ、すいません、調子乗りました。

ともかく、とりあえず伏線も全部回収できたし、自分の全力をぶつけた作品を書いて、それを皆さんに読んでいただけた、と思うと、とてもうれしいです。

もちろん、これを読んで『面白い！』と思っていただけたのならなおさらのこと。作者冥利に尽きます。

これにて、八雲琥珀と常盤若葉の非日常ストーリーは終わりです。

続編は……今のところ考えていません。

いかがだったでしょうか。彼らの冒険（？）が皆さまの心の内にどのような印象で映ったか、サイコメトラーでもない僕には知るすべはありませんが、笑顔になっていただけたことを切に祈っている次第です。

感想など、ドキドキしながらお待ちしております。

それでは、またいつかご縁があれば。和尚でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4429n/

八雲レポート

2010年10月8日13時48分発行